

地宝のひびき

— 和歌山県内文化財調査報告会 —

資料集



平成25年(2013)9月1日(日)

公益財団法人 和歌山県文化財センター



銀装太刀(1号墳)

(御坊市教育委員会 提供)



鍔座金具(1号墳)

(御坊市教育委員会 提供)



銅鏡・銅釧・勾玉(3号墳)

(御坊市教育委員会 提供)



大威徳明王像御正体

(新宮市 提供)

新宮市 熊野阿須賀神社境内出土の御正体



地震痕跡

(和歌山市教育委員会 提供)



水田状遺構

(和歌山市教育委員会 提供)

和歌山市 井辺遺跡



調査区遠景



初期須恵器

開催にあたって

この「地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－」は、和歌山県内の文化財調査担当者が最新の調査成果を報告し、県民のみなさまに県内文化財の知識を深めていただこうと企画いたしました。

今回の報告会では、文化財保護の最前線で調査にあたっておられる5人の担当者の方々から、調査成果を報告していただきます。その内容は、先ず近年の和歌山県内における発掘調査についての概要報告、次に、本年5月に新たに県指定文化財に指定された考古資料についての2本の報告、さらに昨年度実施された埋蔵文化財発掘調査成果についての2本の報告となっています。また、誌上発表においては、最新の発掘調査速報とともに、整理作業を経て報告書が刊行された近年の調査成果についても掲載しております。

この報告会が、文化財を身近に感じていただける機会となりましたら幸いです。最後になりましたが、この報告会に、ご参加いただきました皆様、ご協力をいただきました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝いたします。

平成25年9月1日

公益財団法人和歌山県文化財センター

理事長 工 楽 善 通

目 次

日 程	4
-----	---

掲載遺跡位置図	5
---------	---

発 表	6
-----	---

I 近年の和歌山県内の発掘調査 ー和歌山県内の発掘調査を楽しむ4つのポイントー	
和歌山県教育委員会	田 中 元 浩…… 6
II 有間皇子墓の有力地から発見された副葬品 ー御坊市 岩内1号墳・3号墳の出土遺物ー	
御坊市教育委員会	前 田 和 彦…… 8
III 熊野信仰のかたち ー新宮市 熊野阿須賀神社境内の御正体ー	
新宮市教育委員会	小 林 高 太……14
IV 地震痕跡と水田状遺構 ー和歌山市 井辺遺跡の発掘調査ー	
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団	藤 藪 勝 則……20
V 初期須恵器が発見された遺跡 ー和歌山市 平井II遺跡の発掘調査ー	
公益財団法人 和歌山県文化財センター	井 石 好 裕……26

誌 上 発 表	30
---------	----

記念物・文化的景観

1 吹上口御勘定御門東櫓台と二の丸大奥御殿向裏庭の調査 ー和歌山市 国指定史跡 和歌山城ー	
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団	北 野 隆 亮……30
2 妹背山三断橋整備事業 ー和歌山市 国指定名勝 和歌の浦ー	
公益財団法人 和歌山県文化財センター	渋谷 高 秀……34
3 砂上の首長古墳 ー有田市 県指定史跡 椒古墳ー	
有田市教育委員会	西 岡 巖……38
4 国の重要文化的景観選定に向けて ー有田川町 蘭島及び三田・清水の農山村景観ー	
有田川町教育委員会	川 口 修 実……42

埋 蔵 文 化 財

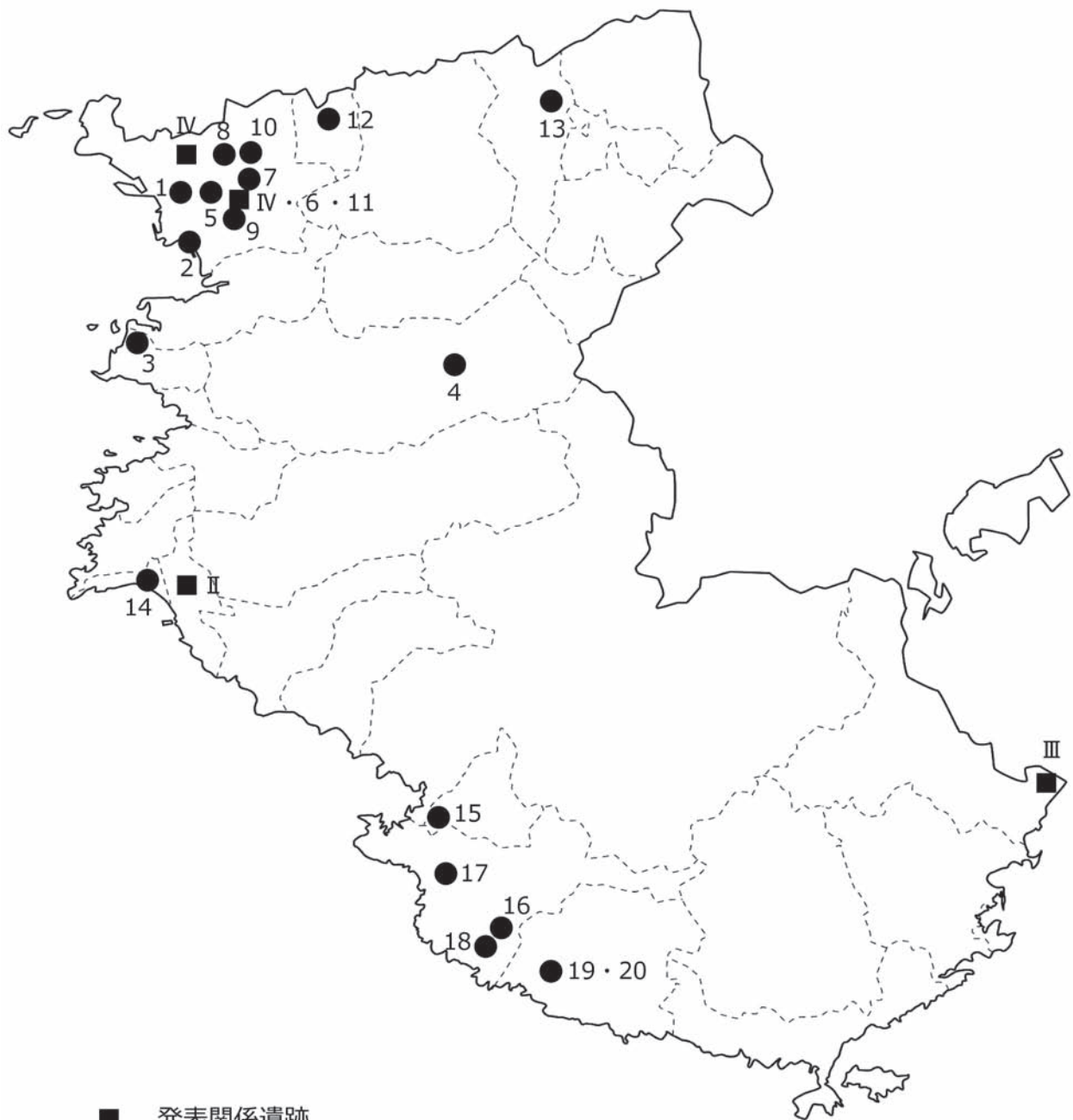
- 5 太田・黒田で見つかった中世大溝について ー和歌山市 太田・黒田遺跡ー
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 内 田 和 典……46
- 6 前方後方形墳丘墓の調査 ー和歌山市 井辺遺跡ー
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 菊 井 佳 弥……48
- 7 古墳時代から古代にもあった岩橋集落 ー和歌山市 岩橋遺跡ー
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 内 田 和 典……52
- 8 紀ノ川北岸の集落遺跡 ー和歌山市 六十谷遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 津 村 かおり……56
- 9 旧河道が検出された遺跡 ー和歌山市 和田遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 津 村 かおり……58
- 10 集落の変遷 ー和歌山市 田屋遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖……60
- 11 地形に合わせた土地利用 ー和歌山市 井辺遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖……64
- 12 根来寺遺跡境内外の調査 ー岩出市 根来寺遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 村 田 弘……68
- 13 紀の川中流域における弥生中期前葉土器の類例加わる ーかつらぎ町 西飯降Ⅱ遺跡ー
かつらぎ町教育委員会 和 田 大 作……72
- 14 出土遺物から見える景色 ー美浜町 和田Ⅱ遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖……74
- 15 弥生時代の集落は何処に ー上富田町 岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 佐 伯 和 也……76
- 16 熊野水軍の城 ー白浜町 中山城跡・安宅本城跡ー
白浜町教育委員会 佐 藤 純 一……78
- 17 土坑から土師器などが大量に出土 ー白浜町 田ノ口遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 寺 西 朗 平……82
- 18 日置川流域の歴史 ー白浜町 大古Ⅱ遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖……84
- 19 農耕社会成立期の木製品生産地 ーすさみ町 立野遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 川 崎 雅 史……88
- 20 古代の流路跡から木製品が出土 ーすさみ町 立野遺跡ー
公益財団法人 和歌山県文化財センター 寺 西 朗 平……92

日 程

- 12:00 開 場
- 13:00 開会あいさつ
- 13:00 近年の和歌山県内の発掘調査 ―和歌山県内の発掘調査を楽しむ4つのポイント―
田 中 元 浩 氏（和歌山県教育委員会）
- 13:50 有間皇子墓の有力地から発見された副葬品
―御坊市 岩内1号墳・3号墳の出土遺物―
前 田 和 彦 氏（御坊市教育委員会）
- 14:30 熊野信仰のかたち ―新宮市 熊野阿須賀神社境内の御正体―
小 林 高 太 氏（新宮市教育委員会）
- 15:10 休 憩
- 15:20 地震痕跡と水田状遺構 ―和歌山市 井辺遺跡の発掘調査―
藤 藪 勝 則 氏（公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団）
- 16:00 初期須恵器が発見された遺跡 ―和歌山市 平井Ⅱ遺跡の発掘調査―
井 石 好 裕（公益財団法人 和歌山県文化財センター）
- 16:40 講評・閉会あいさつ

主 催 公益財団法人 和歌山県文化財センター
後 援 和歌山県教育委員会・和歌山市教育委員会・岩出市教育委員会・有田市教育委員会
新宮市教育委員会・御坊市教育委員会・有田川町教育委員会・美浜町教育委員会
かつらぎ町教育委員会・白浜町教育委員会・上富田町教育委員会・すさみ町教育委員会
公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団・一般社団法人 和歌山県文化財研究会

 平成25年度 文化庁文化芸術振興費補助金(地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業)



※アルファベットと数字は、目次のものと一致します。

掲載遺跡 位置図

近年の和歌山県内の発掘調査 —和歌山県内の発掘調査を楽しむ4つのポイント—

和歌山県教育委員会 田 中 元 浩

1. 考古学と埋蔵文化財—発掘調査はなぜ必要か？—

考古学とは、遺跡の発掘調査で出土した遺物や遺構から、過去（1000年以上）の人間活動、集団、社会を復元する学問です。考古学や発掘調査の楽しさは、銅鐸や鏡や、王宮や古墳などの発見といった体験することのできない過去の世界との対話にあるといっているでしょう。そして何よりも重要なのは、「この場所で」という身の回りで過去の世界が明らかになる臨場感と親近感。教科書に出てくる歴史とは違う身近な歴史に触れることができます。

ところで、考古学や発掘調査で対象とされる遺跡や遺物、遺構は、どのように守られているのでしょうか。文化財保護法では、文化財を「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物（史跡・名勝・天然記念物）」、「文化的景観」、「伝統的建造物群」の6つに分類し、重要なものは国が指定、選定、登録し、保護や把握をしています。一方、発掘調査の対象となる遺跡や遺構、遺物は、「埋蔵文化財」として土地に埋蔵されている文化財とされています。

我々が一般的に「遺跡」というものは、各地で「周知の埋蔵文化財包蔵地」として把握されたものであり、和歌山県内には、およそ3000カ所以上存在しています。周知の埋蔵文化財包蔵地内で掘削を伴う工事を行う場合、文化財保護法に基づき届出及び通知が必要となります。もし、工事などにより現地で埋蔵文化財が保存できない場合は、保存に代わるやむをえない手段として発掘調査を行い、取り上げや記録作成を行っています。実は、我々が日常接している発掘調査の多くは、開発により壊されてしまう遺跡を記録保存するための発掘調査なのです。

2. 44年ぶりの開催へカウントダウン！—紀の国わかやま国体の開催と発掘調査—

2015年、和歌山県では大きなイベントを控えています。それは、44年ぶりの和歌山県での開催となる「国体」の開催です。今回の国体は、『紀の国わかやま国体 第70回国民体育大会—躍動と歓喜、そして絆—』として県内全市町村で各種競技が行われます。

実は、この国体開催は、埋蔵文化財の発掘調査にも大きな影響を与えています。国体開催を目標に競技施設の整備はもちろん、南北に長い県内のアクセスを向上するため、高速道路をはじめとした県内各地の道路網の整備がなされています。目下、国体開催を目標に京奈和自動車道、第二阪和国道、近畿自動車道紀勢線の高速道路が急ピッチで建設されています。道路の建設予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地が該当する箇所があり、開発事業の実施と埋蔵文化財の保存を調整した結果、発掘調査を行う場合があります。

そのため、道路建設のピークにある和歌山県では、過去にない規模と膨大な数の発掘調査が実施されています。もちろん、これらの発掘調査により、和歌山県の歴史を解明する成果があがっています。ここでは、すべての発掘調査を挙げることはできませんが、代表的なものを紹介します。まず、京奈和自動車道では、西日本最大級の縄文時代の堅穴建物が発見されたかつらぎ町中飯降遺跡（平成20～21年）、鹿の絵画土器の出土した集落跡であるかつらぎ町西飯降Ⅱ遺跡（平成18～20年）、新規発見の遺跡となる紀の川市重行遺跡（平成

20～21年)、中世の古道と子院跡を検出した岩出市根来寺遺跡(平成23～25年)などの発掘調査が行われています。

次に、近畿自動車道紀勢線では、古代の石帯が出土した田辺市稲成Ⅰ遺跡(平成23年)、平安時代の二彩や権状石製品が出土した白浜町田ノ口遺跡(平成24年)、弥生時代の集落跡と屋外調理場を発見した白浜町大古Ⅱ遺跡(平成23年)、農耕開始期の多数の木製品が発見されたすさみ町立野遺跡(平成23年～24年)と数多くの発掘調査が行われています。

また、第二阪和国道では、古墳時代中期の朝鮮半島系の土器が出土した和歌山市平井遺跡、平井Ⅱ遺跡(平成24～現在)で発掘調査が行われています。以上のように、高速道路の建設により数多くの発掘調査が行われ、今まで内容のよくわからなかった地域でも大きな発見が相次いでいます。この他、主要県道の建設においても発掘調査が行われています。現在、調査中の遺跡もあり、今後の調査成果にも期待されます。

3. 岩橋千塚古墳群とその集落の解明―謎の古代氏族紀氏に迫る調査成果―

近年、目覚ましい発掘調査成果の一つとして、紀伊最大級の古墳である大日山35号墳の発掘調査成果が挙げられます(平成15～17年)。造り出し部分の発掘調査では、羽を広げて飛ぶ鳥や、胡籙形埴輪、両面人物埴輪、高床の家形埴輪などが出土しています。大日山35号墳の埴輪は、当時の大王墓と共通する埴輪を持つ点も多く、古代氏族の紀氏の実態解明にむけて大きな発掘調査成果となりました。岩橋千塚古墳群に関わるものとしてもう一つ注目されるのが、紀ノ川河床から見つかった巨大クスノキです。岩橋千塚古墳群が築かれた時代の木として引き上げられ、現在は紀伊風土記の丘に保管されています。

また、岩橋千塚古墳群を築いた人々の住んでいた集落遺跡についても、和歌山平野で多くの発掘調査が実施され、その様相が判明してきました。和歌山市秋月遺跡では、古墳時代の各時期の古墳が見つかっており岩橋千塚古墳群とは別に平地部でも古墳が築かれたことがわかっています(平成20年)。また、井辺遺跡では、自然流路沿いに古墳時代の集落が存在していたことがわかり、自然流路からは多数の木製品が見つかっています(平成22～23年)。この他、和歌山市の調査では、竪穴建物や前方後方形の周溝墓などが発見されています(平成24年)。また、神前遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての十数条もの溝が発見され、農耕水路と考えられています(平成21～23年)。この他、琴柱形石製品が出土した坂田遺跡(平成21年)や、中世以前は「塩入荒野」とされてきた和田遺跡でも古墳時代の集落に関わる遺構が検出され、古墳時代の集落の状況が判明してきました(平成24～25年)。

4. 「遺跡の発掘」から「資料の再発掘」へ

遺跡の発掘調査以外にも、過去に発掘された遺物を現在の研究視点から検討し再び光を当てる「資料の再発掘」も盛んに行われています。和歌山県では、遺物＝「考古資料」の県指定文化財(有形文化財)への指定を進めており、平成25年度は、新宮市熊野阿須賀神社出土品や、御坊市岩内1号墳・3号墳出土品の指定を行いました。また、県立紀伊風土記の丘特別展『紀伊弥生時代の至宝』でご覧いただいたとおり、県内には全国屈指の数の銅鐸が存在し、これら「きのくにの銅鐸」についても指定や公開を進めています。県内には、一級品の考古資料がまだまだ存在し、それを再発掘しみなさんに伝えていくのも重要な仕事です。

有間皇子墓の有力地から発見された副葬品 —御坊市 岩内1号墳・3号墳の出土遺物—

御坊市教育委員会 前田 和彦

「岩内1号墳・3号墳出土遺物」が、和歌山県の古墳時代終末期の葬送儀礼と工芸技術を示す重要な考古資料（岩内1号墳）、古墳時代中期前半における葬送儀礼と当時の副葬品の良好なセット関係を示す重要な考古資料（岩内3号墳）であるとして、平成25年5月30日付で和歌山県の有形文化財に指定されました。

今回、古墳とその出土遺物の概要等について紹介を行いたい。

1. 岩内古墳群の概要

岩内1号墳および岩内3号墳は、日高川河口より約2km上流の左岸丘陵上に位置し、少なくとも9基の古墳で構成される古墳群（岩内古墳群）であったが、現在確認できるのは、1号墳と3号墳のみである。9基の古墳のうち6基の古墳は開墾、開発等により既に消滅し、2・4～7号墳は詳細が全く分かっていないのが現状である。消滅した古墳のなかで9号墳は唯一発掘調査が実施され、両袖式の横穴式石室を主体部とする古墳で、出土遺物から数次の追葬が行われていたことが明らかになっている。



岩内古墳群位置図

2. 岩内1号墳の調査概要

岩内1号墳は、岩内字廣芝、標高約16mの平野部からはずれて周囲を丘陵に囲まれた谷あい東山池北側斜面上に位置している。

戦後まもなく医師で考古学者でもあった巽三郎氏が日高郡の未調査未記録古墳の調査をしていたときに偶然発見し、調査が実施された。

その後、昭和50年代に入り、御坊市で大規模な開発事業が進められ、それらの開発に事前に対処し、岩内古墳群の構成数や残存状況、さらにその性格を把握するための調査が御坊市により計画、実施された。昭和53年10月に御坊市教育委員会が墳丘の形態、残存状況のためのトレンチによる試掘調査、昭和54年度に御坊市教育委員会より委託された御坊市遺跡調査会により全面調査が実施された。

昭和54年6月9日に古墳が県の史跡に指定され、昭和57年度には、古墳の保存と野外研修の場として活用するため、墳丘・石室の復元と張芝・植樹等の周辺整備を含めた環境整備事業を実施した。

戦後すぐに行われた第1次の調査では、封土の大部分が取り除かれ天井石、側壁の一部等が破壊されていたものの奥壁・東壁・西側壁の一部が残存する横穴式石室の古墳で、玄



岩内1号墳近景



墳丘（昭和54年度調査時）



第2次床面下（昭和54年度調査時）

室内部には、土砂の混じった堆積物が約60cmあったが、調査の結果やや大きめの扁平な河原石を約220個敷詰め、その上に厚さ平均2cmの小礫を混入した粘土で覆い二重底となっていたことが判明している。遺物は、小礫が混じった粘土層の上から銀装大刀、大量の鉄釘、鍔座金具、須恵器坏身、須恵器長頸壺、土師器皿、土師器碗、漆残欠などが出土し、被葬者を鍔座金具を取り付けた漆塗木棺に納めた全国的にも数少ない終末期古墳であることが明らかとなった。

昭和53、54年度の調査では、周溝を検出し、一辺19.3m（周溝幅3mを含む）の方墳で、墳丘は版築によって築造されていた。埋葬施設は、南に開口した全長5.9mの両袖式の横穴式石室で、玄室は長さ2.48m、幅2m、羨道は長さ3.42m、幅は玄門付近で1.45m、入口付近で1.63mを測る。

羨道部で2回にわたる埋葬面を確認、造営当初の第1次床面は、入口側では10～25

cmの川原石のみを敷き、玄室側では1～3cmの砂利の上面に10～30cmの川原石を敷き、さらに白色粘土を貼って床面としていた。第2次床面は、第1次床面に淡黄褐色弱粘質土を盛って新たに床面としたもので、石室入口南側の墳丘斜面には第2次床面に伴う階段が墳丘を掘り込んで設けられ、階段は3段目まで残存していた。

玄室床面は造成によって攪乱を受け、羨道における2次にわたる埋葬面との関連を把握できなかったが、羨道入口付近の第2次床面下で掃き出された状態で大量の鉄釘などが出土した。第1次の調査で玄室からほぼ原位置を保って出土した副葬品は第2次床面に伴う遺物と考えられている。

3. 岩内3号墳の調査概要

岩内3号墳は、岩内字平田、川向かいに日高平野をのぞむことができる標高約20mに位置しており、周囲は畑地として開墾されている。周囲より3m程度高くなっていることから現状でも古墳であることがうかがえる。

昭和54年度に岩内古墳群の構成数や残存状況、さらにその性格を把握する目的で御坊市教育委員会より委託された御坊市遺跡調査会により発掘調査が実施され、昭和55年2月14日には、県史跡に指定されている。(岩内1号墳に追加指定)

調査は、内部主体および墳丘規模を明らかにするため墳頂部と墳丘裾部にトレンチを設け、さらに墳頂部のトレンチで2基の内部主体の存在が明らかになったことから、主体部の構造等把握するため調査区を拡張して実施している。

調査の結果、墳丘上が一部削平を受け、さらに畑地として利用されてはいたものの直径約28mの円墳で、幅約5m、幅約0.8mの周溝を巡らしていることが明らかになった。造営時期については、古墳時代中期前半頃と考えられている。

墳丘中央部では、2基の内部主体を検出。第1主体部においては、ほぼ完存の状況下での検出で木棺内外より多種多量の副葬遺物が出土した。第1主体部は、長さ約8m、幅約3m、深さ約1mの墓坑内に長さ5.53m、現存幅0.8mで復元すると直径約1mの割竹形木棺を直葬したもので、棺材も一部北側小口付近で残存していた。木棺は、墓坑内の東寄りの位置で、底面に直接据え置かれていた。木棺の埋納は、まず地山と接する付近に白っぽい粘質土を充填して棺を固定し、その後20cm程度埋め戻した時点で棺の周囲を水平に均して副葬品を置いた後、再度10～20cmの厚さで土を均しながら埋め戻していた。



第1主体部遺物出土状況



第1主体部棺内遺物出土状況

遺物は、棺の内外からの出土が認められ、棺内からは、巴型銅器 1・仿製振文鏡 1・銅釧 3、鉄釧 2・碧玉製勾玉 1、管玉約 15、ガラス製小玉約 320、滑石製小玉約 130、豎櫛約 35・滑石製小型勾玉約 26・鉄製針 5・鉄斧 2・鉈 2・用途不明鉄製品 2 などが出土した。また、朱が棺内部の各所で認められている。これら一括の副葬品から、被葬者は鏡・玉類付近に頭部を置き北頭位で葬られ、棺内部全体に朱を施していたと考えられている。

棺外からは、墓坑内に木棺を据え、墓坑底面から約 20 cm の埋土をおこなったのち、棺側壁に沿ってほぼ水平レベルで遺物を副葬していた。棺外中央から北側で武器類や農工具類が東西対をなすように、あたかも被葬者を守護するかのように一列に並べられていた。

棺東では、鉄鏃 21、鉄槍 1、振りをもつ鉄器 3、鉄剣 2、ガラス製小玉 1、棺西では、鉄斧 2、刀子 2、鉄鏃 19、鉈 5、錐約 4、直刀 1、鉄剣 2、鎌 5、大型豎櫛 1 が出土。

その他、棺東中央やや南寄りで鎌 5、南小口近くで鉄鏃約 26、棺西中央からやや南寄りでは小型刀子約 10、その南で鉄鏃約 4、手鎌 5 が出土している。このほか、抜き身と考えられる直刀 1 が出土している。

第 2 主体部は、第 1 主体部より新しく築かれており、第 1 主体部の東側肩口を一部切り込む形で位置する。墓坑は、長さ 4.2 m、幅 1.3 m、現存する深さ 0.4 m を測る。棺の構造や埋葬形態については明確にできていないが、痕跡から長さ約 3.9 m、現存幅 0.5 m の割竹形木棺を直葬していた可能性が考えられる。遺物は、鉄剣 1 点のみで、棺外の西側中央で、棺に沿うようにほぼ水平レベルを保ち出土している。

4. 出土遺物の概要

岩内 1 号墳および岩内 3 号墳からは多種多量の副葬品が出土しているが、おもな遺物の概要は以下のとおりである。

なお、平成 24 年度に奈良県立橿原考古学研究所に依頼して、デジタル透過 X 線写真撮影による構造調査および蛍光 X 線分析による材質調査を実施したので、その結果概要を合わせて掲載する。なお、この分析結果は概略的なものであり、今後の精査により内容が変更される場合があることをあらかじめお断りしておく。

【蛍光 X 線分析方法】

機器：携帯型蛍光 X 線分析計（日本電子 INNOV-X SYSTEMS α - 2000）、測定条件：ターゲット…タングステン（W）、管電圧…10~40kV、管電流…10~50 μ A、測定時間：200 秒（合金モードまたは土壌モード）、分析径：14 mm



岩内 1 号墳出土遺物



岩内 3 号墳出土遺物

＊銀装大刀（岩内 1 号墳）

出土時に刃部は寸断され、柄頭も失われていたが、全長約 71.7 cm に復元され、柄間には連珠文を打刻した幅 0.2 cm 前後、厚さ 0.1 cm 前後の断面三角形の銀線が巻かれている。鞘は黒漆塗で、鞘口金具と帯執用の環付足金物が付いている。

【蛍光 X 線分析結果】大刀破片は鉄、銅、金、銀を検出した。銅が顕著である一方、他の元素はごく微量であり、銅板状の部材に銀による装飾が施されているものと思われる。金は銀に含まれる不純物かと思われる。銀線は、鉄、銅、臭素、銀を検出した。銀が顕著であり銀製と考えられる。鞘口金具では、鉄、銅、臭素、銀を検出した。鉄、銅はごく微量で銀製と思われるがわずかに臭素を含んでいた。鐔では、チタン、クロム、鉄、銅、銀、鉛を検出した。鉄、鉛が顕著であり、チタン、クロム、銅、銀はわずかであった。資料は鉄製で、鉛は修復材料かと思われる。

＊鉄釧（岩内 3 号墳）

2 点が約 2 cm 程度スライドした状態で錆により付着している。どちらもほぼ完品であるが、全体に錆が覆い玉類や木質が付着している。形状は輪状で全周し、直径は 7.0 cm、7.0 ～ 7.5 cm である。

【蛍光 X 線分析結果】鉄、銅、鉛、水銀であった。鉄は顕著であるが、銅、鉛、水銀はごく微量であった。埋葬施設内で確認されている朱が水銀朱であるならば、本分析結果に見られる水銀は埋葬施設内で確認されている朱の成分である可能性が考えられる。

＊銅釧（岩内 3 号墳）

【蛍光 X 線分析結果】鉄、銅、鉛、水銀、銀、錫。銅、鉛、錫が顕著。水銀、銀は少量であった。水銀の由来は鉄釧同様で、銀の由来は水銀もしくは銅の不純物と考えられる。

＊巴型銅器（岩内 3 号墳）

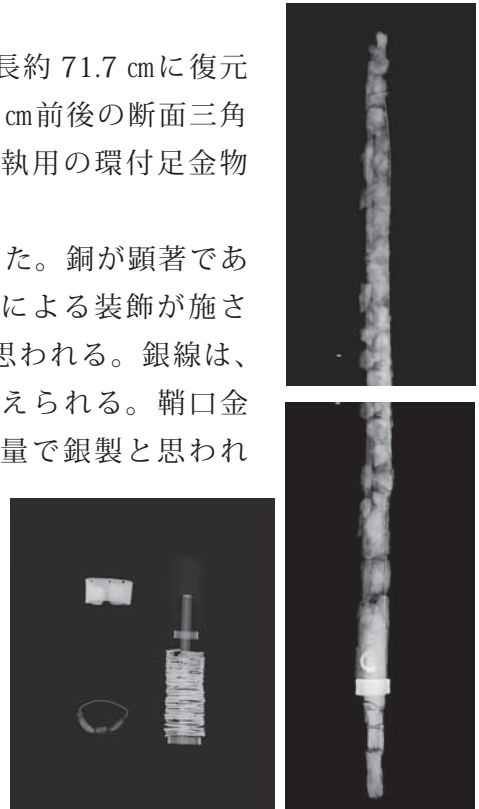
破損が激しく中央部の笠部のみが良好に残存するが巴部分は粉々に割れている。直径約 6.5cm で三巴と推定されるが四巴の可能性もある。

【蛍光 X 線分析結果】鉄、銅、鉛、ヒ素、銀、錫を検出した。銅、鉛、錫が顕著であり青銅製である。

＊豎櫛（岩内 3 号墳）

被葬者の頭位と考えられる鏡の周囲から約 34 点、足元から 1 点、棺外から 1 点出土。竹ひごを何本か束ねて、糸でしばり、U 字状に湾曲させ樹皮を带状に巻いて固定し、その下部で横棒を当てて歯となるひごを一本一本糸で固定している。上部には漆を塗布している。

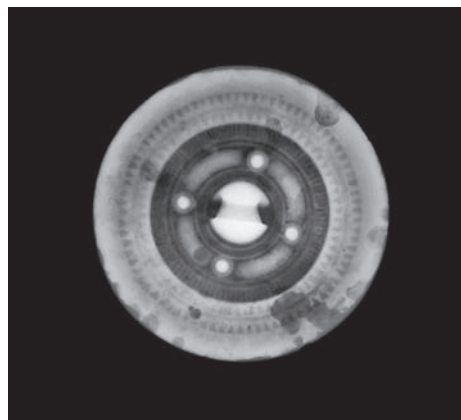
【蛍光 X 線分析結果（No. 5、No. 6）】鉄、銅、鉛、水銀を検出した。銅と鉛は出土時に近接していた鏡から溶出した成分が 2 次的に付着したものと考えられる。鉄と水銀はいずれも赤色顔料の材料となり得る元素である（鉄はベンガラ、水銀は水銀朱＝硫化水銀）。一方、鉄は土壤中に豊富に存在し、水銀は埋葬施設内で確認されている朱に利用されている可能性がある元素である。豎櫛に着色成分が存在した場合、鉄によるベンガラか水銀による水銀朱、



銀装大刀（デジタル透過 X 線写真）

あるいは両者併用によるものかは本分析結果からは判断できない。

＊仿製振文鏡（岩内3号墳）



仿製振文鏡（デジタル透過X線写真）

直径 9.3 cm で、厚さは外縁で 0.25 cm、内区平坦部が 0.1 cm で、鑄上がりが良好で背面の文様も鮮明である。文様構成は、中央に鈕を置き、内区は、乳で 4 つに区画し間に振文を配し、その外側に櫛歯文帯を巡らす。外区は、二重の鋸歯文帯を巡らしている。鈕は半球状で、直径 1.8 cm、高さ 0.7 cm で、鈕孔は縦 0.3 cm、横 0.6 cm の断面楕円形状を呈する。

【蛍光X線分析の結果】鉄、銅、鉛、ヒ素、銀、錫を検出した。銅、鉛、錫が顕著で錫が突出している。鉄、ヒ素、銀は少量。鏡はヒ素・鉛を含む青銅製と考えられる。錫

が突出したのは、埋蔵環境中で溶出しやすい銅が先に溶出し含有量が減少する一方、錫は残存しやすいため、相対的に錫の濃度が高まったものと考えられる。

5. 岩内1号墳の被葬者＝有間皇子説について

岩内1号墳については、先日お亡くなりになられた考古学者の森浩一氏などが「有間皇子」（640～658年）の墓であるとの説を提唱され、有力視されている。

有間皇子は、孝徳天皇の子として皇位継承者の一人でしたが、658年蘇我赤兄の謀略あるいは中大兄皇子（のちの天智天皇）の陰謀によって、紀伊の牟婁温湯（今の白浜温泉付近）に滞在中の中大兄皇子のもとに謀反の罪で連行・処刑された悲劇の皇子と呼ばれている人物です。

有間皇子説の根拠として、岩内1号墳が紀伊国で唯一に近い終末期古墳で、造営には版築技法が用いられ、六花形の鍔座金具をつけた全国でも数少ない漆塗木棺に銀装大刀などの副葬品とともにおさめられており皇族級の墓であった可能性が高いこと。また、孝徳天皇の近臣で有間皇子の事件に最後まで従い、有間皇子とともに殺された塩屋連鯛魚（しおやのむらじこのしろ）の根拠地が、現在の御坊市地域周辺（日高川下流地域）であったといわれていることなどがあげられている。

御坊市では、昨年（平成24年）11月10日に森浩一氏・万葉集研究の第一人者である駒木敏氏（同志社大学教授）などを迎えて「有間と宮子 ～御坊・日高に眠る古代史開眼～」と題したシンポジウムを開催したが、今後もさまざまな角度から議論が深まっていければと考えている。

【参考・引用文献】

巽三郎「紀伊国日高郡野口村大字岩内 岩内古墳調査概報」『紀伊考古学研究 創刊号』紀伊考古学研究会 1998

御坊市教育委員会『岩内古墳群発掘調査概報』1980

森浩一『敗者の古代史』中経出版 2013

熊野信仰のかたち

—新宮市 熊野阿須賀神社境内出土の御正体—

新宮市教育委員会 小林 高 太

発表要旨

熊野川畔の蓬萊山南麓に鎮座する阿須賀神社境内からは 191 点に及ぶ御正体が発見されている。昭和 34 年の伊勢湾台風襲来時に倒れた巨木の根元から発見され、翌年の発掘調査で掘り出された。御正体は本地垂迹の思想に基づいて造形化されたもので、境内から出土した御正体にも阿須賀神社の祭神事解男命の本地仏である大威徳明王をはじめ、熊野諸神の本地仏が現されている。神と仏が共存するという日本の信仰のあり方を知ることができ、また、中世期の熊野信仰のあり様を示す資料である。

1. 阿須賀神社

阿須賀神社は、熊野川河口のすぐ近くにある蓬萊山の南麓に位置する古社で、古くから熊野新宮（熊野速玉大社）との関わりが深い。祭神は事解男命である。『熊野年代記』によれば、孝昭天皇の代の創立と伝えられるが、数度にわたる火災により、古文書類が失われており、その沿革を詳しく知ることは困難である。境内では、弥生～古墳時代の遺跡が発見されており、古代から蓬萊山に対する信仰



写真1 阿須賀神社と蓬萊山

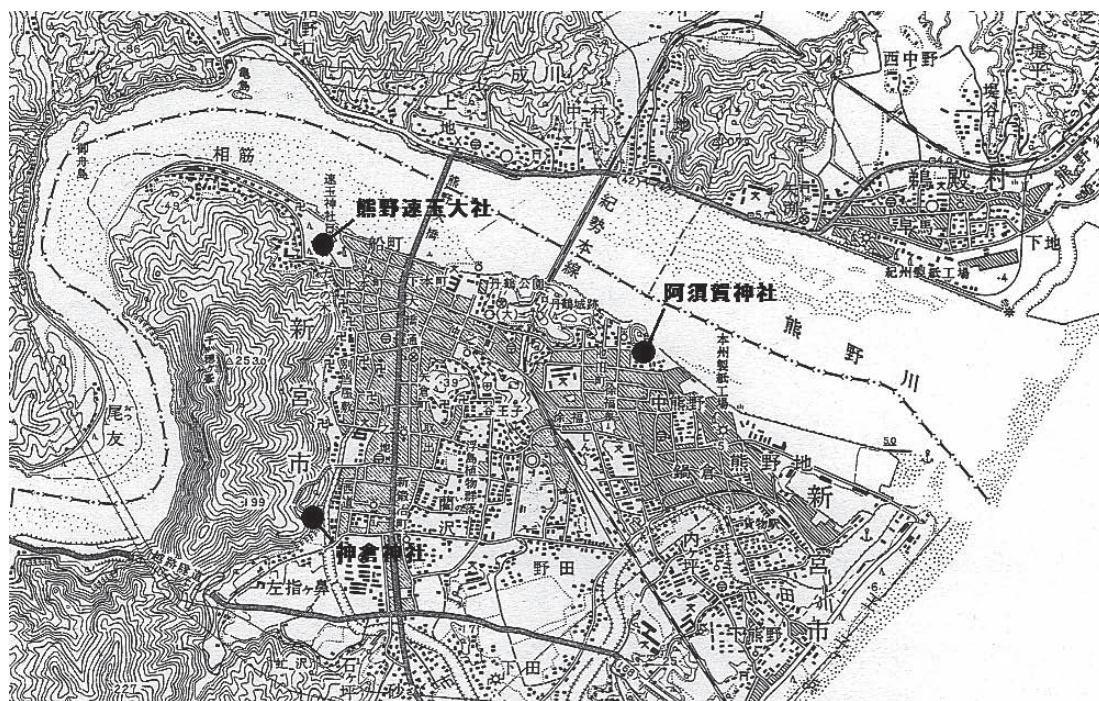


図1 阿須賀神社位置図

があったと想像される。

早くから熊野信仰との関わりが見られ、『^{ちょうかんかんもん}長寛勘文』所収の「^{くまの ごんげん ごすいじやくえん ぎ}熊野権現御垂迹縁起」には、熊野権現が新宮南方の神倉山に降りたのち新宮東方の「阿須加の社」に移ったとの所伝が記されており、熊野信仰において当社が、神倉神社とともに早くから重視されていたことが伺える。

また、熊野王子社の一つ阿須賀王子であったことから、熊野詣が盛んになるのに伴い、同社も発展した。江戸時代には、熊野速玉大社の摂社として新宮城主の水野家から社領の寄進も受けている。明治時代になると、村社阿須賀神社として独立し、現在に至る。

2. 御正体の発見と発掘調査

御正体は社殿背後の蓬莱山南麓の遺構から出土したもので、その総数は191点にも及ぶ。蓬莱山は、標高約48mのお椀を伏せたような形の樹木に覆われた独立丘で、山中の所々に巨岩、巨石が頭をのぞかせている。

昭和34年9月の伊勢湾台風により、蓬莱山中の多数の樹木が倒れ、その根本から御正体が発見された。紛失の恐れが生じたため、翌年3月に東京国立博物館の矢島恭介氏を中心として発掘調査が実施された。発掘調査で確認された遺構には御正体埋納石室と経塚がある。

御正体が納められた石室は、巨石の一つを壁面として利用し、その南面三方に石を畳んで石室としている。石室には石蓋は設置されておらず、御正体を埋納した上に小石を積んで覆いとしていた。また、この小石の中に文字を記した経石が若干含まれていたが、経石と御正体埋納石室との関係は把握できない。石室の規模は、東西約250cm、幅60～80cm（東寄りの狭い箇所では35cm程度）、深さは約70cmである。石室の床面には小石が厚く敷き詰められていた。

石室における御正体の出土状態は具体的には不明ではあるが、出土状況の写真をみると



図2 御正体出土位置

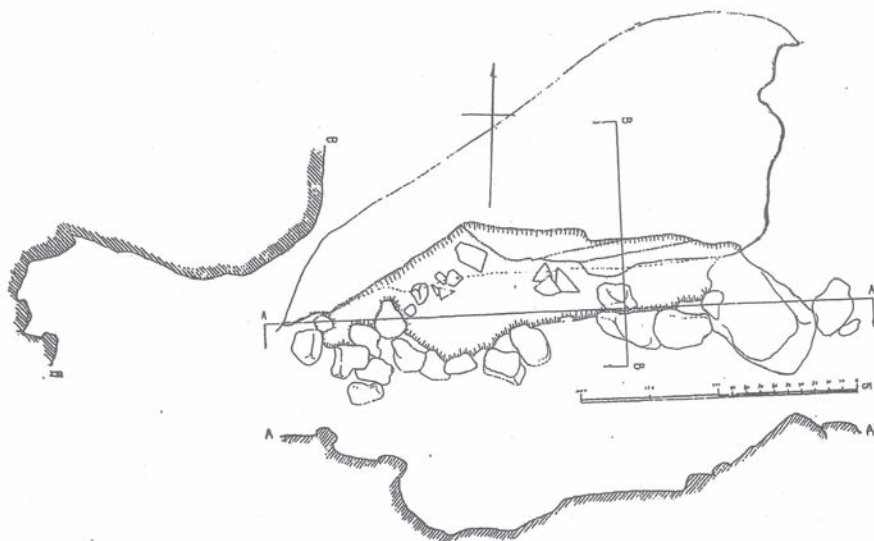


図3 御正体埋納石室実測図（矢島 1960）

岩陰と前面の斜面に雑然と置かれた状態であったことがわかる。多くの御正体には錆が付着しており、他の御正体と長年接触していたことを示し、御正体が積み重なって置かれていたことがわかるが、重複関係に関する記録は残っていない。

御正体埋納石室の下部約2mの所で小さな土坑が確認され、経塚と推定されている。土坑からは外容器と思われる陶甕の底部が検出されている。土坑上部は削られた状態であり、御正体石室を造営する際に破壊を受けたと考えられる。

経塚が営まれたのが平安時代末頃で、御正体埋納石室は室町時代中期頃に営まれたと推定されている。

3. 本地垂迹説と御正体

御正体とは鏡面に写し出された仏の姿をあらわしたもので、鏡像、懸仏のことである。神は、仏が衆生を救うために姿を変えて現われた仮の姿であるとする「本地垂迹」の思想に基づいて造形化されたものである。

鏡像は唐鏡、和鏡などの鏡面に尊像を線刻したもので、平安時代を中心に作品が残る。この鏡像をもとに密教図像の影響を受けて平安後期頃に成立したものが懸仏で、特に中世を通じて数多く造立された。形態的には、鏡になぞらえた円形銅板（鏡板）に尊像を現わし、懸垂できるように仕立てたものである。

これらが御正体と呼ばれたのは、鏡面に現わされた仏像がその神社の祭神の正体、すなわち本地仏であることに由来している。また、懸仏の鏡板の大多数が円形であるのも、神体を象徴する鏡に起源があるためである。

4. 御正体の技法と制作時期

御正体を制作技法から見ると、鏡像は本尊を「線刻」、「墨書・墨画」の2タイプが見られる。懸仏は、銅製鏡板に本尊を「線刻」、「墨書・墨画」、「鑄銅製本尊取付」、「銅板打出製本尊取付」、和鏡に「鑄銅製本尊取付」の5タイプがある。また、鑄銅本尊（懸仏仏体）部だけが残るものも多い。

これらの鏡像、懸仏の技法・造形の変遷は、大きく3つの段階が考えられる。第1段階



写真2 薬師如来鏡像（草花双雀鏡）



写真3 墨書十一面観音種子鏡像（草花双雀鏡）

は、鏡面の中に線刻で像を表現するもので、11世紀～13世紀にかけて集中する。鏡像の大多数がこのタイプであり、鏡像から発展して成立した懸仏も初期の作品の主流を占めている。「墨書・墨画」も線刻と同じ平面的な作品という点で、同様に扱うことができると思われる。写真2や写真3はこの時期の作例で、平安時代末の作品である。

第2段階には、尊像に対する意識が高くなり、薄肉彫、半肉彫へと像が立体化していく。やや厚肉の銅板を打ち出して像を成形したものが、懸仏初期の作品に多い。12世紀～13世紀にかけて盛行した。写真4は第2段階の典型的な作品で、13世紀前半の作であろう。



写真4 銅造阿弥陀如来像懸仏

第3段階の13世紀後半から14世紀前半になると立体化の流れがピークに達し、鑄銅による厚肉彫の尊像が多くを占めるようになる。また、第二段階までの懸仏には、蓮座、光背、覆輪、鐙座程度の装飾しかなかったのに対して、第3段階には、天蓋、華瓶、圈線、笠鉤等が加わり、鏡面装飾が整備される。この段階が懸仏形式の完成期とされている。

ところが、14世紀半ば頃から、尊像の制作技法が再び銅板打出主体となり、彫像としての完成度が低い作品が多くなる。同じ打出像であっても、第2段階に多く見られた精緻な作風とは異なり、大まかな造形が目立つ。特に室町時代以降は、懸仏が報賽品として量産され、この傾向が一段と助長される。

第3段階の作品としては、写真7、写真8が挙げられる。金銅仏に匹敵するような立体的な像容、すぐれた彫技を見せるが、鏡板は失われており、完形品ではない。共に13世紀中頃から後期にかけての作品で、同時期の小型品としては写真9や写真10がある。

14世紀以降の作品は、写真11、写真12などが挙げられ、銅板打出製の不明瞭な尊容や煩雑な装飾など、この時期の特徴がよくあらわれている。

また、出土品の中にはこの時期の紀年銘が刻まれた扁額があり、唯一の紀年銘品である。この扁額は、本来は懸仏に取り付けられていた装飾品だと思われる。刻まれた銘文は以下の通りである。

(写真5)

貞治二年
十一月十日
圓通四

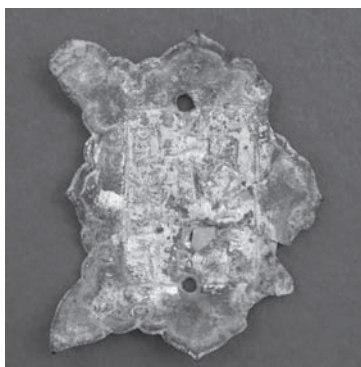


写真5 懸仏取付扁額 (1)

(写真6)

貞治三年
安須賀正
霜月廿七日白

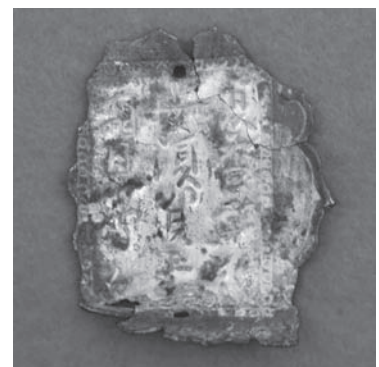


写真6 懸仏取付扁額 (2)

貞治は北朝の年号であり、貞治2年が1363年、貞治3年が1364年に当たる。写真6の



写真7 銅造大威徳明王像(懸仏体)



写真8 銅造大威徳明王像(懸仏体)



写真9 銅造十一面観音像懸仏



写真10 銅造薬師如来像懸仏



写真11 銅造大威徳明王像懸仏



写真12 銅造十一面観音像懸仏

扁額には「安須賀」の文字が見られ、阿須賀神社に奉納する目的で造られたことがはっきりとわかる。

以上のように阿須賀神社の御正体群は鎌倉時代を中心に平安後期から室町前期にかけて造立されたものである。この時期は熊野詣の隆盛期にあたり、それに伴い阿須賀神社への大量の懸仏奉納が行われたことを示している。

5. 本尊と熊野信仰

御正体に現された尊像は、阿須賀神社の祭神事解男命の本地仏である大威徳明王が多く、全 191 点中ほぼ半数近い 91 点がこの尊像で占められている。

大威徳明王以外の諸尊だが、薬師如来 20 点、千手観音 12 点、阿弥陀如来 10 点と熊野諸神の中核的存在である三所権現の本地仏が多く表現されている。その中でも特に薬師如来の数が多いのは、古くから阿須賀神社と新宮速玉大社のつながりが密接であったことを示している。その他の諸尊も熊野十二所権現（三所権現、五所王子、四所明神）の本地仏とほぼ合致する。

本御正体群は、大多数が独尊の遺品であるが、三尊、多尊の遺品も各一面存在する。薬師三尊像懸仏は中尊薬師、左脇侍に聖観音と思われる像を配している（右脇侍欠）。多尊像懸仏は、現状では破損と欠落が甚大であるが、鏡板の 3 分の 1 程が残り、薬師如来、毘沙門天、普賢菩薩、如意輪観音の四尊が現わされている。本来は熊野十二所権現の本地仏全てが取り付けられていたと思われる。

以上のように、阿須賀神社の御正体群は、当社の本地仏である大威徳明王を中心に、三所権現など熊野諸神の本地仏を現したものであり、御正体の本尊は決して漠然と選ばれたのではなく、奉納先の信仰にふさわしいものが選ばれている。

参考文献

時枝務 2010 「新宮市阿須賀神社境内御正体埋納遺跡の基礎的検討」『熊野学研究』創刊号

矢島恭介 1960 「熊野阿須賀神社境内の御正体埋納遺跡の調査」『考古学雑誌』第四六巻一号

山下立 1999 『特別展 阿須賀神社の御正体』

表 1 御正体本尊による分類表

本尊名	平安	鎌倉	南北朝	室町	計
薬師如来	1	15	2	2	20
阿弥陀如来	0	7	0	3	10
大日如来	0	2	1	1	4
弥勒如来	0	1	0	0	1
聖観音	0	1	0	0	1
十一面観音	1	7	1	3	12
千手観音	1	9	1	1	12
普賢菩薩	0	2	0	0	2
菩薩	0	2	1	1	4
大威徳明王	0	83	5	3	91
愛染明王	0	1	1	0	2
毘沙門天	0	1	1	0	2
垂迹神	0	1	0	0	1
薬師三尊	0	1	0	0	1
熊野本地多尊	0	1	0	0	1

表 2 熊野十二所権現の祭神と本地仏

総称	十二所	祭神名	本地仏名
熊野十二所権現	三所権現	那智 (西御前)	熊野夫須美大神 (伊弉册尊)
		新宮 (中御前)	熊野速玉大神 (伊弉諾尊)
		本宮 (証誠殿)	家津美御子大神 (素戔鳴尊)
	五所王子	若宮王子	天照大神
		禅師宮	忍穂耳尊
		聖宮	瓊々杵尊
		児宮	彦火火出見尊
		子守宮	盧茲草葺不合尊
	四所明神	一万宮	国狭槌尊
		十万宮	豊斟淳尊
		勧請十五所	泥土煮尊
		飛行夜叉	大戸道尊
	飛瀧権現	米持金剛童子	面足尊
		滝宮	大己貴命

地震痕跡と水田状遺構 —和歌山市 井辺遺跡の発掘調査—

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 藤 藪 勝 則

井辺遺跡では、発掘調査の進展によって、遺跡範囲内における竪穴建物や井戸、溝や自然流路、また墳墓など遺構の分布状況と自然地形との関連性を検討できる材料が提示され始めている。しかしながら、集落を構成する要素として食料生産を行う水田や畑など生産活動の痕跡は土坑列（畝状遺構）などがみられるものの明確にされていない。今回の調査は、遺跡の中央部を南北に貫いて計画されている市道松島本渡線建設に伴う調査であり、その調査結果は遺跡内部の自然地形、また生産域について検討材料を提供できるものと思われる。

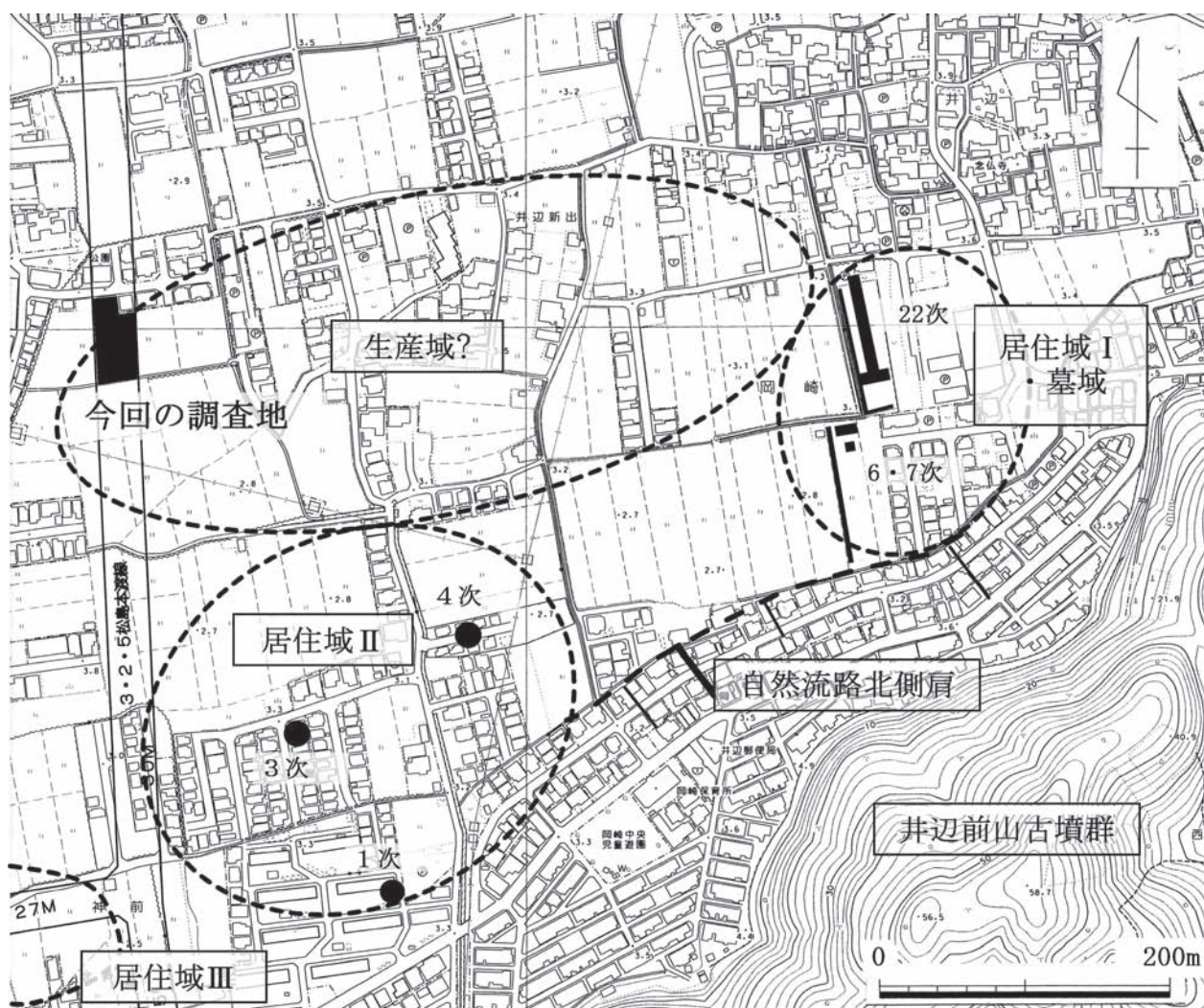
1. 井辺遺跡の立地と遺構分布

和歌山市津秦・井辺・神前一带に広がる井辺遺跡は、岩橋丘陵西端部、半独立丘陵である福飯ヶ峯の北西麓にあり、紀ノ川南岸平野部を前方に望む好適地に営まれた集落遺跡である。遺跡範囲は、東西幅約1km、南北幅約1kmを測る（第1図）。

井辺遺跡における過去の調査では、遺跡南半部の福飯ヶ峯北西裾部で弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物や土坑など居住域（居住域Ⅰ～Ⅲ）を示す遺構及び遺物が検出されている（第2図）。特に、遺跡東端部の居住域Ⅰでは、第22次調査において弥生時代後期の井戸2基、竪穴建物15棟の他、古墳時代初頭の墳墓3基、第6・7次調査では弥生時代後期の竪穴建物1棟、井戸1基、溝1条の他、古墳時代初頭の竪穴建物7棟、溝及び土坑などが検出されている。また居住域Ⅱでは小規模な調査ではあるものの、弥生時代後期末から古



第1図 調査地位置図



第2図 井辺遺跡内部の遺構分布図

墳時代初頭の土坑及び当該期の遺物が検出されている。さらに、居住域Ⅲの範囲内では、公益財団法人和歌山県文化財センターによる都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査において、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、溝、土坑列などが検出されている。この調査では、地震による液状化現象の痕跡として噴砂が確認されており、これらの噴砂は弥生時代終末期以前、弥生時代終末期から江戸時代、江戸時代から現代の3時期にわたる地震に伴うものと報告されている。

このように、井辺遺跡の範囲内には竪穴建物や土坑などの遺構が分布し、居住域とみられる範囲が現段階では3ヶ所確認されており、これらの居住域Ⅰ・Ⅱと福飯ヶ峯との間、また居住域Ⅱと居住域Ⅲとの間には、近年の調査によって自然流路が確認されている。

2. 今回の調査成果

今回の調査地は、遺跡北西部の水田地帯に位置する。遺構は、弥生時代後期後半以前、調査地周辺が低湿地であった頃に堆積した第5層（黄灰色細砂混粘土）の上面において、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の溝（SD－1・2）、これらの溝が埋没した後に発生した地震に伴う噴砂、その後、調査地周辺が水田開発された際の畦畔1・2の他、低湿地化する以前に堆積した第6層（灰オリーブ細砂混粘土）の上面において、鉄分の著しい沈着として直

線的に確認された畦畔状遺構（畦畔3～5）などがある（第3・4図）。

S D-1・2は灌漑用水路で、調査区中央部で一部合流しながら北東から南西方向に延びる。これらは幅2.5～3.0 m、深さ85 cm前後、溝底面の標高が1.7～1.8 mであるなど規模や方向性に共通性がみられる。また土層堆積状況からみて、掘削された当初は同時併存しており、その後S D-2が埋没し、S D-1は再掘削されながらも遅れて埋没している。さらに、S D-1東端部の最下層では、木枝を積み重ね、その前面を杭で留めた護岸遺構を検出した他、合流部の東側では板材と木杭で構築された木組遺構を検出した（写真1～3）。

これらの流水の方向は、旧地形の傾斜方向に影響され北東から南西方向と考えられる。

地震痕跡は、S D-2の西端部、遺構内部の北側壁面で噴砂を確認した（写真4・5）。この噴砂に伴う砂脈は、溝が機能していた弥生時代後期後半の埋土を貫き、一部は溝内部に流入し堆積している。さらに、この流入した砂層上部に堆積した埋土にも砂脈が認められることから、少なくとも2度の地震に伴う砂脈と考えられる。この地震の時期は、S D-2埋土の出土遺物及び、2度目の砂脈上部に堆積した堆積土の時期などから1度目が弥生時代後期後半から古墳時代初頭までの間、2度目が古墳時代初頭から平安時代中期までの間と考える。

畦畔1・2は、調査区の中央部において検出したもので、高さ5 cm前後の僅かな高まりと、鉄分の縦方向への著しい沈着として確認した（写真6・7）。これらの畦畔は、調査区の中央部において交わり、その後ひとつの畦畔となるもので、方向性はそれぞれ少し彎曲しているものの畦畔1がN-45°-E、畦畔2がN-56°-Wとなる。また幅は1.0～2.0 mである。これらの畦畔に区画された水田の時期は、畦畔上部に堆積した第4層（黄灰色細砂混粘土）に黒色土器が含まれることから、平安時代中期頃と考えられる。

畦畔3～5は、第6層の上面において鉄分の縦方向への著しい沈着として確認した。この鉄分の著しい沈着は、第6層上位のいずれかの堆積層上面に構築された畦畔が、下位層に影響を及ぼした結果と考えられ、このような畦畔は広義的に擬似畦畔（転写畦畔）として認識されている（写真8）。これらの畦畔の方向性は、畦畔1・2とは異なり現行の土地区画に沿うものである。また水田の時期については、現段階では鎌倉時代頃のものとしておきたい。

3. まとめ

井辺遺跡の北西部一帯は、北東から南西に傾斜する旧地形の傾斜方向や堆積層の特徴などから判断して低地が広がっていると考えられ、調査地周辺は居住域には適さなかったものと言える。このことは、検出した遺構として弥生時代後期後半から古墳時代初頭の灌漑用水路や平安時代前期以降の水田（畦畔）など農耕に関わる遺構が主体となることから分かる。

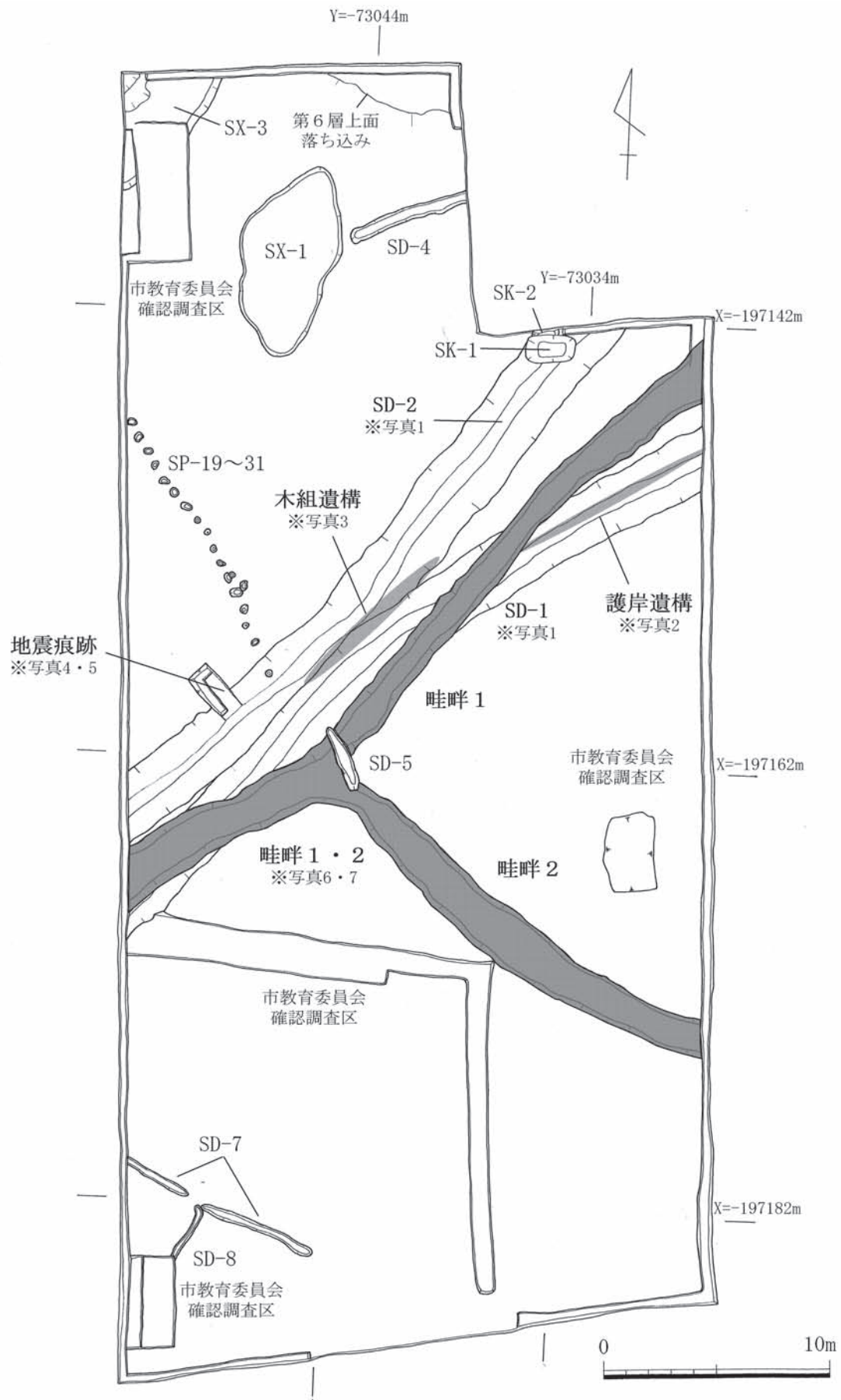
今回の調査成果は、集落を構成する要素のうち生産域を確認したことであり、今後の調査によって弥生時代後期後半まで遡る水田が検出される可能性が高いと考える。

参考文献

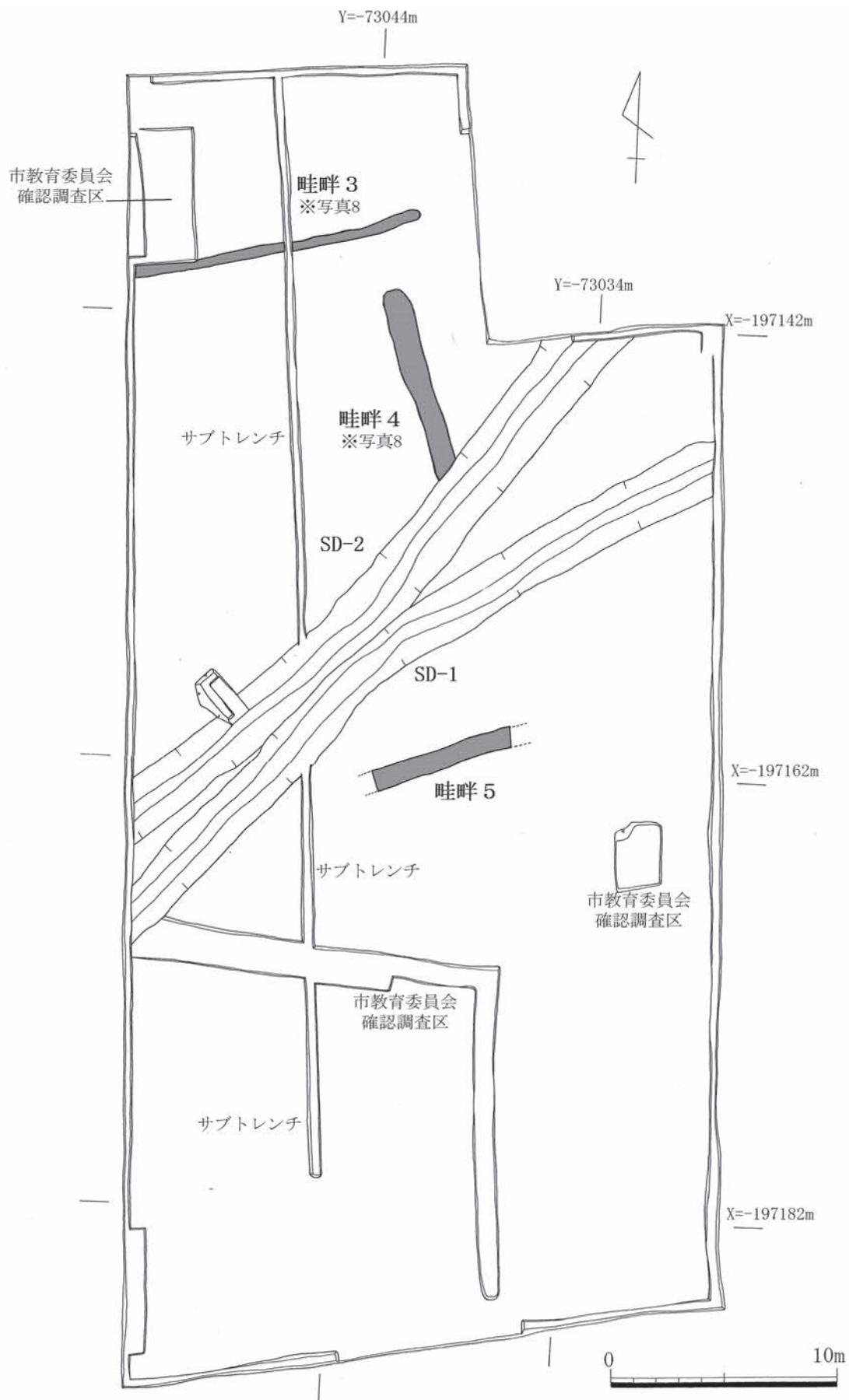
『井辺遺跡―都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』公益財団法人和歌山県文化財センター 2013

『井辺遺跡第6次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005

『井辺遺跡第7次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2006



第3図 第5層上面検出の遺構平面図



第4図 第6層上面で確認した畦畔3～5遺構平面図

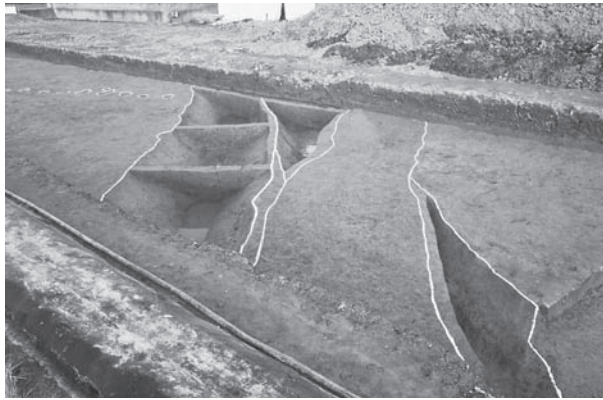


写真1 SD-1・2 西端部と畦畔1・2（南西から）



写真2 SD-1 東端部の護岸遺構（南から）



写真3 SD-1・2 合流部の木組遺構（東から）



写真4 SD-2 西端部の地震痕跡（東から）

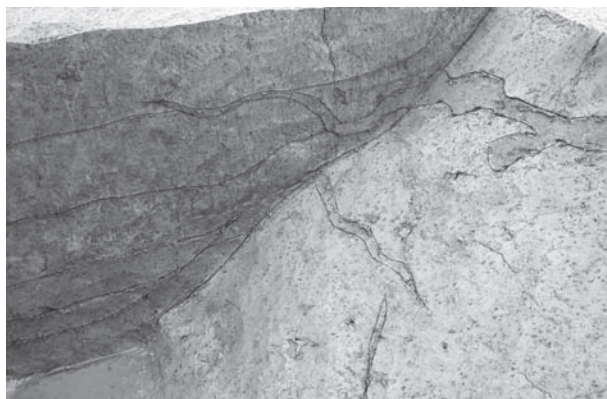


写真5 SD-2 西端部の地震痕跡近景（東から）



写真6 畦畔1・2（西から）



写真7 畦畔1・2（南西から）



写真8 畦畔3・4（北西から）

初期須恵器が発見された遺跡 —和歌山市 平井Ⅱ遺跡の発掘調査—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 井石好裕

1. 調査の経緯と経過

第二阪和国道の建設工事に伴い、周知の遺跡外で遺物の出土が確認されたため、和歌山県教育委員会により工事掘削範囲の断面調査と試掘調査（第1次試掘確認調査）が平成24年1月に実施された。調査の結果、工事範囲北側にある丘陵の裾部を中心とした範囲が新たに埋蔵文化財包蔵地として認定され、平井Ⅱ遺跡と呼称されることとなった。

第1次調査（1区）は、第1次試掘確認調査の結果、本発掘調査を要すると判断された範囲について、平成24年5月22日から平成24年10月31日までの期間に実施した。第2次調査（2・3区）は、平成24年7月から10月にかけて行われた和歌山県教育委員会による第2次及び第3次試掘確認調査で埋蔵文化財の展開が確認された範囲の東端部に位置する箇所を対象に、平成24年12月11日から平成25年3月15日までの期間に実施した。

2. 位置と環境

平井Ⅱ遺跡（437）は、現在の紀ノ川河口から約5km前後遡った右岸の丘陵裾部に位置する。遺跡周辺の地形は、和泉山脈から南に派生する丘陵地と丘陵間の谷部を南流する小河川によって形成された扇状地及び紀ノ川の河川堆積による沖積地に分ける事ができる。

平井Ⅱ遺跡近辺の遺跡には、調査地北東の丘陵上に築かれた大谷古墳（指6）を含む晒山古墳群（62・64・65）や雨が谷古墳群（66）及び鳴滝古墳群（71）、扇状地に位置する楠見遺跡（70）、平井Ⅱ遺跡同様に丘陵裾部にある平井遺跡（399）などがある。

晒山古墳群は、5世紀前半から6世紀前半かけて造営された古墳群で、丘陵先端には馬冑や馬甲などが出土し朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土する大谷古墳が5世紀後半に築造される。雨が谷古墳群は5世紀後半から6世紀前半、鳴滝古墳群は5世紀後半から7世紀にかけて造営された古墳群である。

楠見遺跡では、関西大学及び当文化財センターが発掘調査を実施している。関西大学が行った調査では多量の初期須恵器（陶質土器）が出土し注目を集めた。センターが実施した調査では、縄文時代晩期から室町時代前期にかけての遺構が多数検出されている。古墳時代の遺構密度は低いものの、初期須恵器が少量出土している。また、今回の調査地の南東約100mの地点で、個人住宅の建築に伴い（財）和歌山市文化体育振興事業団が発掘調査を実施しており、古墳時代の遺構が検出され、初期須恵器も数点出土している。



遺跡位置図

3. 調査の概要

1) 1区

近世の土坑 円形の土坑で、全体で20基前後あり、調査区中央部に集中して掘削されている。規模は直径1.4～1.6m前後、深さは20～30cm程度のもが多い。18世紀代の陶磁器類や瓦が出土している。土坑のうち1基には木製の桶が遺存していた。桶の内側はほぼ円形を呈し直径は約1.1mで、底板上面までの深さは約15cmが残存している。底板の厚さは最大5.5cmあり、4枚の板材を両端を尖らせた木釘で連結している。

中世のピット 平面形はほぼ円形で、直径は30cm前後のもが多い。中世の須恵器捏ね鉢と瓦器碗の完形品が出土するものや、瓦器碗の完形品が2点出土するものがある。

古墳時代の竪穴遺構 調査区の東端部で検出した。遺物は、古墳時代の土師器のほか、初期須恵器が多数出土している。器種には、器台・高杯・壺等があり、器台には、波状紋・組紐紋・斜線紋・竹管紋等が施され、壺の体部には平行叩きや格子叩きが認められる。



写真1 調査地遠景



写真2 1区全景（西から）



写真3 1区全景（航空写真・上が北）

2) 2区

2区の遺構面は2面である。第1遺構面検出遺構には、溝・土坑がある。溝はいずれも素掘りで、検出された箇所により、調査区の東と西及び北の3グループに分けることができる。東側の溝群は、幅20cm前後、深さは5cm以内のものが多く、50cm前後の間隔で掘削されている。一方、西側の溝群は、幅20～30cmと東方の溝群に比べやや広い。掘削の間隔は20～40cmである。出土遺物は、中世の瓦器や土師器を主とし、初期須恵器を含む古墳時代の須恵器や埴輪片も散見できる。これらの溝はいずれも中世以降の水田耕作に伴うものと考えられる。第2遺構面検出遺構には、土坑・溝・ピットがある。土坑は調査区中央部から西側



写真4 近世の土坑（北から）



写真5 中世のピット（北西から）



写真6 古墳時代の竪穴遺構（南西から）



写真7 初期須恵器出土状況（北西から）



写真7 1区出土初期須恵器



写真8 2区出土初期須恵器

の範囲でのみ検出される。平面形は、円形及び楕円形を呈し、深さは、残りの良いもので20 cm前後、多くは5～10 cmである。古墳時代の須恵器及び土師器が出土している。須恵器には、乳状突起を付した甕或いは壺の破片が含まれる。

3) 3区

調査前の現況が宅地（民家）であったことから、建物の建築や撤去に伴うと思われる重機等による広い範囲での掘削・攪乱が顕著であり、遺構が確認できたのは調査区北（東）側の約1/3の範囲に限られる。検出した遺構には、溝・土坑・ピットがある。溝は、2区の第1遺構面で検出した溝と同じく、水田耕作に伴うと考えられるものである。幅は30 cm前後で、深さは5 cm以内と2区で検出した溝と同規模である。遺物の出土する遺構が少ないため時期は不明であるが、2区と同じく中世以降に掘削されたと考えられる。

4. まとめ

1区で検出した古墳時代の竪穴遺構は、主柱穴やカマドまたはそれに類似する施設が調査区内では検出されなかったこと、また、床面に凹凸があることなどから、竪穴建物（住居）である可能性は少ないと考えているが、全体の1/2以上が調査区外になると思われることから断定はできない。

今回の調査では、包含層出土分も含め多数の初期須恵器が出土している。器台に組紐紋や竹管紋等を施紋するなど、楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する点も少なくない。時期は5世紀中葉と考えられる。

古墳時代の注目すべき遺物に埴輪の出土がある。1区と2区で出土しており、円筒埴輪と形象埴輪とがある。時期は6世紀前半と考えられ、調査地周辺での古墳の存在を示唆する遺物である。

中世の遺構は、密度に濃淡はあるもののほぼ全域で検出している。1区検出の瓦器碗等が完形で出土しているピットは地鎮に関連する遺構と考えているが、周辺で建物を復元することはできなかった。1区出土の瓦器碗等の時期が12世紀前半代であるのに対し、2区出土の瓦器は、殆どが細片であり、時期も13世紀中葉以降であるなどの相違点もみられる。



写真9 2区第1遺構面（南東から）



写真10 2区第2遺構面（北西から）



写真11 3区全景（北から）

吹上口御勘定御門東櫓台と二の丸大奥御殿向裏庭の調査 —和歌山市 国指定史跡 和歌山城—

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 北野 隆 亮

はじめに

史跡和歌山城の発掘調査は1981年に行われた一の橋大手門再建工事に伴う調査を手始めに、現在では33年目・35次調査にまで至っており、多くの考古学的な知見が得られ、これまで和歌山城の石垣の修復や御橋廊下などをはじめとする復元整備に役立っている。

今回は、二の丸西部(大奥)において、平成24年度で行った第35次調査の概要を報告する。

1. 史跡和歌山城の位置と環境

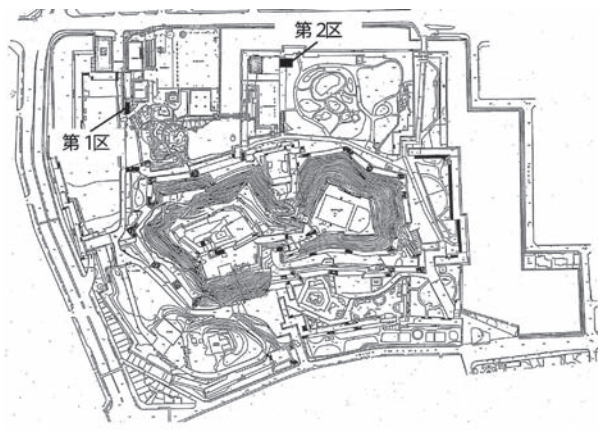
史跡和歌山城は、紀の川河口南岸の和歌山平野の北西から南東へ走る吹上砂丘の北端にあたる標高約50mの独立丘陵である岡山に築かれており、周囲を広く眺望することができる。この城は丘陵上に本丸と天守曲輪が双立し、その麓に二の丸、西の丸、南の丸、砂の丸などを配した典型的な平山城で、別名を竹垣城または虎伏城とも呼ばれる。現在は、史跡公園として一般に広く活用されている。

和歌山城は、天正13(1585)年に紀州を平定した豊臣秀吉が築城を行ったもので、弟の秀長に領有させ、築城には藤堂高虎を初めとする普請奉行が当たったとされる。秀長は大和郡山城を居城としていた為、城代として桑山重晴を3万石で入国させた。その後、慶長5(1600)年の関ヶ原合戦に勝利した徳川家康が大坂城の豊臣氏を牽制するため、浅野幸長が37万石で入国した。元和5(1619)年に浅野家は広島へ転封され、徳川頼宣が55万5000石に加増された紀州の城主となった。この頃の和歌山城は、城内の作事(建築工事)は続いていたことが浅野家の記録「済美録」などから窺える。入国後の頼宣は、元和7(1621)年から城郭及び城下町の拡張・整備に着手し、頼宣の藩主期にはほぼ幕末にみられる形に整っていたとされる。

埋蔵文化財の対象としての和歌山城は、その史跡指定部分に加えて二の丸北東部に位置する三の丸と砂の丸西側の武家屋敷地、また岡口門南側の独立丘陵部分を和歌山城跡の範囲としている。



史跡和歌山城の範囲と周辺図



第35次調査位置図

2. 発掘調査の内容

平成 24 年度の調査は、御勘定御門石垣整備事業に伴う石垣修復対象地と二の丸整備のための継続調査地の二カ所を設定した。前者を第 1 区、後者を第 2 区と呼称した。

〔第 1 区〕

第 1 区の調査では、江戸時代中期の遺構面を全面に確認した。遺構は土塀 1 条を検出した。土塀は南北方向のもので、櫓台石垣の西面に沿って築かれており、基礎石組を南北長約 7m 分検出し、その上部に土塀構成土が最大高で約 30 cm 残存していた。土塀基礎石組は東西に面を持ち、結晶片岩の割石を 1 ～ 2 段に組み合わせたもので、幅 80 cm、高さ 20 cm の規模を測る。



第 1 区全景（北から）



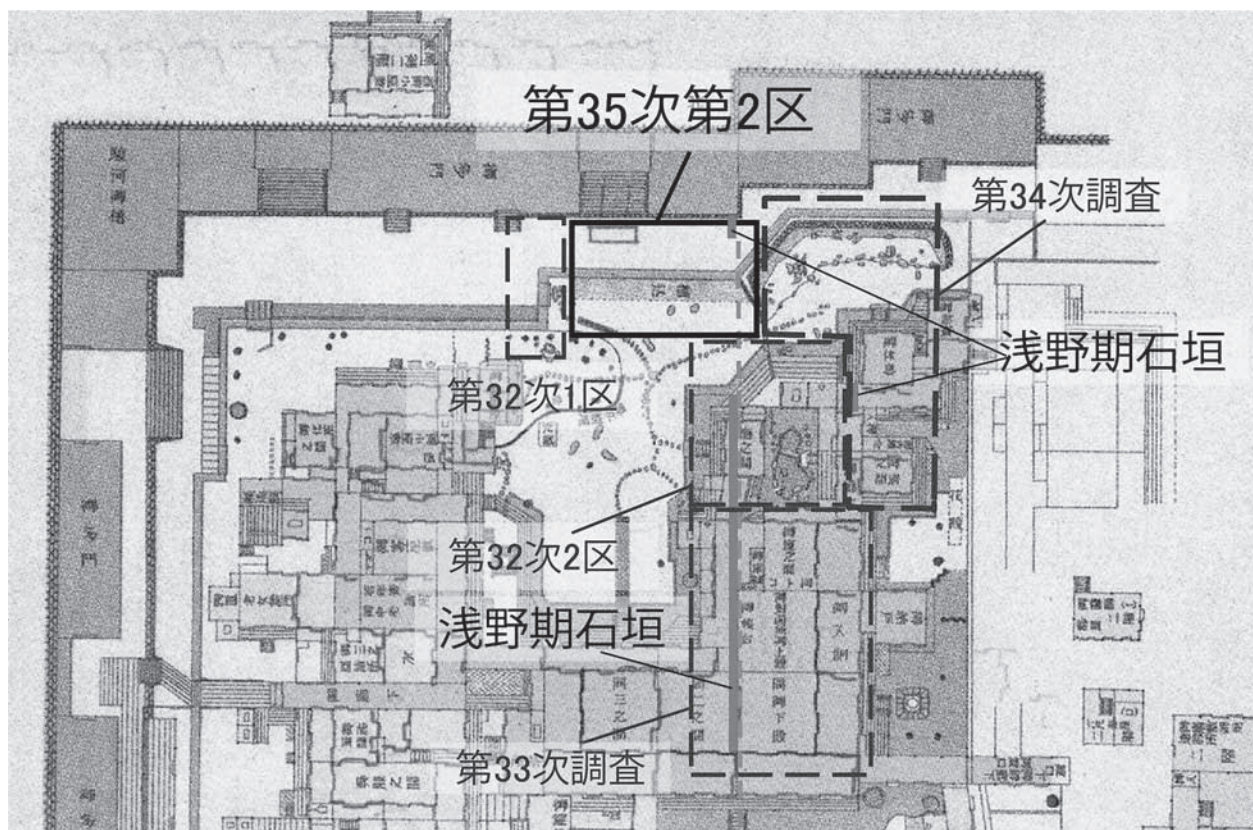
第 1 区土塀基礎石組東面（東から）

〔第 2 区〕

第 2 区の調査では江戸時代後期～末期の遺構面を検出し、土塀基礎石組、裏庭の植込東端を区画した植込石列 1 条、植込南端を示すために置かれたとみられる植込縁石 1 条、景石 1 基などの庭園施設を検出した。これらの遺構は江戸時代末期に描かれた『和歌山二ノ丸大奥當時御有姿之図』にみえる構造物に対応するものである。また、絵図には描かれていないが、埋甕 2 基とピット 1 基などもこの遺構面の所属遺構とみられる。

土塀基礎石組は調査区の北側で 1 条検出した。石組の石材は砂岩割石を南北面に用いて組み合わせ、側面と天端面をノミで削り平坦面に加工したものである。植込石列は土塀の南に設けられた植込の東端を区画したものとみられる。石材に結晶片岩を用いたもので、北西から南東方向に一边 20 cm 前後の石材を一行並べたものである。植込縁石は、土塀基礎石組から南側に 1.7m の距離で一边 20 ～ 30 cm の結晶片岩石材を東西方向に置いたもので、植込の南端を区画する縁石といえる。

景石は植込縁石から東に 1.1 m の距離に 1 基検出した。石材は砂岩を用いたもので幅 75 cm、厚さ 32 cm、高さ 30 cm の規模を測る。絵図には植込内の同位置に景石が 2 基立て並べられた状況が描かれており、そのうちの西側のものに対応するものとみられる。埋甕 1 は調査区の東側で検出したもので、直径 1.3m の掘方内に常滑焼の大甕を埋め込んだもので、大甕の直径は 1.0m、検出面からの深さ約 60 cm を測る。埋甕 2 は調査区北東隅で検出した。直径 65 cm の掘方内に常滑焼の甕を埋め込んだもので、口径 62 cm、胴部径 57 cm、深さ 57 cm の規模を測る。



『和歌山二ノ丸大奥當時御有姿之図』に第35次調査第2区の範囲等を加筆

なお、攪乱土坑などで遺構面が壊されている場所において、石組溝1条と石組溜枡1基、礫敷溝1条、土管1条が連結された排水施設を検出した。これらの排水に関する遺構は江戸時代末期以前のもと考えられる。この他、深堀調査区において江戸時代初期（浅野期）のものとみられる石垣1基を検出した。

石組溝は、底面と蓋石は結晶片岩、側面石組は砂岩を主として用いたもので、内壁幅40cm、深さ55cmの規模を測る。石組溝1条と石組溜枡1基を合わせた延長約15mの範囲を確認した。石組溜枡は、石組溝の東端部に接続して設置されているもので、南北幅50cm以上、東西幅45cm以上、深さ70cmの規模を測る。石材は石組暗渠溝と同様に、底面と蓋石は結晶片岩、側面石組は砂岩を主として用いている。礫敷溝は、東西幅90cm、残存深約10cmの規模を測るもので、直径5～10cm大の礫を充填していた。土管は直径約15cm、長さ約65cmの規模を測るもので、北端で別の土管を受口部を上にして埋設している。この埋設土管は地中で石組溝に繋がっているものと考えられる。

石垣は調査区北西隅において1基検出したもので、南北幅1.0m、深さ1.05mの範囲を検出した。南北方向で東側に面を持つもので、過去の調査で検出していた浅野期の西堀石組の北側延長部にあたる。砂岩の大きな自然石を野面積みに2段分を布積みしており、間詰石には結晶片岩及び砂岩の一边5～20cm程度の礫を用いたものである。

おわりに

絵図に描かれた裏庭の庭園施設に一致した検出遺構は、土塀基礎石組1条、植込石列1条、植込縁石1条、景石1基である。今回の調査では実際にそれらの遺構が検出され、裏庭に

関わる遺構の実際の寸法や構造を知ることができた。連結された石組溝・石組溜枳・礫敷溝・土管の検出は、地中に埋設された排水施設を推定する手がかりを得たといえる。また、浅野期石垣の検出は浅野期の西堀に面した櫓台の規模や、和歌山城の遺構変遷を明らかにするための基準資料になったといえる。

以上、今回の調査により、遺構の遺存状況等を明らかにし、吹上口及び二の丸西部を復元整備するための基本資料を追加することができた。



第2区全景（西から）



第2区 景石（南から）



第2区 石組溝（東から）



第2区 石組溜枳（上が西）



第2区 土管（西から）



第2区 浅野期石垣（西から）

妹背山三断橋整備事業 —和歌山市 国指定名勝 和歌の浦—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 渋谷 高 秀

1. 名勝和歌の浦の価値

名勝和歌の浦は、自然の神が造り上げた自然的な名勝として古来より高い評価を受けてきた。抜けるような青い空の下、緑豊かな山並みに囲まれた大パノラマ空間の中に、海、川、また神が配置したかのような絶妙な位置に、砂嘴、干潟、島々が存在する。躍動する大海原から波が打ち寄せ、内側には玉のように美しい六つの島である玉津島が連なり、干潟は潮の満ち引きにより、生命の循環を示すかのように姿を変える。空、海、波、干潟、音、匂いは、一瞬たりとも同じではない。この神が造った自然的な名勝に、玉津島神社、天満宮、東照宮、妹背山多宝塔と三断橋、不老橋など人文的な名勝が加わった比類希な名勝なのである。市街地で開発も進むが、その骨格となる部分は、明治以降、和歌山県が和歌公園として守ってきたため、厳然と残されている。

平成19年度和歌山県教育委員会では、妹背山に通じる三断橋の修理が必要なことに合わせ、和歌の浦の学術的価値の見直し作業、指定できる範囲の確認作業を和歌山市教育委員会と共に実施した。その成果を受けて、平成20年6月24日、和歌山県文化財、名勝・史跡和歌の浦の指定を受けた。指定を受けた9カ所の場所は、和歌の浦の核となる自然が造り上げた妹背山、鏡山、奠供山などの玉津島山、和歌の浦干潟の痕跡を残す御手洗池、和歌の神を祀る万葉景観の中心、玉津島神社、菅原道真を祀る天満宮、紀州徳川家の東照宮や妹背山多宝塔などの神社仏閣である。和歌の浦の核となる場所に不動のアンカーのように「県指定史跡・名勝」が打ち込まれたのである。和歌の浦は、更に大きな範囲の名勝であるが、所有者・管理者が錯綜する名勝和歌の浦を完結させるための前段階の点であり、更に完結した面に広げる「名勝・史跡」指定であった。平成20年度には、和歌山県教育委員会は、和歌の浦の価値ある範囲、その価値を学術的に確定するため、専門家からなる和歌の浦学術調査委員会を設置した。委員会では、江戸時代の絵図から和歌の浦の範囲を、北は高松、南は片男波砂嘴の先端部、東は名草山、西は雑賀崎とし、現状に於いて、名勝及び史跡として国指定の価値ある部分を確定し、和歌の浦学術調査報告書を刊行した。県指定及び和歌の浦学術調査報告書の刊行をもって、文化庁に万葉空間である玉津島神社を中心とした和歌の浦干潟などを意見具申し、平成22年8月、白浜町円月島と共に国名勝和歌の浦として指定を受けた。

「神代より しかぞ尊き 玉津島山」と山部赤人に詠まれ、神が住む空間と意識される玉津島神社を中心とする和歌の浦干潟など、約90万㎡に及ぶ広大な地域が名勝として指定されたのである。奠供山、鏡山、妹背山、それを包み込む和歌の浦干潟、片男波、海岸部、玉津島神社、妹背山多宝塔と近世の不老橋などである。名勝和歌の浦の本質的な範囲、万葉空間そのものである。

2. 名勝和歌の浦妹背山三断橋整備事業の経緯と経過

妹背山と三断橋

紀州藩初代藩主徳川頼宣（1602～1671）は、天下の名勝和歌の浦に、父家康を東照宮

に、母お万の方を妹背山多宝塔に祀った。妹背山は、和歌川河口部に浮かぶ周囲 250m 程の小島である。多宝塔の中には、『法華経』の「題目」が書写された 15 万余個を超える経石が埋納されている。東照大権現（徳川家康）の 33 回忌 慶安元年（1648）を期に、家康の側室であるお万の方が、人々の霊の救済と天下太平を祈って発願したものである。後水尾上皇（1595～1680）から民衆に至るまで、多くの人々が参加し、経石の題目数の合計が 250 万返に達したことをもって、慶安 2 年（1649）浄業は成就し石室に埋納された。江戸時代初期にあって、階級を超えて多くの人々が参画したこのような法事は我が国の歴史上他に類をみない。承応 2 年（1653）にお万の方が亡くなり、明暦元年（1655 年）、頼宣は、石室の上に多宝塔を建立した。

妹背山に渡る架かる砂岩製高蘭付きの三断橋は、県内最古の石橋で、頼宣が妹背山の整備をした慶安 4 年（1651）頃に建設した。中国の景勝地である杭州西湖の六橋の面影があるといわれ、独特の意匠・構造をもつ。欄干、敷石、橋桁、橋脚は何度か補修されているが、橋の骨格は今日まで継承されている。三断橋は、鏡山と妹背山を繋ぐ最短距離の位置に造られている。鏡山から妹背山に伸びる岩盤も、三断橋に渡る最初の石垣は、基礎を岩盤の上に置いて安定している。

三断橋は、全長が約 40 m もあり、和泉砂岩で構成される三つの橋と二つの独立した石垣、鏡山や妹背山から延びる石垣で構成される。中央部の橋は、最も高く長く（6.7m）、二列 6 脚の橋脚があり、高欄の高さは 0.6cm で、背の高い化粧板が片面 3 枚ある。化粧版は上下 2 段あり、上段の透かしは中央に 1 個で、下段の透かしは東・西の橋の化粧板の鏡餅の断面のような透かしを天地逆にしたものがある。両側の橋は、短く（西 3.9m、東 4.7m）、一列 3 脚の橋脚である。高欄の高さは 0.4cm で、背の低い化粧板が片面 2 枚あり、化粧板には透かしが 2 個穿たれている。

三断橋の橋も、横から見るとアーチ型を意識したように見える。石垣は布積で、角部分は算木積である。角部分は、40 × 80 cm 前後の三断橋石垣の中では大きい部類の細長い石を使用する。5 段、所によれば 6 段の石垣の最下部には、長方形の石を置く。各石垣共に下 2 ～ 3 段は、しっかりと目地の通った平積みであり、三断橋当初の可能性を持つ。石積みの上端の石は、70 cm 前後の大きな細長い和泉砂岩である。現状では、二段の石垣の内、西側の石垣は、南の布積みが非常に乱れた印象であり、石垣が倒れてきた北側は目地がとっている。東側の石垣の北側は、比較的平積みの乱れは少ない。南側の中央部は目地がとおり、東側は乱れている。全体として、東側の布積みが安定感した印象である。三断橋は、三つの橋を架け、橋を渡す石垣部分に和泉砂岩の持つ柔らかな感じを、布積みで印象付けた優雅な石橋である。

三断橋の整備

三断橋は、海風を受け、また台風の影響を受ける。また毎日繰り返される干潟の干満に影響され、石橋に負荷がかかる。高欄部分や橋脚部分は、長年の潮風や干満の影響により、剥離が目立つ状態であり、橋脚部分、石垣部分の孕みなど、橋全体に早期に根本的な解体修理が必要であった。名勝和歌の浦保存管理計画報告書では、妹背山地区を構成する要素の中で、三断橋は本質的価値を構成する枢要の諸要素であり、「風化・破損が著しく風致景觀に影響を与えている三断橋は、本来の材料、工法等を基本とした修理を早期に実施する。」とされる。

平成 24 年度、和歌山県教育委員会では、各分野の専門家からなる三断橋整備検討委員会

を立ち上げ、文化財的修復が必要な三断橋の整備に関して検討を行った。また、三断橋の修復のための設計を専門業者に委託し、保存修理のための三断橋の三次元測量を実施した。

平成 24 年度には、和歌の浦史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業に伴う妹背山三断橋修理事業として、当センターが和歌山県より委託を受け、平成 24 年 10 月より翌 3 月まで実施した。

3. 整備

基本方針

整備方針は、三断橋整備検討委員会での決定事項を踏まえて、破損状況や石垣の崩壊の危険がある箇所を修復し、出来るだけ現状の石材を再利用する。破損が激しい部分の解体を実施し修復する部分修理であり、全解体修理は現状では必要ない。

整備

石垣解体個数について、石垣 B（東側の石垣）南面 61 個、東面 47 個、北面 123 個の合計 231 個である。石垣 C（西側の石垣）は、西面 21 個、南面 38 個、東面 21 個、北面 15 個の合計 95 個である。石垣 D（妹背山側）は、9 個である。総計 335 個を取り外した。この内、割れ石は、石垣 C が西面 8 個、南面 10 個、東面 7 個、北面 7 個の合計 32 個である。石垣 B は、南面 13 個、東面 13 個、北面 21 個の合計 47 個で、総計は 79 個となる。この結果、約 23% が割れていたことになり、すべて交換とし、割れ石は裏込め栗石として使用した。335 石の石種の内訳は、花崗岩 2 個、緑泥片岩 16 個、和泉砂岩 317 個である。割れ石 79 石の割れ方の内訳は、顔の割れ 59 個、控えの胴割れ 20 個である。控えの平均長さは 41 cm。矢穴有りの石は 10 個、化石有りの石は 1 個である。転用石は、他規格の延べ石 3 個、高欄片を 3 個、地覆石片を 6 個転用している。最も東の橋部分は、橋脚は橋桁 6 本（15.49 m）を、横桁 2 本（3.78 m）を解体し据え直した。橋脚（400 × 400 × 1700 内外）を 2 本解体し、1 本の石材を新補石材に取り換えた。中央部の橋部分は、橋桁 9 本（22.81 m）を解体しコンクリート 2 本、損傷が大きい砂岩 1 本の計 3 本（7.19 m）を新補石材（400 × 400 × 2100）に取り換え、6 本（15.62 m）据え直した。横桁 4 本（8.13 m）を解体し据え直した。高欄・欄干・束石・地覆石は、原則現状の石を再利用し、修復が不可能な石については新材と入れ替えた。

基礎部分

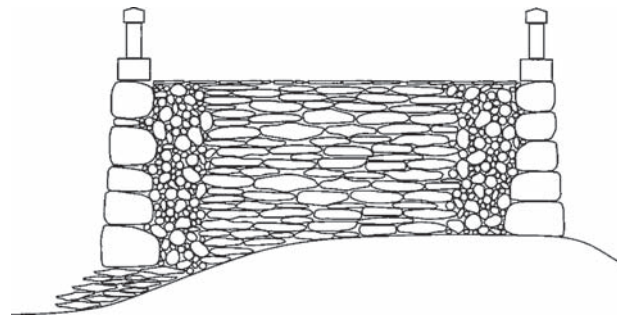
石垣西側の北側部分を解体修理し、基底石まで取り上げた。石垣最下部の構造は、岩盤上に露出している南側は安定した地盤の上に置き、岩盤が少し深いところにある北側は、胴木を置くことはせず、安定するまで結晶片岩の長さ 30 cm 前後、厚さ 10 cm 前後の平らな石を重ねて置いている。城の石垣に比べて三断橋の石垣は 5 ～ 6 段と低く、重量も軽いためと考えられる。東側の石垣も同様と考えられる。

内部構造

石垣を解体修理に伴い、土層観察を行った。基本層序は、第 1 層石敷き、第 2 層石敷きを固めるためのモルタル、第 3 層山土の茶褐色土、第 4 層 10 cm × 20 ～ 30 cm の板石と 5 ～ 10 cm 台の拳大の玉石の層（10 cm 大のこぶし大の黒色石）である。第 3 層山土からは昭和の時代の遺物が出土する。第 4 層は当初のものと考えられる。東の石垣の方は、玉石が上層



石垣裏込め石 西石垣・南側



三断橋 内部構造 模式図

中にも散見されるが、西の石垣は、第4層にしか玉石は見られない。岩盤上に基底石があるため安定していた西の石垣南側は、岩盤層直下から上に3石まで約50 cm程度、また石垣の外側面から50 cm程度、裏込めとして詰められ、それより内部は板石が入れられていた。東、西の石垣の現状の土層及び内部構造からは、当初の三断橋は、和泉砂岩の石垣の裏込めとして黒色のこぶし大の玉石を詰め、内部は板石状に加工された和泉砂岩を入れ造立したと考えられる。

4. まとめ

三断橋のライン、多宝塔、唐門、拝殿、瑞門、観海閣のラインは並行し、共に座標北から90度振った軸線上に造営される。頼宣が、母お万の方と共に行った上皇から庶民まで参画した平和を願う経石埋納事業、その理念を具現化した妹背山の整備は、瑞門から中は聖域、石畳の参道及び水辺に浮かぶ観海閣は、和歌の浦干潟を愛でる空間として庶民に開放されたことにより表現された。

経石埋納の意義を期した題目碑、多宝塔、周辺部の石垣、一石から造り上げた花崗岩の贅を尽くした瑞垣、多宝塔下の三つの緑泥片岩により意匠を凝らし、和歌山城と同一の和泉砂岩の石垣、そして和泉砂岩の持つ美しさを布積で表現した優雅な三断橋、それが総合的に調和した妹背山、江戸時代初期、頼宣が名勝和歌の浦に造り上げた妹背山多宝塔を巡る一連の施設は、父家康を神と祀る紀州東照宮同様、母お万の方を祀るに相応しい類まれなる紀州徳川家が造り上げた芸術品である。



修復された三断橋

砂上の首長古墳 —有田市 県指定史跡 椒古墳—

有田市教育委員会 西 岡 巖

1. 椒古墳の概要について

椒古墳は有田市北西部の海岸近く、有田市初島町浜地内（北緯 34° 06′ 09″ 東経 135° 07′ 22″）、J R 初島駅の北北東約 600 m に位置し、現在は東燃ゼネラル石油株式会社和歌山工場の広大な石油精製基地の一角にひっそりとたたずんでいます。周囲は工場の建物や石油タンクさらにそれらを結ぶ膨大な輸送配管が四方に延び、海岸部は全て埋め立てられ、旧地形を想像するにはあまりにも変貌した状況となっています。

石油精製工場建設以前の旧地形図から古墳の立地を見ると、標高 4 m 前後の砂層平地に位置し、北部及び東部は丘陵地となり、南側に平野部、西へ約 400 m の地に海岸線が所在し、その西方海上に地ノ島及び沖ノ島が浮かんでいます。古墳の形状は、墳丘高約 3 m、直径東西約 17 m、南北約 19 m を測るやや楕円形の円墳状を呈しています。頂上には高さ 4 m 余りの、『長屋王霊蹟之碑』と刻まれた石碑が建立され、傍らに大正 3（1914）年、石碑建立に携わった発起人名を記した碑が立っています。

古墳が発見されたのは、明治 41（1908）年 4 月、畑地開墾中に偶然発見されたもので、翌 5 月には全ての出土遺物が宮内省（現宮内庁）に提出され、その後東京帝室博物館（現東京国立博物館）に移されます。報告書に記載された主な出土遺物は次のとおりです。



図1 江戸時代後半頃の様子



図2 明治41年の様子

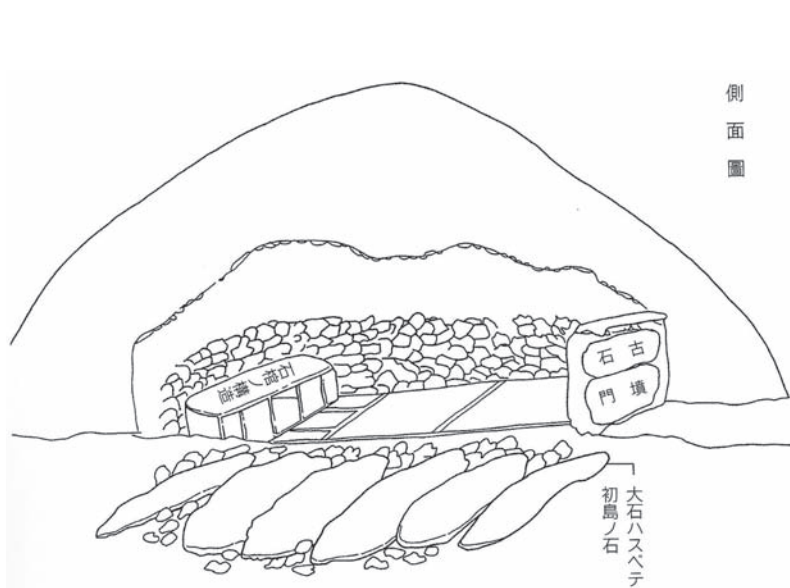


図3 石室側面図

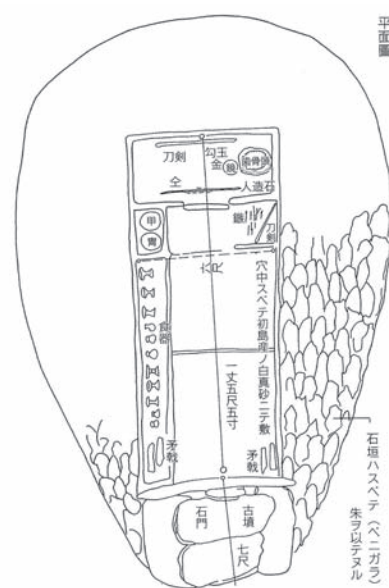


図4 石室平面図

古鏡（銅鏡）1、石器2、古刀（剣・直刀か）4、矛戟1、鉄製兜（冑）1、鎧（甲）1、鏃60余、六弁金属花金物（金銅製飾金具）、管玉11、歯牙少量、骨片少量、朱少量、板石材（?）10、土器（土師器高坏・小形壺）25等々。ただ、甲冑や剣といった鉄製品は戦前戦後の時を経て、ほとんど小破片となり当初の姿を留めてはおりません。また、この報告書に添付されたスケッチ図から古墳の形状は横穴式石室を有する前方後円墳で、周溝が巡っていたことがわかります。（図1・2・3・4）

古墳築造時期は、土師器高坏等の形状より5世紀中頃から5世紀後半代にかけての時期と考えられます。なお、昭和33（1958）年に特種遺物を有する古墳として和歌山県指定史跡となっています。

2. 発掘調査について

近年、古墳周縁部を巡る石垣の一部が崩落し、封土の流出が顕著に見受けられるようになってきたことから、平成22（2010）年度県補助を受け、石垣の補修工事を実施することとなり、それに先立つ事前調査を実施したものであります。今回、追加調査として最小限度の調査区を設け、古墳後円部の規模及び前方部の存在確認調査も合わせて実施しました（図5）

各調査区の土層状況は以下のとおりです。

A 区（図6）

第①層 現代土層。

第②③層 現代に近似する土層

第④⑤層 石垣敷設に伴う土層第⑦層に近似。墳丘盛土の混入。

第⑥層 周溝内埋土。近世後期以降と考えられる染付磁器片出土。

第⑦層 墳丘盛土。柔らかい砂層。

第⑧層 墳丘盛土。硬く締まった土層。

第⑨層以下 古墳築造に際する人工的盛土あるいは自然堆積土層であるかは不明。

B 区

調査の結果、周溝埋土層の確認のみで、墳丘裾部の傾斜確認には至っていない。

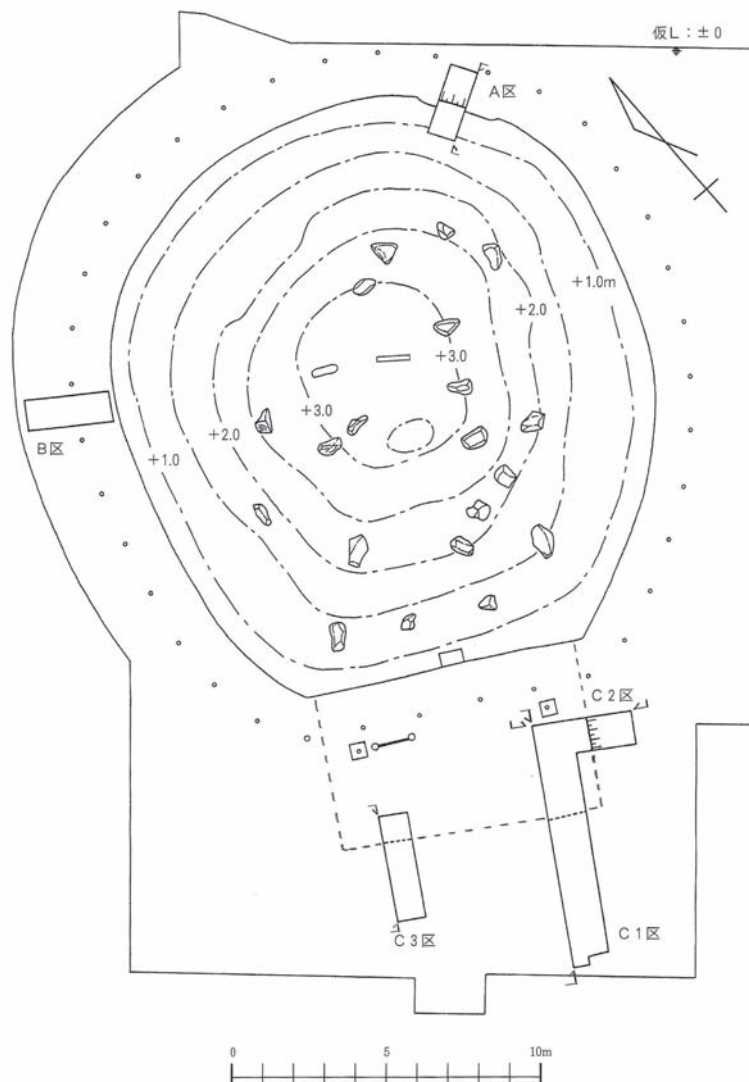


図5 トレンチ配置図

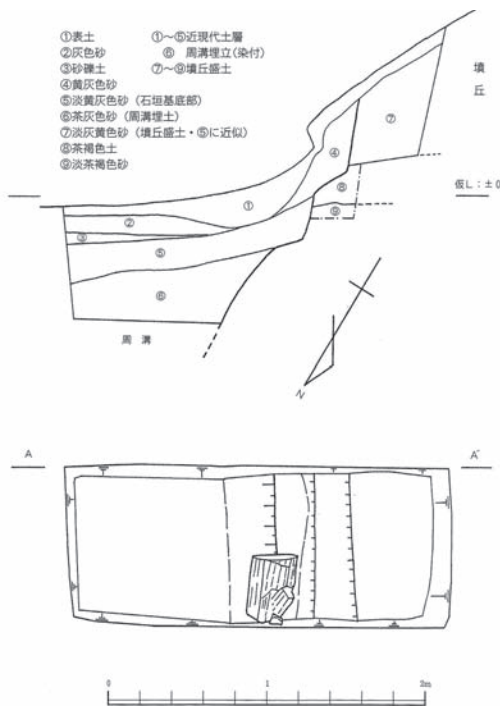


図6 A区平面図・断面図

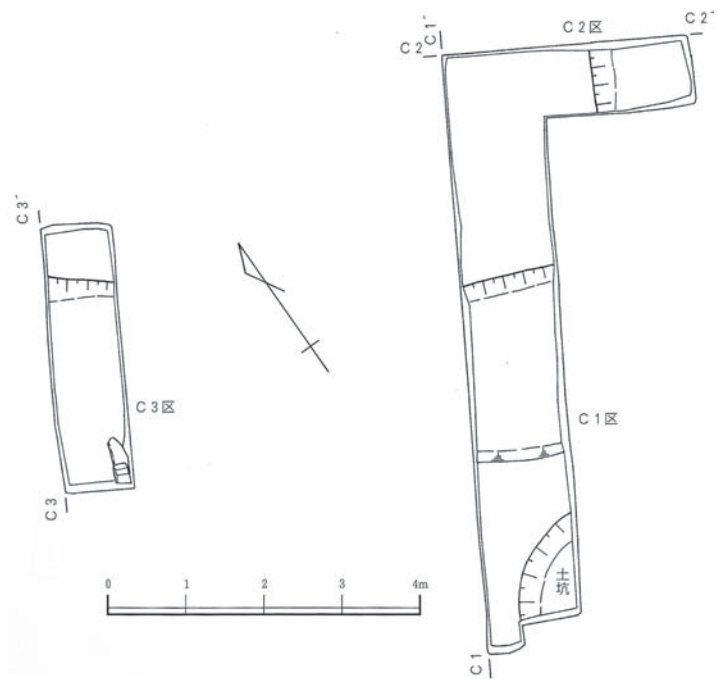


図7 C区平面図

C1・2・3区 (図7・8)

第①層 現代土層

第②③層 現代に近似する土層。煉瓦の混入が多く終戦後の整地層と考えられる。

第④層 近世以降の堆積土層。前方部が削平されたとする江戸時代末期から明治時代以降の堆積土層と考えられる。

第⑤～⑦層 周溝内埋土。

第⑧層 填丘盛土。

第⑨～⑪層 填丘盛土であるか地山土層であるかは不明。

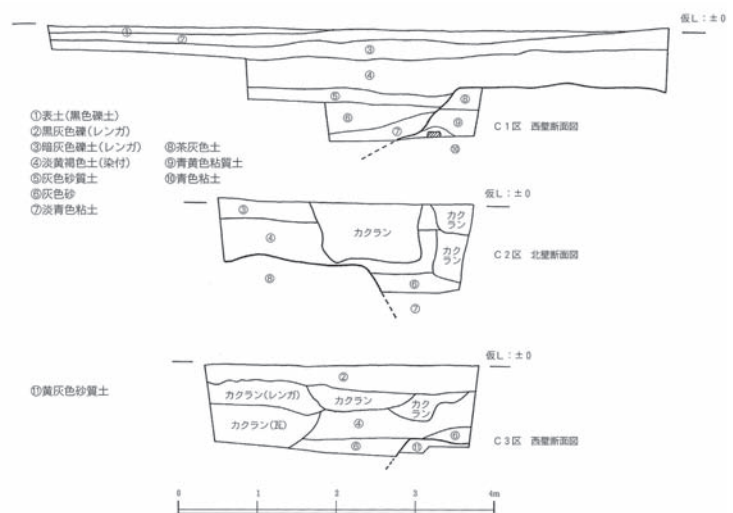


図8 C区断面図

3. まとめ

A区では古墳の周囲を巡る石垣の敷設時期を明確にすることは出来ませんでした。石垣最下段部直下より約60°の傾斜をもち周溝が始まるため、石垣の敷設は周溝部がまだ埋没する以前に行われたようで、少なくとも江戸時代後半頃までには石垣が敷設されていたものと考えられます。また、上層部の石垣は必要に応じて積み替えられたりしているとはいえ基底部は敷設当時と大きな変化はないと考えられます。B区での調査成果は今回得られていませんが、後円部の石垣敷設状況は正円ではなく楕円形を呈しており、特に西側周溝部分が墳丘を侵食していたと考えられ、その状況に合わせて石垣を敷設した結果楕円形を呈すること

となった可能性があります。このことから後円部直径は20 m前後かと考えられます。周溝の深さについては明確ではありません。周溝内より近世以降と考えられる染付磁器片が出土しているため、少なくとも江戸時代以降に周溝の埋没が大きく進んだものと考えられます。

C区は、戦後の復興による整地作業が実施され、前方部検出状況は一部を除きかなり不明瞭な結果でしたが、C2区で南北に延びる東側周溝ラインを確認し、傾斜角度はA区の状況と概ね同様の形状を示すものでした。前方部南端の周溝ラインは明確ではないもののC1区での検出状況と、現在後円部と前方部を区切る直線的に敷設されている石垣位置を古墳築造期の状況と同一であると仮定した場合、前方部の規模は幅約8 m前後、長さ約5 m余りとなります。ただ、それも今回確定には至っておらず今後の調査のもと再検証する必要があります。

次に、椒古墳の発見当初に描かれた出土遺物絵図(図9)について紹介します。

絵図は幅94.2 cm、現存長164.5 cmの和紙に整然と描かれており、作者は明治45(1912)年、65歳で他界した地元光明寺住職で絵師の東山琴堂によって描かれています。それぞれに表題を付し、「御鏡」1点(表・裏)、「御骨」10数片、「御歯」12本、「人造石」1点、「金具」7点(六弁花形5、円形金具2)、「管玉」7点、「御剣」2点、「冑」1点、「甲」1点(さらに短甲に附属する取扱いで鉄製装具1点を描く)、「矛戟」4点、「劔」1点(直刀?)、「鏃」11点、「食器」11点(土師器高坏4、土師器小形壺大小7点)です。特に銅鏡の直径は11.7 cmと実物大で、高坏最前列の口径15.5 cm、小形壺最前列の口径7.5 cm及び5.4 cmを測り、ほぼ実物大に描かれています。さらに、鉄剣に至っては折れた状況まで克明に描写しており、出土当時の姿を忠実かつ実物大を意識して表現した絵図であることが理解できます。

幸いにもこれらの出土遺物が小破片とはいえ東京国立博物館に保管されている現在、形状復原を求める時、本絵図の存在が最重要資料となり得るものと云えるでしょう。



図9 椒古墳出土遺物絵図

国の重要文化的景観選定に向けて —有田川町 蘭島及び三田・清水の農山村景観—

有田川町教育委員会 川 口 修 実

1. はじめに

有田川町東部の清水地区（旧清水町）にある蘭島（あらぎ島）は、有田川の蛇行とその浸食作用によって形成された舌状の河岸段丘地形の呼称である（写真1、図1）。この自然の作用によって形成された独特の地形が、明暦元年（1655）にこの地域の初代大庄屋を務めた笠松左太夫によって3キロメートル以上の用水路が開削され、全国的にも稀有な棚田景観が生み出された。

蘭島を中心とした文化的景観は、蘭島の対岸にある展望所から見渡すと、単に蘭島だけではなく、山林や河川、棚田、集落、さらには水力発電施設など、多様な背景を伴った一体性のある景観が眼下に広がる。その景観は、何千年にもわたり絶え間なく繰り返されてきた人々の営みが生み出した各時代の要素が調和した姿である（写真2）。

蘭島の景観は、日本の棚田百選や第4回「美しい日本のむら景観コンテスト」で農林水産



写真1 蘭島周辺の航空写真



写真2 蘭島の景観



図1 蘭島の位置図（S = 1/50,000）

大臣賞を受賞するなど、全国的にも高く評価されており、有田川町のシンボリックな存在となっている。その景観は、蘭島が扇形のユニークな形状をしており、小規模で視覚的なまとまりがあるため、強い印象を与え、人々の記憶に残るが、これほど特徴的な棚田景観は稀有な事例であろう。

平成 25 年 6 月 21 日、蘭島と周囲の景観が「蘭島及び三田・清水の農山村景観」として国の重要文化的景観に選定するよう国の文化審議会で答申された。重要文化的景観の選定は、和歌山県内では初めてとなる。今回選定された区域は、有田川町三田区の一部と清水区の一部にわたる 110.7ha である。その範囲は、蘭島に灌漑する用水路によって耕作されている受益地と、江戸時代に笠松左太夫によって開発された歴史的に関わりの深い清水区小峠地区、歴史ある眺望地であり、緩斜面を利用した棚田の景観が広がる三田区の一部を含めた範囲が対象地域となっている（写真 3）。

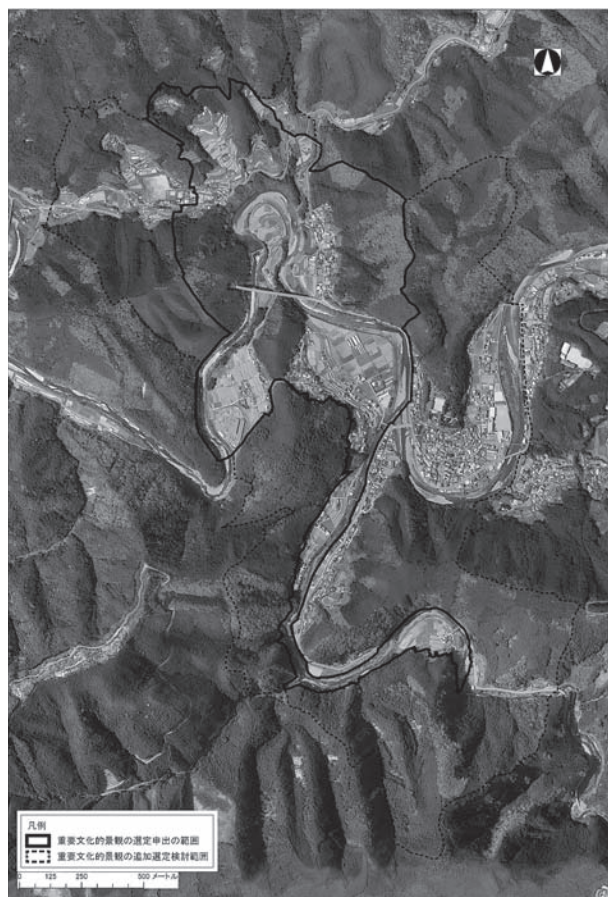


写真 3 選定の範囲

2. 文化的景観とは

文化的景観とは、平成 17 年の文化財保護法の一部改正により成立した新たな文化財の保護制度である。文化的景観は、人が自然と関わり合い、共生しながら長い年月をかけて形成してきた独特の景観地のことで、地域の生活や生業の歴史を理解する上で欠くことのできない文化遺産であり、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第 2 条第 1 項第 5 号より）」と定義されている。

文化的景観の中でも特に重要なものは、都道府県又は市町村の申出に基づき、「重要文化的景観」として選定されており、平成 25 年 4 月 1 日現在、全国で 35 件が選定されている。

重要文化的景観の保護制度は、地域の生活、生業に根ざした景観地を対象として、その価値を評価し、地域が主体的に護り、次世代へ受け継いでいく制度である。また、選定にあたっては、景観法に基づく景観計画を策定して景観計画区域や景観地区を設け、その中に文化的景観

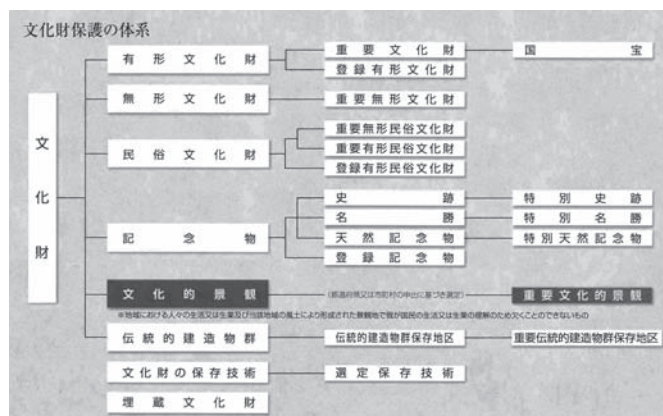


図 2 文化財保護の体系

を位置づけることが必要であり、景観法と文化財保護法の制度が連動していること、変化することを前提としていることなど、これまでの文化財の保護制度とは大きく異なっている。

3. 調査の経過と成果

蘭島及び三田・清水の農山村景観は、和歌山県を代表する文化的景観地の一つであるが、他の中山間地域と同様に少子高齢化、後継者問題、農作物の価格低迷、獣害の発生など現状の景観を保全していく環境は厳しいものがあり、その維持についても危惧され始めた。また、これまで観光資源としての活用が優先されてきたが、その諸活動が営農の継続や景観保全に十分還元されていないなど数多くの課題を内包しており、早急に保存活用体制を検討することが必要と判断された。

有田川町教育委員会では、これらの現状と課題を鑑み、蘭島及び三田・清水の農山村景観を次世代に継承していくためには、蘭島と周辺の文化的景観が単なる美しい風景ではなく、全国的にも優れた文化的な景観地であることを正しく評価し、その価値を地域住民と行政が共有することが急務であると考え、文化的景観の保護制度を活用した事業を実施することになった。

学術的な保存調査については、地元関係者や学識経験者から構成する「蘭島文化的景観保存調査委員会」を設立し、平成22・23年度の1年半にわたって蘭島と周囲の関連地域を対象に地質、動植物生態系、歴史、民俗、建築、景観工学、農業経済等の各分野について実施し、文化的景観の本質的な価値や特性、景観構成要素の特定を行った。

蘭島を中心とした景観の価値や特性については、主に以下の4点に集約される。

① 全国的にも稀有な地形と棚田景観

有田川上流域のように穿入蛇行によるまとまった河岸段丘が形成されている地域は全国的にも稀であり、特に蘭島のような対称的な河岸段丘地形は稀少である。さらに江戸時代の新田開発により全国的にも稀有な棚田景観が生み出され、審美的な価値も高い。また、多様な生態系が維持されていることも景観の価値を高めている。

② 豊かな歴史背景がある

当地域に人々が生活を始めたのは、縄文時代後期に遡るが、水田の開発は長久3年（1042）の高野山文書にその名が見え、約千年も前に遡る（写真4）。鎌倉時代には「ミミヲキリ、ハナヲソギ…」といったたどたどしい片仮名書きで、地頭の暴力を荘園領主に訴えた「片仮名書き訴状（国宝又続宝簡集 阿豆川荘上村百姓等片仮名書申状）」が著された日本史上でも著名な中世荘園（阿豆河荘）として知られている。江戸時代の明暦元年（1655）には、笠松左太夫が、有田川の支流である湯川川から引水して3km以上の水路を開き、蘭島をはじめとした新田開発や和紙生産を興したが、史料によってその開発過程や年代が特定できる点も貴重である。

③ 伝統的な水利慣行や習俗が残る

当地域では、古くから灌漑用水路は湯（ゆ）、水利組織は田人（たど）と呼ばれている。蘭島へ



写真4 中世に開発起源をもつ西原地区

の用水路は「上湯（うわゆ）」と呼ばれ（写真5）、今も田人によって共同管理され、田越しの灌漑が残るなど伝統的な水利慣行が継承されている。また、様々な民俗行事や風習が色濃く残されており（写真6）、これら無形の要素が景観を支えている。

④ 農村景観を楽しむ環境がある

非常に固定的な視点場をもつ蘭島を中心とした景観は、蘭島が扇状のユニークな形をした小さな塊状の棚田景観であるため、全体の棚田を認識し、記憶し、対象化できる景観であり、中山間の農村全体を一望できる、楽しみやすい環境がある。

4. 重要文化的景観の選定を機に

蘭島の景観を単に美しく、魅力的に感じるのは旅人の目である。文化的景観の真の価値は、その背景にある豊かな自然とそれを享受してきた人々の生活や歴史が理解されてこそ、うかがわれるものである。当地域では稲作や林業のほか、水田の畦畔や山畑を利用したシュロ生産、吹き水（湧き水）や谷水などの豊富な水源と、和紙の原料であるコウゾ栽培に適した霧の発生しやすい気候条件とを活かした保田紙の生産を副業とする人々の暮らしがあった（写真7・8）。湯と呼ばれる用水路は、田人の伝統的な水利慣行によって現在も維持され、伝統行事や習俗を守り伝える人々の姿など、無形の要素も色濃く残されていた。

有田川町清水地区は、県内でも有数の少子高齢化が進行している地域であり、文化的景観保全の課題は山積している。この景観を将来へ継承していくには、美しさだけではない蘭島の価値、蘭島以外の価値を住民といかに共有していくかが大きな課題である。今後は、重要文化的景観の選定を有効に活かし、保全による利益・利点が地域に還元される仕組みを構築することが望まれる。重要文化的景観の保護は、単なる土地の姿を保全するのではなく、土地と人々の生活が結びついた関係性を保全していくことである。蘭島の景観を通して「文化的景観を保全する意味」を多くの人々に問い直し、知っていただくこと、それが可能な環境を有する蘭島の景観を保全する意義は決して少なくないと思う。



写真5 上湯用水路



写真6 節分の火焚き行事



写真7 水田の畦畔に植えられたコウゾ



写真8 保田紙製造風景（昭和45年）

太田・黒田で見つかった中世大溝について —和歌山市 太田・黒田遺跡—

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 内 田 和 典

1. 遺跡の位置と調査経過

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の沖積平野の微高地上に位置しており、弥生時代から江戸時代にかけての大規模集落遺跡である（図1）。また、本遺跡の南半部には、豊臣秀吉による日本三大水攻めの一つである太田城跡の推定地が重複している。今回の調査地は、太田・黒田遺跡範囲内（南北850m×東西500m）のほぼ中央部にあり、太田城跡範囲内（南北450m×東西350m）の北側にあたる（図2）。今回の調査は、和歌山市太田二丁目13番9における集合住宅の建設計画に起因しており、和歌山市教育委員会文化振興課指導の下、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が植松新蔵氏から委託を受けて平成25年1月29日から同年3月16日まで実施した。

なお、本遺跡については現在出土遺物整理中であることから、本稿ではその概要を述べるに留め、詳細については、平成27年度刊行予定の報告書で述べることにしたい。

2. 大溝の概要

今回の調査地周辺では中世末期と考えられる大溝が検出されている。本調査区の東側に位置する2・3次調査等では、東西方向に約130m以上、幅8m以上、深さ2m以上、覆土から鎌倉時代初期の遺物等を含む大溝が検出された（北野2008・県史編さん委編1983等）。

今回検出した大溝は、幅約10m、検出した肩部からの深さが約2mとなり、北東－南西方向をとる（図3・写真1）。大溝の埋土は、上部層では江戸時代以降の整地土層、大溝廃棄時に伴うと考えられるブロック土層、鉄分沈着層、礫層が順に堆積しており、下部層では自然堆積層と考えられるシルト層となる。上部層の大溝廃棄時に伴うブロック土層からは、弥生時代から古代の遺物が多く出土しており、また、下部層からは五輪塔の基台や御正体と考えられる銅板等が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、従来、東西方向に直線的に延びると考えられてきた大溝が、北東－南西方向をとることを確認できた。太田城跡推定復原図によれば、17・19次調査地点の間においてやや南側に向いており、今回検出した大溝の方向性に合致している（図4）。今後は、大溝埋土の出土遺物等の検討を通して、太田城水攻めに関する考古学的知見からの成果を提示したい。

【参考文献】

北野隆亮 2008「太田城跡の考古学史と景観復元」
『紀州経済史文化史研究所紀要』第29号 和歌山
大学紀州経済史文化史研究所

和歌山県史編さん委員会編 1983「太田・黒田遺跡」
『和歌山県史 考古資料』 和歌山県



図1 太田・黒田遺跡、太田城跡と周辺の遺跡分布図



図2 今回の調査区位置図



図4 太田城跡推定復原図（北野 2008 に加筆）

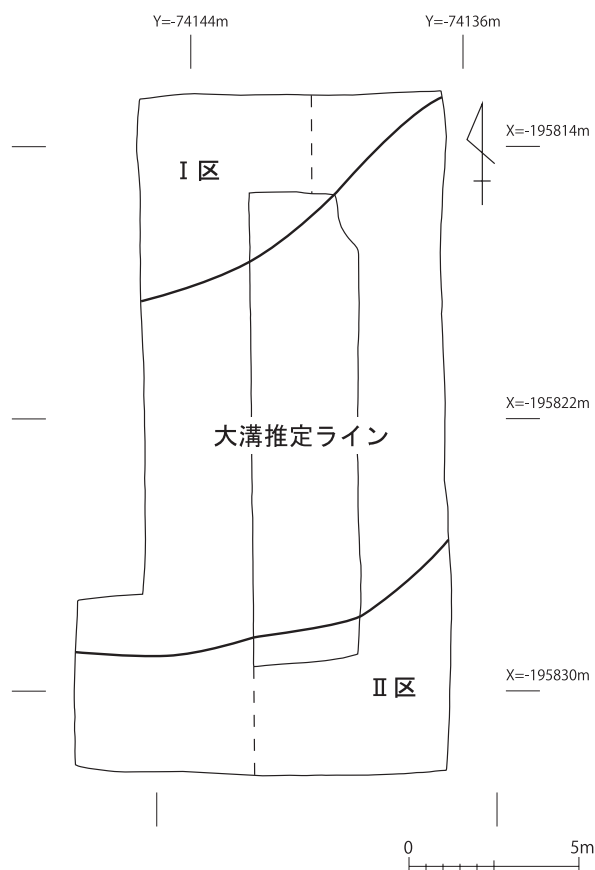


図3 大溝推定ライン模式図



写真1 大溝全景（北東から）

前方後方形墳丘墓の調査 —和歌山市 井辺遺跡—

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団

菊 井 佳 弥

1. はじめに

井辺遺跡は、福飯ヶ峯丘陵北西の沖積地上に位置し、遺跡範囲は、丘陵に沿って南北約 0.5 km、東西約 1.5 km で扇状に広がる。過去調査では、遺跡の中央や東側で、弥生時代末～古墳時代初頭の井戸や竪穴建物がみつかり、集落遺跡として知られている。（第 1 図）。

今回の調査地が位置する遺跡東部では、第 6 次調査や第 7 次調査において弥生代後期から古墳時代前期の竪穴建物が検出されている。

2. 調査概要

今回の調査は、住宅開発に伴い実施し、760 m²を対象とした。主な遺構としては、古墳時代初頭の墳丘墓 3 基、竪穴建物 15 基、弥生時代後期の井戸 2 基があり（第 2 図）、弥生土器、土師器、木製品等がコンテナ 230 箱分出土した。

1 号墓は、全長 19.5 m、幅 13 m の前方後方形である。後方部周溝は、幅 2.5 ～ 3.5 m、深さ 0.6 ～ 0.7 m で、幅が広く深いのに対して、前方部周溝は幅 1.0 ～ 2.5 m、深さ 0.3 ～ 0.6 m であり、前方部の南東隅で途切れる。前方部南側の断ち割りで、溝状の落ち込みを検出しているが、後方部や前方部東側の周溝では、埋土が異なるため、前方部南側には周溝がない可能性がある（第 3 図）。周溝埋土は、5 層に分けることができる。1 層からは、須恵器片、3 層からは、庄内式新段階から布留式古段階の土器や木片、4 層からは庄内式中段階から新段階の完形に



図 1 調査区位置図 (1/50000)

近い土器が数点出土している。

2号墓は、一辺約12mの不定形な方形である。周溝は、幅3.8m、深さ0.4mで埋土を5層に分けることができる。3層からは庄内式新段階から布留式古段階の土器片が多数、4層からは庄内式中段階から新段階の完形に近い土器数点と鋤が出土している。

3号墓は、一辺約10mの方形であり、周溝南東端に陸橋をもつ。周溝は、北東側が幅3.5m、深さ0.4m、南西側が幅6.0m、深さ0.3m、南東側が幅2.5m、深さ0.7mであり、陸橋部のところで屈曲する。陸橋部の南側には、3号墓と周溝を共有する墳丘墓が存在する可能性がある。周溝埋土は、5層に分けることができ、3層からは、庄内式新段階から布留式古段階の土器数点が周溝の北東側でまとまって出土した。4層からは、庄内式中段階から新段階の完形に近い土器が周溝の南西側で多く出土した。

3. まとめ

今回の調査は、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物や井戸に加えて、井辺遺跡では初めてとなる古墳時代初頭の墳丘墓を3基検出した。検出した竪穴建物と墳丘墓には重複関係を持つものがあり、それらのすべては、竪穴建物が廃絶した後に墳丘墓が造られる関係となる。このことから、調査地周辺では古墳時代初頭の短期間に、集落域から墓域へと土地利用の変化が見られた。

また、今回検出した墳丘墓により、弥生時代から古墳時代に至る過渡的な様相を示す墓制のあり方が明らかになった。和歌山県内における前方後方形墳丘墓は、和歌山市川辺遺跡、御坊市尾ノ崎遺跡や南部町片山遺跡等がある。1号墓は、4例目となり、秋月遺跡の前方後円形墳丘墓や福飯ヶ峯の丘陵上に築かれた同時期とされる全長約60mの前方後円墳、井辺前山24号墳との勢力関係を考える上でも重要な成果と言える。

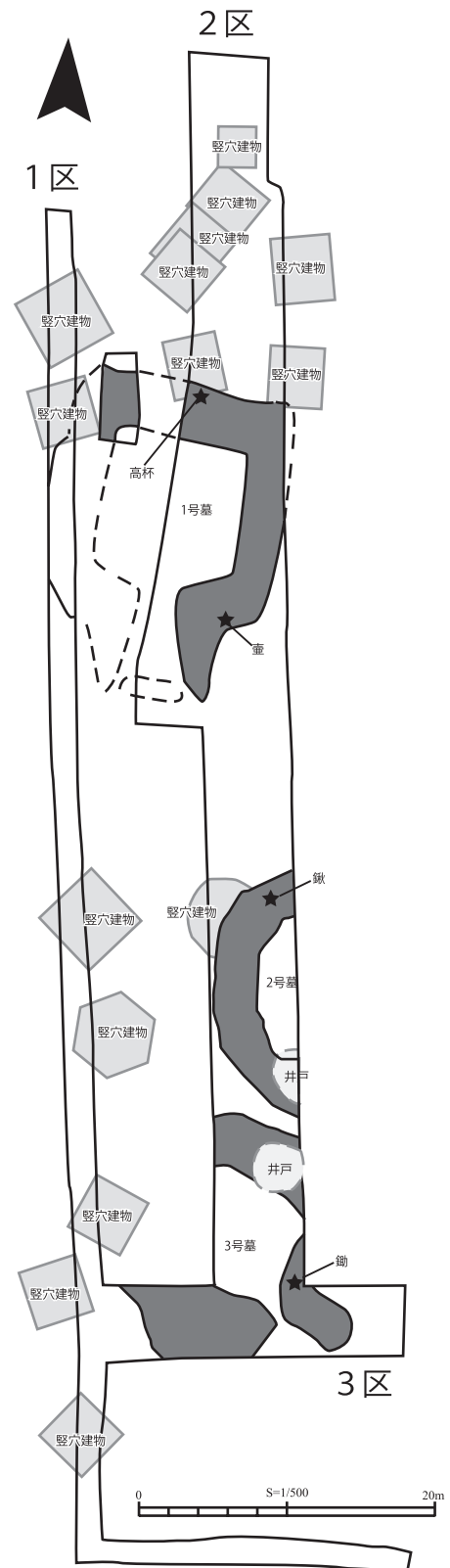


図2 調査区平面図 (1/500)

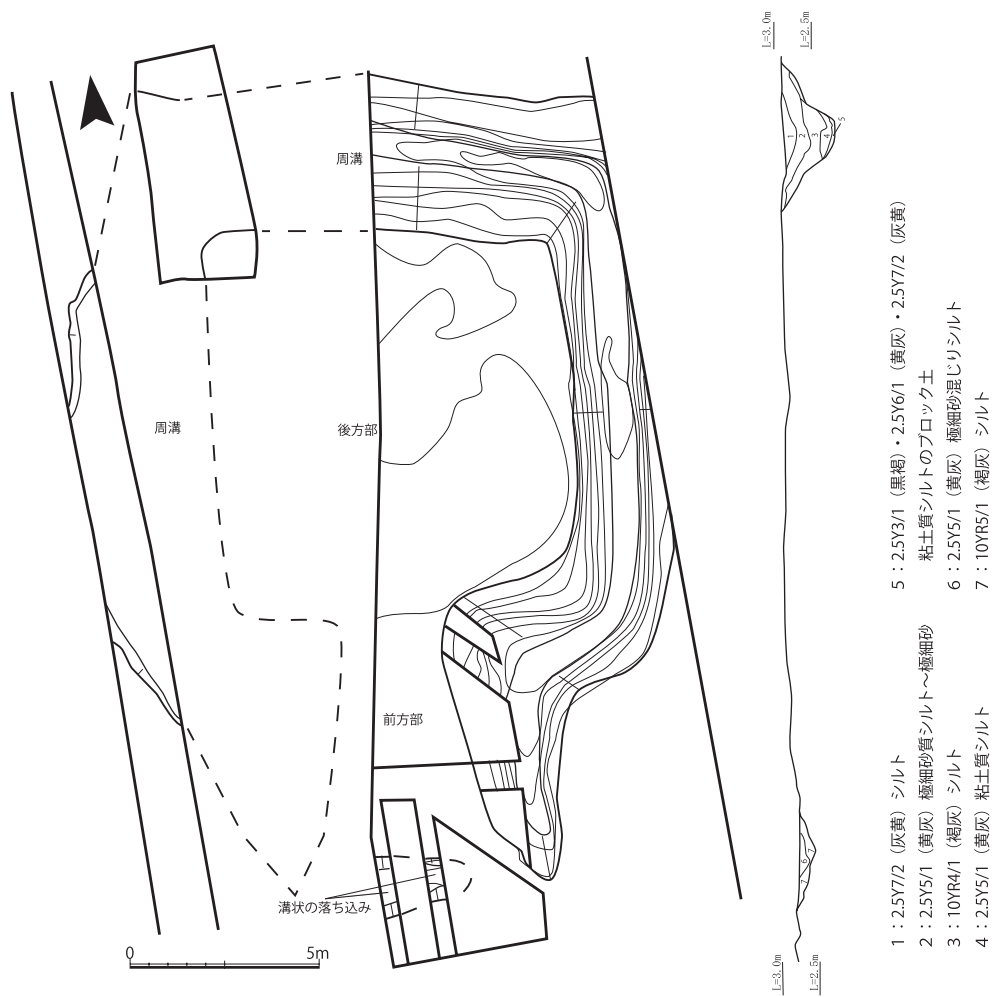


図3 1号墓平面・断面図 (1/200)

【参考文献】

- 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『井辺遺跡 第6次発掘調査概報』
 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『井辺遺跡 第7次発掘調査概報』



写真1 1号墓全般（南から）



写真2 調査区全景（北から）



写真3 2号墓全景（北西から）



写真4 3号墓全景（南東から）▶

古墳時代から古代にもあった岩橋集落 —和歌山市 岩橋遺跡—

公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団 内 田 和 典

1. はじめに

岩橋遺跡は、紀ノ川下流域南岸の平野部に立地し、花山古墳群が存在する花山丘陵の東側に位置している（図1）。岩橋遺跡の範囲は、東西600m、南北約500mの遺物散布地として知られており、今回の調査地は、本遺跡範囲の北西端に位置する。本遺跡の所在する和佐から岩橋周辺にかけての平野部には、岩橋Ⅱ遺跡（古墳時代～室町時代）や花山古墳群の北東裾部に広がる栗栖Ⅰ遺跡（古墳時代）等が立地しており、その他にも遺跡内容は不明ではあるものの遺物散布地がいくつか点在している。中でも岩橋遺跡の北東部に位置する岩橋高柳遺跡（県センター2004）は、伝岩橋城跡のものと考えられる室町時代の堀状遺構等が検出された貴重な発掘調査事例の一つである。

岩橋遺跡の周辺は、従来調査件数が少なかった地域であったが、近年宅地造成等に伴う開発に起因する調査が実施されるようになり、本遺跡の性格の一端が明らかになりつつある。図2は岩橋遺跡における和歌山市教育委員会（以下、市教委）及び財団法人和歌山市都市整備公社（現公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団）による過去の調査実施地点を示したものである。2009・2010年度には市教委による確認調査が実施され、奈良時代から平安時代の遺物包含層や古墳時代初頭前後の自然流路等が検出された（市教委2011・2012）。また、2011年度には、財団法人和歌山市都市整備公社による第3次調査が実施され、古墳時代初頭前後の竪穴建物に関連すると考えられるピット群や江戸時代の粘土採掘坑等が確認されている（市公社2011）。第5次調査では、平安時代の水田耕作や畑作に伴うとみられる素掘り小溝や畝状遺構など農耕に関連すると考えられる遺構が多く検出されている（市財団2013）。

今回の調査は、和歌山市岩橋字宮ノ段1012番他における宅地造成地内の市道移管部分に伴う開発計画に起因する。市教委が調査対象地内において7ヶ所の調査区を設定し、第6次調査を実施した。その結果、第4層下面において中世以降と考えられる溝等を確認できたことから、本発掘調査を実施することになった。本調査では、第4・5層上面において遺構面を2面確認できた。



図1 岩橋遺跡と周辺の遺跡分布図



図2 今回の調査区位置図

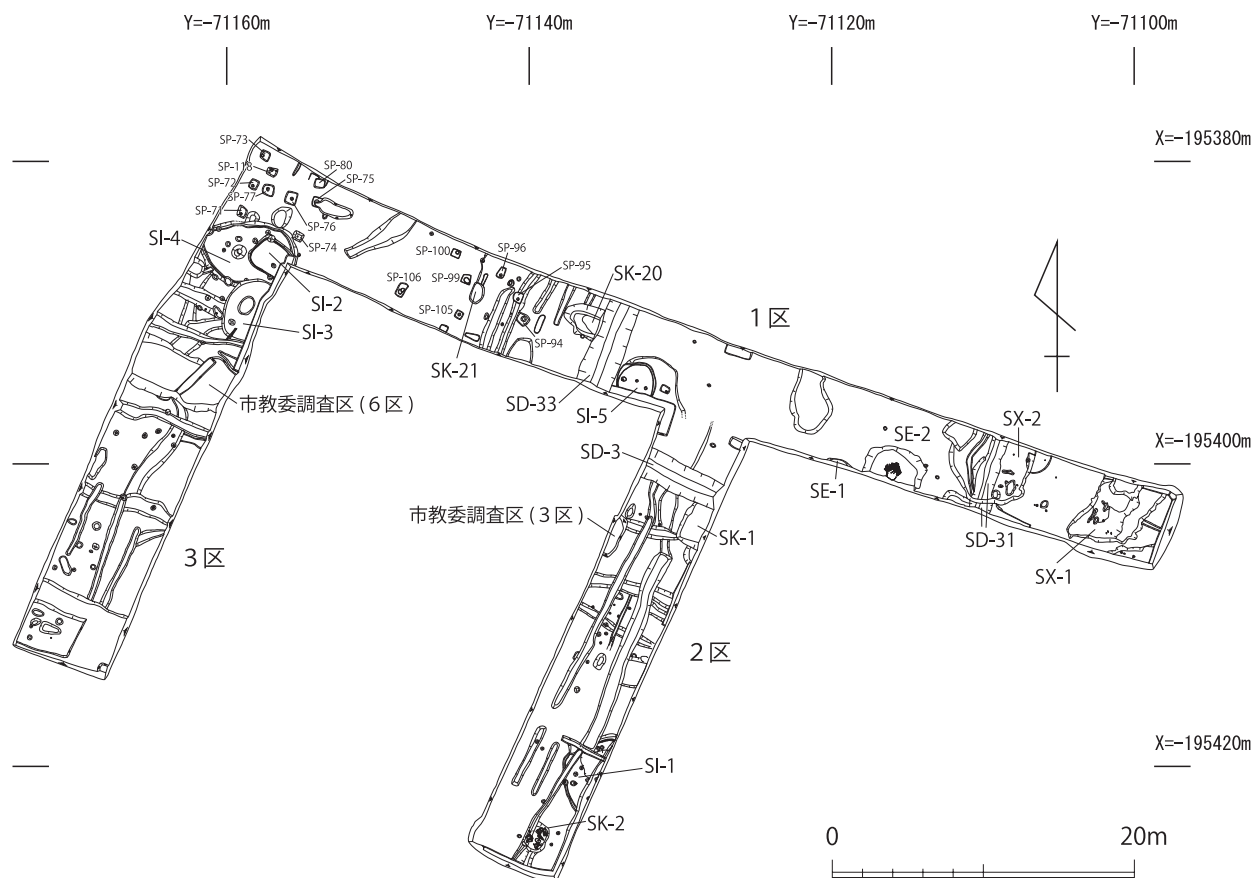


図3 遺構平面図

現地調査は、市教委文化振興課指導のもと、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団がアズマハウス株式会社から委託を受けて実施した。現地調査期間は平成24年9月19日～同年11月21日の約2ヵ月間である。

2. 調査成果

今回の調査では、第4・5層上面を中心に竪穴建物、溝、井戸、土坑、ピット列、粘土採掘坑等を確認した。本稿では、竪穴建物、溝、井戸について概要を述べることにしたい。

竪穴建物

今回の調査では第5層上面において古墳時代初頭頃に位置付けられる竪穴建物SI-1(2区)、SI-2～4(3区)、SI-5(1区)を検出した。以下、埋土から遺物が多く出土したSI-4の内容について説明する。

[SI-4] (写真4)

SI-4は調査区北西側(X=-195340 m、Y=-71160 m付近)に位置しており、第5層上面で検出した。平面形の一部は調査区外にまで延びるが、長楕円形状を呈するものと考えられる。中央付近には、直径約1.0 m、深さ約0.4 mの炉跡が位置している。炉跡内部からは焼土や炭化物などが出土した。明確な柱穴痕跡を確認することはできなかったが、壁溝付近においてピット2基を検出した。埋没時期は庄内式併行期の甕等が出土していることから、古墳時代初頭頃に位置付けられる。

溝

今回の調査では古墳時代初頭頃～中世の溝を多く検出した。特に古墳時代中期以降のSD－31・33（1区）、SD－3（2区）についてその内容を述べる。

[SD－3]（図3）

SD－3は、2区北側（X=-195400 m、Y=-71130 m付近）に位置し、幅2.0 m、深さ0.7 m、断面が逆台形状となり、南東から北東方向に伸びるものである。しかし、SD－3は2区の西側に位置する3区にまでは伸びていない。後述するSD－3・33が南北方向に伸びることから、SD－3は、SD－33につながるか、または分断されるものと想定することができる。

[SD－31]（図3・写真5）

SD－31は、1区東側（X=-195400 m、Y=-71110 m付近）に位置しており、粘土採掘坑と考えられるSX－2によって削平されているため、SD－3・33とは遺存状況が異なる。SD－31は、検出幅約1.5 m、深さ0.3 mとなり、ほぼ南北方向に伸びる。

[SD－33]（図3）

SD－33は、1区中央部（X=-195392 m、Y=-71134 m付近）に位置しており、SD－33は、幅約2.50 m、深さ0.7 m、SD－31と同様の方向性をとるものと考えられる。

井戸

井戸は1区東側Y=-71116 m付近の第5層上面において2基検出した。SE－1は平面形の大部分が調査区外に伸びるため一部を検出したのみであったが、後述するSE－2の掘り方に類似していることや遺構覆土がブロック土によって構成されていたことから井戸と判断した。ここでは、内容を把握することのできたSE－2について説明する。

[SE－2]（写真6）

SE－2は1区東側（X=-195400 m、Y=-71116 m付近）に位置する。一部が調査区外にまで伸びているが、掘り方は長形状の平面形を呈するものと考えられる。掘り方の検出長は約4.0 m、検出面からの深さは2.8 m以上となり、中央付近に残存長1.4 m、直径約0.9 mの一木の丸太を分割して割り抜いた井戸枠を検出した。井戸枠内部の上部層からは、平安時代前期頃の土師器甕を2個体確認することができた。また、掘り方埋土の上層からは、黒



写真1 1区全景（西から）



写真2 2区全景（南から）



写真3 3区全景（南から）

色土器等が出土している。また、井戸内部の下部層を確認するために掘削を行ったが、湧水が激しかったことから、確認には至ることができなかった。なお、井戸枠として利用された木材の樹種については、今後自然科学分析等を行った後に報告を行う予定である。

3. まとめ

今回の調査では、第4層上面で中世に形成された遺構群、第5層上面において古墳時代初頭頃～平安時代の遺構を確認した。特に、古墳時代初頭頃の竪穴建物、古墳時代中期以降の溝、奈良時代から平安時代の井戸、中世頃の粘土採掘坑や土坑等を検出することができた。

第4層上面は2区南側において標高5.20mとなり、2区の北側に位置する1区や東側の3区では標高5.30mとなり、北側がやや微高地となる。第5層は1区東側(X=195404m、Y=71108m)では標高5.15m前後で、1区西側及び2・3区に向けて標高5.25m前後となり、東側に向けて緩やかな傾斜を持っている。市教委による2009・2010年度調査で確認された古墳時代初頭頃の自然流路が、今回の調査の東側を流れるものと考えられることから、1区東側の緩やかな傾斜が自然流路に関連する可能性がある。遺構の時代別変遷や立地状況の違いについては、出土遺物整理作業と合わせて今後詳細に検討を行うことにしたい。

【参考文献】

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 2013『岩橋遺跡第5次調査実績報告書』

財団法人和歌山県文化財センター 2004『岩橋高柳遺跡』

財団法人和歌山市都市整備公社 2011『岩橋遺跡第3次調査実績報告書』

和歌山市教育委員会 2011『⑦岩橋遺跡』『和歌山市内遺跡発掘調査概報-平成21年度-』

和歌山市教育委員会 2012『⑬岩橋遺跡』『和歌山市内遺跡発掘調査概報-平成22年度-』



写真4 SI-4



写真5 SD-31



写真6 SE-6

紀ノ川北岸の集落遺跡 —和歌山市 六十谷遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 津 村 かおり

1. はじめに

六十谷遺跡は紀ノ川北岸の和歌山市六十谷に所在する。六十谷遺跡周辺は奈良県の大台ヶ原から西流する紀ノ川が紀伊水道に流れる。和泉山地からいくつかの支流が紀ノ川へ流れ、その支流により形成された複合扇状となり、紀ノ川の侵食により扇状地末端は段丘地形となる。六十谷遺跡は紀ノ川の氾濫の影響が少ない段丘上に立地している。

和歌山県により都市計画道路西脇・山口線道路改良工事の計画が持ち上がり、平成 23・24 年度にかけて 3 次の発掘調査を実施した。調査面積は 1,667 m²で、平成 25 年度には出土遺物の整理作業を行い報告書の刊行を行った。

2. 調査の成果

検出した遺構は中世が主であり、弥生時代・古墳時代の遺構も見られた。

中世の遺構 検出した主な遺構は、土坑・柱列・堀状遺構・落ち込みなどがある。柱列は 3 基の柱穴から構成される 3.9 m 分を検出し、主軸方向は N-9°-E である。その内の 1 基からは土師器の小皿が出土した。堀状遺構は調査地の最も東側で検出した遺構で、検出した肩幅は約 12 m、底面は約 3 m と逆台形を呈し、深さは約 2 m である。延長は約 11 m 分を検出した。遺物は土師器・瓦器など中世の遺物が出土し、徐々に埋没したものと考えられる。調査区南側では落ち込みを確認し、旧地形の落ち込みであると考えられる。この落ち込みは各調査時においても検出しており、東側から南西に向かい標高を下げる。埋土からは土師器・瓦器の皿や碗、小皿が出土しており、鎌倉時代～室町時代にかけて埋没したと推測される。

古墳時代の遺構 調査地中央付近で検出した竪穴建物 1 がある。検出した規模は南辺が 5.42 m、形状は隅丸方形の竪穴建物である。付属施設は貯蔵穴と考えられる土坑や主柱穴 1 基を検出した。出土遺物は須恵器の杯や無蓋高杯、土師器、砥石が出土している。帰属時期は古墳時代中期と考えられる。

弥生時代の遺構 土坑・竪穴建物 2 などがある。検出した土坑の内 1 基は土器棺墓で、東西 0.78m、南北 0.8m の不整形な円形を呈し、深さは約 0.3m である。口縁部を打ち欠いた甕と



調査位置図 (S=1/50,000)



調査地 遠景 (西から)

甕の底部を倒立させ転用して蓋をかぶせた状態で出土した。弥生時代中期に帰属する。調査区西側で検出した土坑3-5は、北と南が攪乱と調査区外になるが、東西約0.8m、南北約1.50m分を検出した。弥生時代中期の高杯が出土している。竪穴建物2は調査地東側で検出した。北側は調査区外となり、南側は後世の遺構により削平され正確な規模は不明であるが、東西4.27mで東辺は4.98m以上となることから方形の竪穴建物と推測される。付属施設は炉となる土坑があり、底部が欠損した長頸壺が出土している。その他にも時期の不明な遺構や近世の井戸と推測される土坑なども検出した。

3. まとめ

今回の六十谷遺跡の発掘調査では、弥生時代から近世までの遺構や旧地形の状況を確認し、集落の展開や土地利用など長期間の生活活動の痕跡を明らかにすることができた。

旧地形の状況は、調査区東側から南西に向い標高を下げる地形を確認し、旧地形の落ち込み部分には弥生時代から室町時代の遺物が多く含まれる堆積層を確認した。堆積後の地表面は平坦面を成すことから、旧地形の傾斜を緩和し平地を拡張することを目的として整地されたと考えられる。検出した遺構の分布する位置は、標高10.00m前後の調査区中央から東側となる。弥生時代では竪穴建物、土坑、土器棺墓がある。古墳時代の遺構では竪穴建物を検出し、古墳時代中期前半の須恵器が出土している。六十谷遺跡の周辺には楠見遺跡など大陸文化に影響された遺跡が多く見られ、調査で検出した竪穴建物からも韓式系土器の甑出土していることからが当遺跡においても、その影響を少なからず受けていたと考えられる。

堀状遺構については、文献資料から六十谷遺跡周辺を本拠地とした湯浅党の一族があげられ、城跡の存在が推測される。今回の調査地から城跡に関する遺構が他に検出できていないことから、城跡の西側縁辺部に配された堀状遺構と考えられる。古代に関しては、今回の調査では確認できなかった。

以上の調査成果から、段丘上端の裾部である、遺跡縁辺部の一部を明らかにすることができた。

遺跡の集落などの中心部は標高10.00m付近から北側に広がるものと推測され、六十谷遺跡の性格については、今後の調査に期待される。



土坑遺物出土状況（南西から）



堀状遺構（南西から）

旧河道が検出された遺跡 —和歌山市 和田遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 津 村 かおり

1. はじめに

和田遺跡は和歌山市に所在し、紀ノ川南岸の同市南東部の和田盆地に位置する。和田盆地は山東地区から西流する和田川により形成された低湿な沖積氾濫原である。今回の調査地は、遺跡範囲の中央北側に位置しており周辺一帯には河南条里が良好に残っている。また調査地の西側には古墳時代に起源をもつ宮井用水が流れ、現況は一面に水田が広がっている。

今回の調査は、秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査で、調査面積 1,557 m²を実施した。

2. 調査の成果

今回の調査では土坑、井戸、溝、落ち込み状遺構などを検出した。

弥生時代 調査地の東部で検出した井戸は、直径 2.39 mの円形を呈する大型のもので、素掘りの井戸と考えられる。遺物は弥生時代前期と考えられる突帯を貼り付けた壺が出土しており、帰属時期は弥生時代前期のものと考えられる。調査区中央で検出した土坑は、直径約 0.5 mの円形を呈し、深さは約 0.3 mである。遺物は弥生時代中期と考えられるミニチュア土器の壺が出土しており、壺の肩部には刺突文や波状文を巡らせている。

古墳時代 調査区西側から南側にかけて検出した落ち込み状遺構は、調査区中央部分から西側に向って落ち込む状況を確認した。遺物は、検出した南側の肩部から多数の土器が出土しており、弥生時代中期の壺や古墳時代の高杯、甕、木製品、小型の石斧や砥石などの石器も出土している。須恵器は含まれていない。出土遺物と堆積状況から、弥生時代末から古墳時代前半にかけて埋没したものと考えられる。調査区北側で検出した土坑は、直径約 0.7 m、深さは約 0.5 mの円形を呈する。遺物は古墳時代中期の甕や高杯などの土師器が出土している。調査区南東端で検出した溝状遺構は、東側・南側は調査区外に延び、西側は調査区中央で南側に曲がる。遺構の全容は明らかではないが、肩幅は約 2 m以上、長さは約 14 m分を検出した。深さは南端で約 0.3 mとなり、北側から緩やかに傾斜し中央部分で平坦面となる。遺物は南側で 10 cm大の砂岩・片岩が集積して出土した。他に脚台のつく製塩土器、滑石製



調査位置図 (S=1/50,000)



←ミニチュア土器



↓有孔円盤

の白玉や有孔円盤、サヌカイトの石鏃なども出土している。

古代～中世 調査区北西部で検出した井戸は、直径約 0.8 m の円形を呈する。四隅に直径 10 cm ほどの杭をうち込み、周囲に板材を貼り井戸枠としている。上層の埋土を取り除くと 30 cm 大の砂岩・片岩が重なり堆積していた。さらにそれらを取り除くと、土師器に 15 cm 大の白石を入れた状態で埋設されており、廃絶に伴い何らかの祭祀を行ったものと考えられる。

その他に中世以降の明瞭な遺構は確認できなかったが、包含層中からは磁器などの遺物がみられた。

3. まとめ

今回の和田遺跡の調査では、弥生時代前期の土器が出土した井戸や弥生時代中期の土坑を検出し、また調査地西から南にかけての広い範囲で落ち込み状遺構を検出した。落ち込み状遺構は弥生時代末～古墳前期にかけて埋没したものと考えられ、堆積状況から葦などの植物が見られる沼地のような環境であったと推測され、旧河道の肩部分と考えられる。また調査地全体に落ち込み状遺構の埋土が薄く堆積しており、落ち込み状遺構が埋没した前後に水害や流水方向の変化などがあったと考えられる。古墳時代中期以降には土坑や溝状遺構、古代から中世にかけての木枠の井戸を検出しており、弥生時代から中世に至るまでの長期間に亘り、周辺に人々が生活を営んできたことが窺い知れる。

文献資料による調査地周辺の記載では、和田川の塩入常荒田といわれ作物の生産や集落の形成は困難な地域とされていた。しかし、今回の調査で井戸など採水する遺構を検出することができ、周辺に集落の存在が考えられる。また調査地の東側には微高地が広がることが判明し、良好な遺構を検出することができた。

以上のことから、微高地が展開すると推測される調査地東側から南東にかけ集落などの遺構が展開すると考えられ、遺物量が比較的小さい中世以降に、河南条理の区画整備等により水田として土地利用が行われ、現在に至ったと推測される。



井戸・弥生時代前期の遺物出土状況（南西から）



落ち込み状遺構の遺物出土状況（南から）

集落の変遷 —和歌山市 田屋遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖

1. 調査の経緯と経過

今回の発掘調査は、近畿農政局により紀伊平野農業水利事業が計画され、その予定地の一部が和歌山県埋蔵文化財包蔵地の田屋遺跡に該当したため、和歌山県教育委員会が確認調査を実施し、その結果に基づき、埋蔵文化財が展開していると確認された範囲について調査を実施することとなった。調査対象地は、南側の六箇井用水と北側の田圃擁壁の間の幅約 2.5 m、長さ約 130 m の細長い箇所であり、調査面積は 333 m² である。

2. 位置と環境

田屋遺跡は紀ノ川の河口から約 9 km 遡った北岸の和歌山市田屋に所在し、標高約 6.0 m を測る。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川や和泉山脈から南流する河川によって形成された沖積地に立地しており、弥生時代後半から古墳時代を中心とする集落遺跡である。その範囲は東西約 1 km、南北約 750 m とされている。遺跡の東端は弥生時代から室町時代の集落遺跡である西田井遺跡と接している。遺跡の西端では、平成 17 年に阪和自動車の西側一帯において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が六箇井用水の北及び南側を対象に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施している。調査では、六箇井用水の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であり、北側は直川用地内において奈良時代から平安時代の溝や自然流路が検出されている。この結果をもとに、田屋遺跡西端の一部範囲変更が行われている。

3. 調査の成果

検出した遺構は、検出した層位により、第Ⅳ－3・4 層上面を第 1 遺構面、第Ⅵ層上面を第 2 遺構面とした。それぞれの遺構面で検出した遺構からは、土師器や瓦器が出土しており、12 世紀後半から 13 世紀に帰属すると考えられる。また、第 2 遺構面の調査区中央では弥生時代の自然流路を検出している。

第 1 遺構面では、調査区の中央から南で、溝 1 条、柱列 1 列、多数の土坑・ピットを検

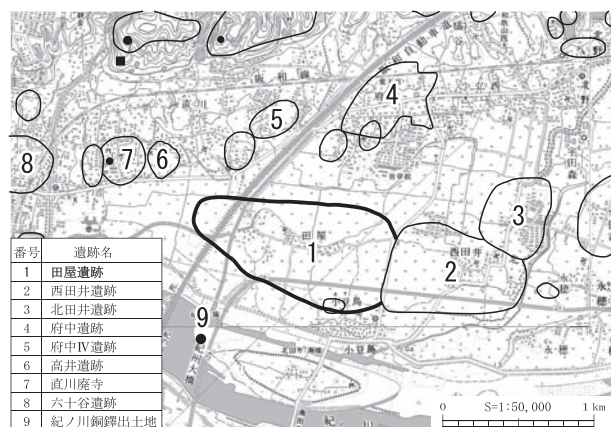


図 1 田屋遺跡周辺の遺跡分布図



写真 1 調査前状況（西から）

出した。中央南側で検出した南北方向の溝の規模は、幅 2.25 m、深さ 0.8 m である。堆積土の上層からは多数の土師器や瓦器が出土し、多量の炭化物が含まれていた。周辺の遺構からも炭化物を含む堆積土や、二次焼成のため赤く変色した遺物が確認されたため、火災後の整地に伴って埋められた可能性が考えられる。柱列は溝の約 10 m 北で検出された。柱穴は南北方向に柱間 1.4 ～ 1.5 m で 4 基を検出した。北端で検出した柱穴からは瓦器の小皿が正位置で出土しており、意図的に埋設した可能性も考えられる。第 2 遺構面では、溝 6 条、井戸状遺構 2 基、自然流路 1 条、多数の土坑・ピットなどを検出した。溝は、調査区南側で東西方向に隣接して検出した 3 条と、中央北から南にかけて検出した南北方向の 3 条がある。北側で検出した溝 2 条は、幅・深さとも小規模なものであるため、何らかの区画に利用された可能性が考えられる。井戸状遺構は調査区の南側で検出しており、調査区の南端で検出したものは直径 0.8×0.97 の円形を呈している。深さ 0.8 m まで内傾して掘削されており、その地点での直径は 0.4 m と狭小であった。堆積は、検出面から約 0.3 m 下がっ



写真2 調査区中央全景 第1遺構面（北東から）



写真3 溝 第1遺構面（北から）

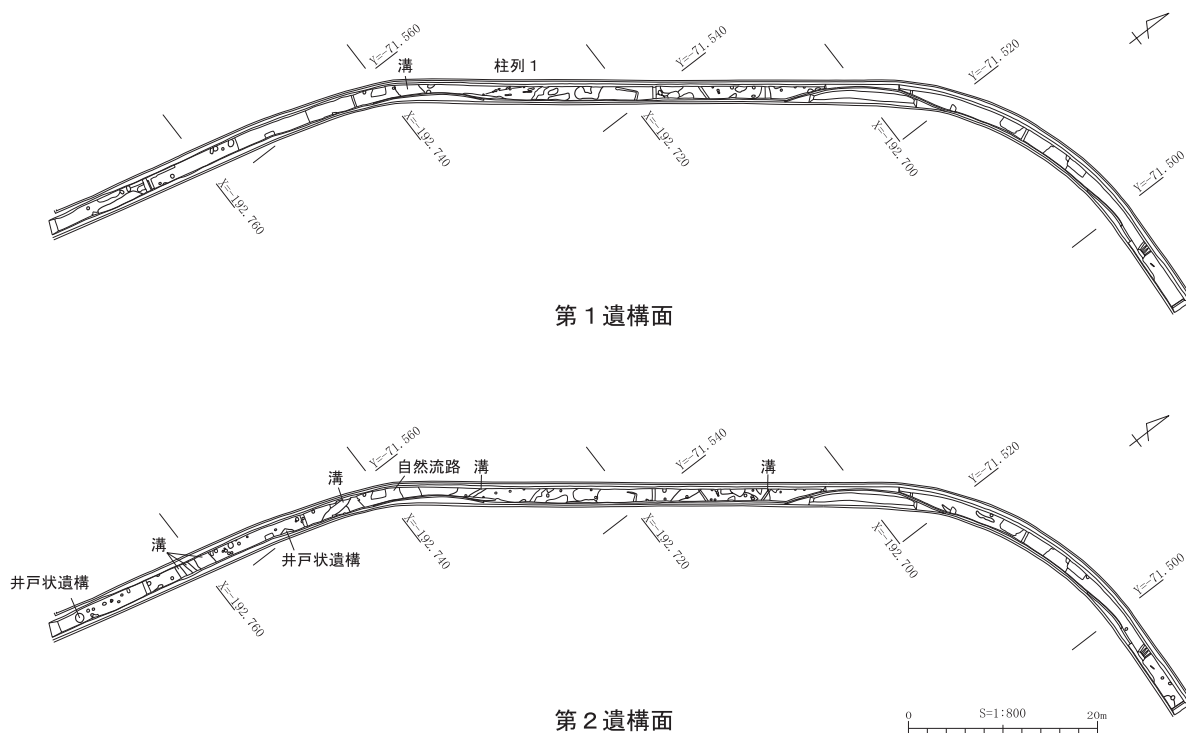


図2 調査区遺構配置図

た上層と下層の壁面付近境界で堆積の異なる埋土を確認しており、何らかの設備があった可能性も考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土している。自然流路は調査区中央で検出された。確認した規模は長さ 11.64 m、深さは 1 m 前後である。遺物は弥生時代後期の土器の他、スクレイパーや叩石といった石器も出土している。当初、南北方向に流れると考えたが、調査地の約 400 m 南東で 1990 年に実施された社団法人和歌山県文化財研究会と、本年度行われた公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団の調査によって検出された自然流路の延長方向に、本調査区で検出した自然流路が位置するため、北西から南東方向に流れる幅 11.64 m を測る自然流路である可能性が考えられる。

4. まとめ

今回の調査地の旧地形は、中央付近に比較的広範囲の平坦面があり、北東側は微高地に至る傾斜地、南西端は南西に向かって下降する傾向にある。遺構が確認できた範囲はほぼ中央から南側の平坦面に限られる。平安時代後期から鎌倉時代の遺構では、土地区画に利用されたと考えられる溝のほか、柱列や井戸状遺構が検出されている。遺物では、土師器の皿・小皿・土釜（罌釜）、瓦器の椀・小皿など日常雑器が多く出土している。これらは、周辺の当該期における集落の展開を想定させ、古くから知られる六箇井用水が現在とは異なる位置に流れていたことを示している。弥生時代の遺構は自然流路のみで、遺物も自然流路から出土したのみである。そのことから図 3 で想定した、調査区北西に延長する自然流路周辺に当該期の遺構が展開していると考えられる。

田屋遺跡での既往の調査によって、遺跡の様相が想定されてきている。遺跡の立地する沖積平野は、紀ノ川や和泉山脈の南麓を開析する小河川（自然流路）の堆積によって形成された。これまでの調査で多くの自然流路が検出されており、その流路に沿ってまず弥生時代後期の集落が形成された。その後、灌漑技術の発展に伴い、古墳時代には多くの集落が広い範

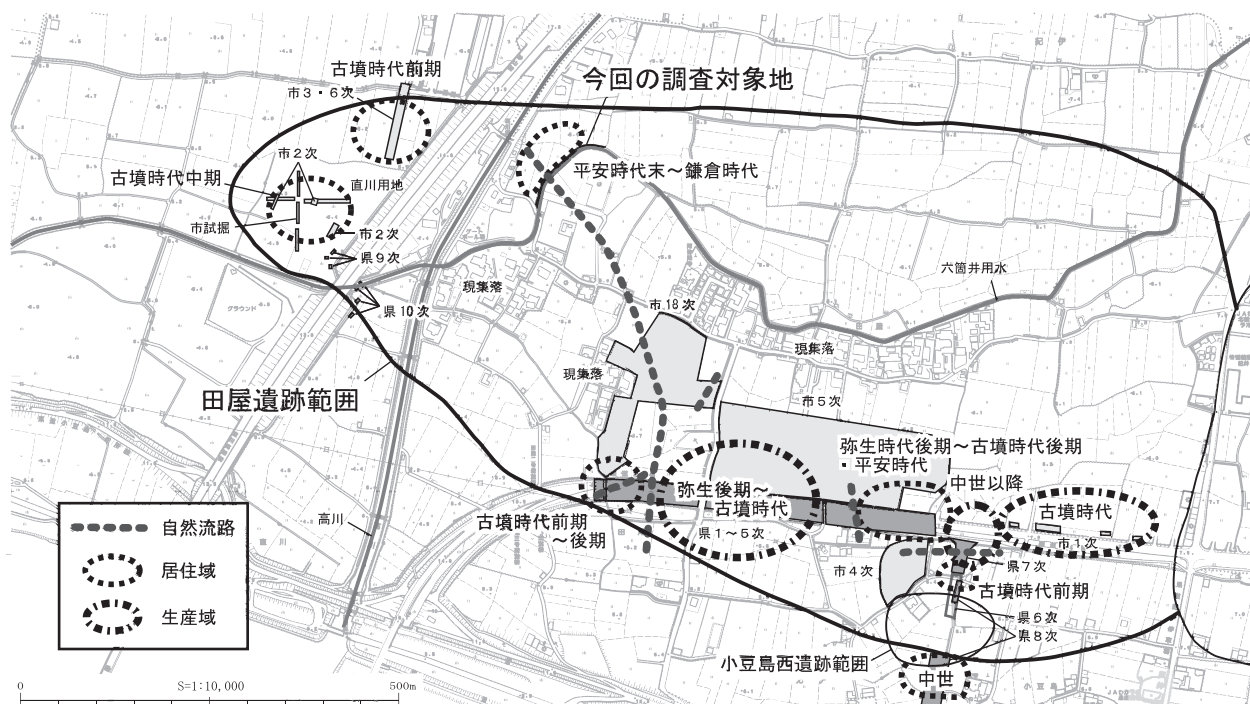


図3 既往の調査から想定される田屋遺跡の土地利用



写真4 柱列 第1遺構面（南から）



写真5 井戸状遺構 第2遺構面（北から）

囲に展開していく。それらは調査された遺構に連続性が確認できていないことから、弥生時代から継続的に形成された集落ではなく、古墳時代に新たに移住してきた人々の集落であると考えられている。その集落も古墳時代をもって廃絶したと考えられ、その大きな要因として旧河道の形成とその氾濫があげられている。古墳時代の集落を荒廃させた旧河道の流れは、奈良時代以降の集落形成に適した自然堤防を形成している。次に集落の存在が確認されるのは、平安時代に入ってからと考えられる。田屋の地名の初見は平安時代末期の承安4年（1174）栗栖家文書（『和歌山県史』中世2）に「田井・田屋」が直川保河南島の東隣に位置すると記されている。また建久3年（1192）の同文書によると、在庁官人である田屋氏が田屋に住んでいたとみられる。以上の文書から、旧河道である六箇井用水の左岸に立地する現集落は、平安時代に形成されたと推測され、現集落に近い今回の調査地において、平安時代末から鎌倉時代の集落を構成する可能性のある遺構が検出されたことは、古文書の裏付けとなる成果といえる。



写真6 自然流路 第2遺構面（南西から）

以上のように、田屋遺跡には古くからこの地を形成した多くの流路が存在しており、その周辺には多くの集落が営まれていたことが明らかとなっている。しかし、それらの集落が同一の場所において長期間安定して営まれたのは、平安時代以降であると考えられる。集落の形成に必要な不可欠な流路の存在は、多くの恵みをもたらすのと同時に、常に河川の氾濫という危険性を併せ持ち、たびたび生活を脅かしてきた。現代でもなお多くの自然災害に見舞われる中で、かつての人々も自然の厳しさに触れながら共生していたのだろう。

参考・引用文献

『田屋遺跡発掘調査報告書—一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書—』財団法人和歌山県文化財センター 1990

『田屋遺跡 第6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社 2012

田屋遺跡第18次調査現地説明会資料 公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 2013

地形に合わせた土地利用 —和歌山市 井辺遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖

1. 調査の経緯と経過

今回の調査は、和歌山県が湊神前線道路改良工事を計画し、その予定地の一部が和歌山県埋蔵文化財包蔵地の井辺遺跡に該当したため、和歌山県教育委員会が確認調査を行った。その結果に基づき、1,812 m²について調査を実施した。

2. 位置と環境

井辺遺跡は、和歌山市井辺及び神前に所在する。半独立丘陵である福飯ヶ峰北西側の標高3 m前後を測る開けた丘陵裾部から沖積平野部に立地し、東西約1.1 km、南北約1 kmをその範囲としている。遺跡の東側に位置する岩橋丘陵上には700基前後の古墳からなる岩橋千塚古墳群がある。また、福飯ヶ峰を最高地点とする井辺前山丘陵上には約100基を超える古墳からなる井辺前山古墳群があり、岩橋千塚古墳群の一支群と認識されている。遺跡の南側には、西流する和田川によって形成された自然堤防上に立地する神前遺跡が接している。

3. 調査の成果

調査は、調査地を東から5・6・7の3区に分けて実施した。微高地に位置する5区では、弥生時代後期後半から古墳時代中期にかけての多くの遺構が検出されている。遺構には竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、柱列3列、溝、連続土坑群のほか、多数の土坑、ピットがある。一部鎌倉時代や江戸時代に帰属する遺構や地震痕跡である噴砂を検出している。西側の微低地に位置する6・7区では、遺構は希薄であった。

建物跡は5区の中央でのみ検出されている。竪穴建物3棟の形状は方形で、主柱穴4基で構成される。また、明確ではないがいずれも中央に炉を配すると考えられる。帰属時期は、出土遺物や遺構の重複関係から庄内式期に帰属すると考えられる。掘立柱建物は中央北側で検出された。柱間約2.9 mで、西側のみ約3.0 mと若干広い。遺物は古墳時代前期の土師器高坏や甕が出土している。

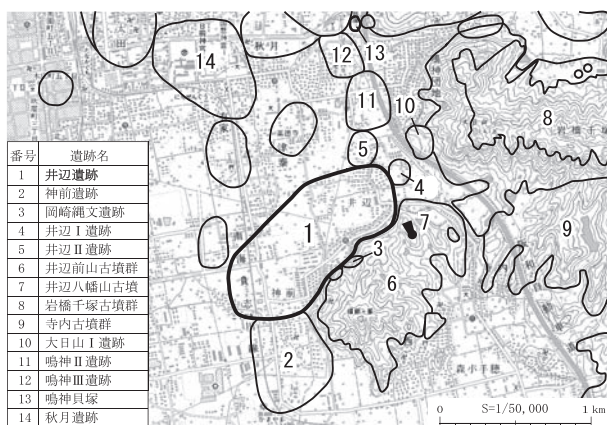


図1 井辺遺跡周辺の遺跡分布図



写真1 調査地遠景（北北東から）

柱列は5区で南北方向に3列検出した。西端では2列が重複して検出され、中央では1列検出されている。西端の柱列の構造は、柱穴径約0.21～0.38 m、柱間0.9～1.1 mのものと、柱穴径約0.33～0.72 m、柱間2.0～2.9 mと不均等のものがある。中央で検出した柱列は柱穴径0.4～0.54 m、柱間は1.5～1.75 mである。出土遺物は僅かに弥生土器の小片が出土したのみである。

溝及び溝状遺構は5区の東側で3条、西側で3条、6・7区でそれぞれ1条検出した。いずれも南北方向の溝である。5区の東端で検出した溝が最も規模の大きなもので、幅は1.36～1.9 mである。断面の確認により3条の溝が重複していると確認される。最も新しい溝である中央の溝では、下層から中層にかけて庄内式期、上層から古墳時代中期の遺物が出土している。

連続土坑群は5区の東側で、南北方向にやや弧を描きながら1～3列に平行して検出し、一部では溝と重複している。長軸0.36～1.40 m、短軸0.26～0.50 mの土坑が一定間隔で規則的に並ぶ。帰属時期は、出土遺物、遺構の切り合いから古墳時代前期以降と考えられる。

4. まとめ

今回の井辺遺跡の調査地は、東に隣接する調査地（井辺遺跡－松島本渡線 2011 年度）の微低地に対して、僅かながら微高地形となることが明らかとなった。この微高地は、既往の調査成果により、集落の分布範囲と土地利用の内容・構成が明らかとなってきた。井辺遺跡の西側にあたる調査地周辺には、少数の竪穴建物・掘立柱建物をはじめとする居住域が微高地に立地していることが判明した。現時点では、井辺遺跡の広大な遺跡範囲内には少なくとも3つ程度の居住域の存在が想定されており、今回の調査成果は、遺跡の西側に想



写真2 調査区全景

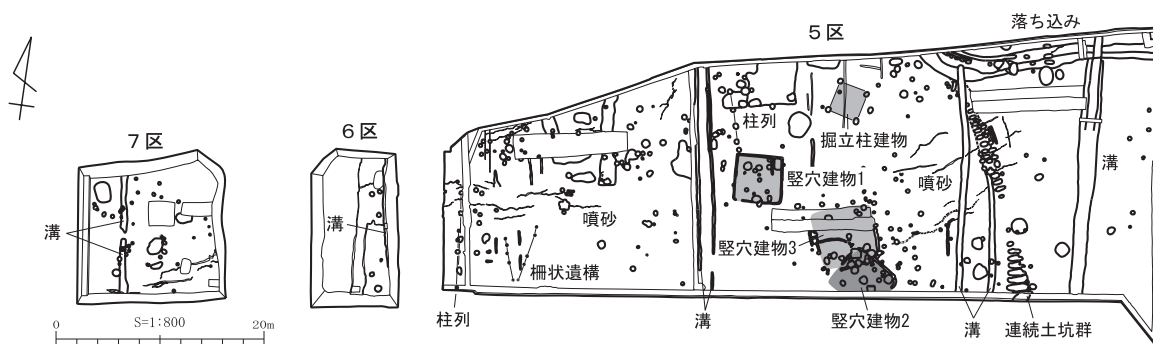


図2 遺構配置図

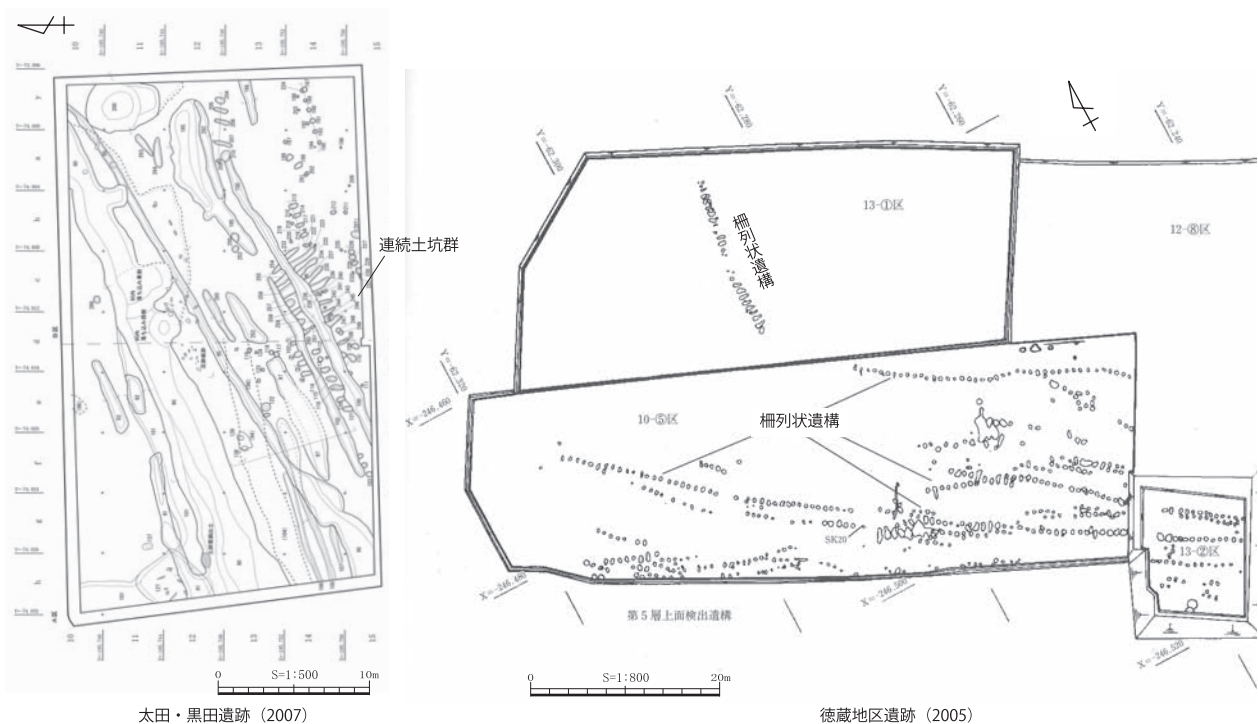


図3 既往の調査における道路状遺構

定できる居住域とその周辺の一端を明らかにしたと言える。調査地内に限れば、建物跡が検出された位置は、微低地に挟まれた範囲の微高地に限られ、居住域の中で小規模な単位が存在することが想定される。検出した遺構や出土遺物から、調査地周辺での集落の形成は弥生時代以降始まったものと考えられる。出土遺物の大半は、建物跡の時期と同じ、弥生時代後期から古墳時代前期に相当するため、当該期に居住域として土地利用されていたと考えられる。その後の遺構としては、調査区の北東端の落ち込みがあげられ、堆積土から中世の遺物が出土していることから、中世以降の整地に伴い埋められたと推測される。

その他、今回の調査で注目すべき遺構として、連続土坑群がある。東接する井辺遺跡（松島本渡線）4区でも東西方向に3列検出されている。既往の調査例では、太田・黒田遺跡（和歌山市）、川辺遺跡（和歌山市）、藤並地区遺跡（有田川町）、徳蔵地区遺跡（みなべ町）で検出され、古墳時代末から奈良時代初頭に位置付けされている。特に今回の調査に類似するものでいえば太田・黒田遺跡、徳蔵地区遺跡があげられる。太田・黒田遺跡では飛鳥時代～奈良時代の

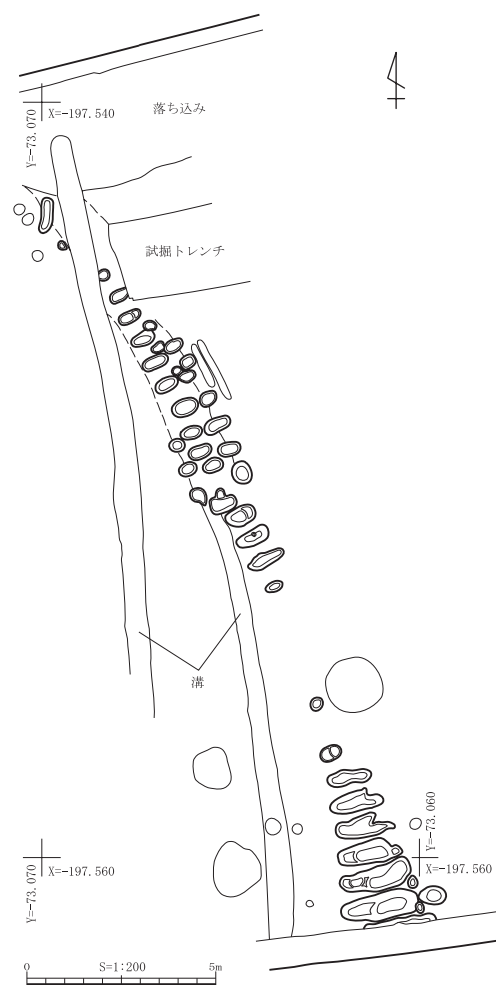


図4 連続土坑群

遺構とされ、同時期の溝が平行して検出されている。徳蔵地区遺跡では6世紀末の遺構とされ、1列又は2列の土坑が直線的に連続して検出されている。遺構の東端は低湿地上である。これらは道に伴う下部施設の痕跡と考えられている遺構であるが、今回の調査では当該時期の遺物は出土していない。また、硬化面など道として利用したと断定できる特徴は確認されておらず、土坑が掘削された地表面と周囲の土色の違いを認識したにとどまる。道として利用したと仮定すると、徳蔵地区遺跡の様な低湿地を道として利用するためには、当然地盤改良や何らかの設備を構築する必要がある。一方、今回の調査では比較的安定した微高地上で検出されている。このことから、道として利用されていた地盤を改修するために行った作業の可能性も考えられるが、いずれにしても一定の技術が確立していたと言える。

今回の調査成果は、東側の丘陵に位置する井辺前山古墳群や岩橋千塚古墳群などの古墳群の築造集団との関係を考える上で重要な資料となる。集落の本体は、井辺遺跡範囲内の東側や北東側に位置する現集落と重複する県営岡崎団地・井辺団地周辺に立地することが判明しつつあるが、その規模・詳細については、面的な調査が少ない現時点では不明な部分も多い。限られた微高地上でのみ建物跡が検出され、周辺の微低地では、溝は多く検出されるものの、集落を構成する遺構は確認されていない。当時の人々は自然地形に合わせて、明確に土地の利用方法を選択していたと考えられる。現在の土地利用は、人間に合わせて土地を改変することが可能であり、ある程度自然を制御する術を手に行っている。一方、かつての人々の生活は、自然に合わせることによる制約や不便な点は多いが、上手く自然を利用する術を手に行っていたと言える。



写真3 5区南 竪穴建物（北西から）



写真4 5区北 掘立柱建物（北北東から）



写真5 5区北 連続土坑群（南南東から）



写真6 5区南 噴砂（北東から）

根来寺遺跡境内外の発掘調査 —岩出市 根来寺遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 村 田 弘

1. はじめに

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、平安時代の後期、興教大師覚鑁により根来の地に創建され中世を通して勢力を誇った寺院として知られている。

今回の調査は、京奈和自動車道建設に伴うものであり、調査地は根来寺遺跡内の西北端に近い場所に位置しており、前年度実施した調査箇所の北側及び東側に当たる。調査区名は前年度との関係から今回の調査においては3～5区の名称を用いている。このうち洞尾川左岸の調査区を調査区3、さらに南側の丘陵中腹部に設定した調査区を調査区4及び調査区5と呼称した。

2. 調査成果

(1) 調査区3

調査区3は、先にも述べたように洞尾川の左岸部で、東側の丘陵裾部との間にあたる箇所である。大きくは2段の平坦面となっており、両者の比高差は約2.8mを測る。いずれも昭和40年頃までは水田として、そのあと果樹栽培地として利用されていたと聞くと、平成にはいる頃には耕作放棄地となっていたようで、現況は竹や雑木の生い茂る荒蕪地となっていた。

【上段部の遺構】

基本層序としては、第1層が表土、第2層が耕作土、第3層が旧耕作土ないし盛土・崩落土で第4層が地山に大別できる。上段部については、表土及び耕作土を除去した後、旧耕作土上面と思われる面で遺構検出を試みたが、遺構は確認されず、地山面及びこれと同じレベルにある整地土（盛土）の上面でいくつかの石組みの溝を検出した。

溝1：西側の山裾部に沿って流れたのちかすかに湾曲しながら北西方向に延びる。延長



図1 根来寺遺跡の範囲と調査地

20 mほどを検出した。本来は蓋石を伴う暗渠排水であったと思われるが、北西部分では蓋石は遺存していなかった。掘形幅は0.3～0.5 m、内幅0.2～0.3 m、深さ0.1～0.2 mで、石材は15～30 cm前後の砂岩を使用している。試掘調査の20トレンチで一部が検出されていた溝である。

溝2：西側の山裾部付近から西北西方向に延びる暗渠排水溝で、延長13 mほどを検出した。溝1に比べると使われている石もやや小ぶりで、側石についても一段の積みである。掘形幅は0.3 m前後、内幅0.1～0.2 m、深さ0.1 mほどで、石材は10～20 cm前後の砂岩を使用している。

溝3：溝1から分岐するように南側に延びるもので、攪乱をはさんで延長9 mほどを確認している。掘形幅は0.2 m前後、内幅0.1 m前後、深さ0.1 mほどとやや小ぶりの暗渠排水溝である。

これら3条の溝はいずれも水田耕作に伴うものであるが、これらの溝が集約している山際部分は、今回の調査においてももっとも湧水が激しく、常に水中ポンプを設置して調査に当たらねばならないような状況であった。このことからこの山際からの湧水に対応して設けられたものと言えよう。これらの暗渠排水を伴う水田の時期については、出土遺物がほとんどなく明瞭にし難いが、数少ない遺物から判断すれば中世後期、15ないし16世紀に遡る可能性があるものと考えている。ただ、この時期の水田区画については、上段の南東部付近では耕作土が途切れて存在していなかったことから、近世のものより小さかったものと判断される。



写真1 3区溝1 蓋石除去後（北から）



写真2 3区溝2 蓋石除去後（北から）



図2 調査区位置図

【下段部の遺構】

下段部は西側を流れる洞尾川に沿うかたちで現況の水田区画が北西から南東に向かってそれぞれ 50 ～ 60 cm ほどの高低差で 3 段の段差をもってつくられていた。ここでは、石組みの暗渠排水溝は検出されなかったが、水田区画に伴う石垣が検出されている。

石垣 1 N-45°-E という現況の段差の方向と同じ方向をもつ石垣で、実際に段差部分で検出されたものである。西側の山裾部分から途中一部欠損している部分はあるものの延長 14 m を確認した。もっとも残りのよい部分で石積みにして 4 ないし 5 段で、高さは 0.6 m を測る。用いられている石材は砂岩であるが、大きさにばらつきがあり、大きいものでは 40 ～ 50 cm 大、小さなものでは 10 cm ほどのものも認められる。また、積みの方向も横、斜めとかなり乱れており、全体として雑な感はまぬがれない。こうした積み具合からも、中世まで遡るものではなく、近世ないしそれ以降のものと判断される。なお、この石垣は調査区の西外側、現況の川に沿ってつくられている畦畔の下まで続いていることを確認しており、このことから現在の水田区画の西辺部がつくられるよりは一時期古いものである。



写真3 3区 石垣1 (南東から)



写真4 3区 石垣2中央部付近 (南東から)

石垣 2 調査区の南西側で遺構検出をしたところ、南西側に押し出すようにして整地が成されていることが判明した。このためこの整地土を掘り下げていったところ、落ち込み部分の際に沿って石垣が遺存していることを確認した。この石垣はもっとも残りの良い部分で、高さ 0.4 m を測るもので、石積みは 3 ないし 4 段が遺存していたが、整地土の土層断面観察の結果、本来的にはあと 0.2 ～ 0.3 m は高かったものと判断される。延長 14 m ほどを検出しているが、南側に行くにつれて遺存状況は悪く、再利用のために抜き取られた可能性が高い。法面の傾斜や石の積み具合などから中世に遡るものと判断している。

石垣 3 調査区の西壁ぎりぎり検出されたもので、高さ 0.4 m を測る。前述した石垣 2 と同じような積みであることや、両者の位置関係から推して、調査区のわずかに西外側を回り石垣 2 へとつながっている可能性が高い。この石垣 2・3 については、中世段階の水田の西側を画するものであったと考えている。

石垣 4 前述の上段と下段面の境を成す斜面部の裾で検出したもので、高さは 0.6 m を測る。石積みは 3 ないし 4 段分であった。わずかに延長 3 m ほどが遺存していたにすぎないが、本来はこの斜面部の裾に沿って築かれていた可能性が高く、中世段階の水田の北東側を画していたものと判断されよう。

(2) 調査区4・5

本調査区は、前述したように風吹峠からつづく丘陵の中腹部、わずかに平坦面が認められ、古道の可能性が考えられた場所に設けた調査区である。

このうち4区については、北端部分で平坦面がなくなり、道がさらに続いていく可能性が考え難い状況で、むしろ途中から北西方向に下っていく可能性が考えられた。このため教育委員会との現地協議を経てこの部分にも調査区を設定した。当初から予定していた部分を4-1区、新たに加えた南西方向に下っていく部分を4-2区としている。

4-1区では、試掘調査で確認されていた石列の続きを確認した。位置的には、たしかに平坦部の西際に沿って並んでいるが、延長はわずかに7mほどで、積まれたものではなく据え置いたといった感じの設置具合であった。また、据え置く基盤となる土も新しい時期に崩落したと思われる山土であった。このことからこの石列については、古道の側石となるものではないと判断している。また、岩盤についても自然地形のままで、人為的に削平し、平坦面をつくりだしているような痕跡は認められなかった。さらに路面と思われる遺構についても確認できず、出土遺物は皆無の状況であった。このことは、5区についても同様である。

以上のことから現段階では、この平坦面については古道などではなく、新しい時期に山仕事などに利用されていた通路のようなものであったと判断している。

ま と め

今回の調査では、調査区3において前年度の調査と同様に中世にまで遡る可能性の高い水田の跡を確認することができた。このこと自体も意味ある成果であるが、それ以上に、子院の跡がまったく検出されなかったことにより大きな意味があると言える。つまり、中世、全盛期の根来寺においてもこの付近にまで子院は及んでいなかったことが判明したわけであり、中世根来寺の寺域を考える上で、貴重な成果を得たものと言える。

一方、「古道」の検出には至らなかった。この付近には泉南地域へとの通ずる道が想定でき、長く根来寺が交通の要衝であったことを言われながら具体的な「古道」については、その規模はもとよりルートも明らかになっていない。根来寺と泉南地域の結びつきを考える上で今後ともこの「古道」の考古学的解明に期待がもたれるところであり、精力的な調査が望まれよう。



写真5 4区 中央部付近（北から）



写真6 5区 中央部付近（北西から）

紀の川中流域における弥生中期前葉土器の類例加わる —かつらぎ町 西飯降Ⅱ遺跡—

かつらぎ町教育委員会 和田 大作

1. はじめに

西飯降Ⅱ遺跡は、伊都郡かつらぎ町大字中飯降・西飯降・妙寺に所在する、和泉山脈南麓、紀の川北岸にひろがる比較的発達した低位段丘面を中心にひろがる遺跡である。

今回は、宅地造成に伴う調査であるが、調査地の小字名が「大道ノ上」であり、古代南海道関連の遺跡の発見も期待された。

2. 調査内容

調査区の大きさは84㎡である。調査区端部で遺構が発見された部分については拡張を行った。調査の結果、弥生時代の遺構を検出し、弥生土器・石器が出土した。

遺構 溝1・2は、調査区中央付近で検出された。溝1は長さ5.04m、検出幅1.4mを測る。断面は、皿状を呈する。深さは0.2mを測る。埋土からは弥生土器甕が出土した。底面では弥生土器甕底部が出土した。溝2は長さ1.24m、幅2.8mを測る。断面は、皿状を呈する。深さは0.12mを測る。埋土から弥生土器が出土した。ピット1・2は調査区中央付近で検出された。平面は径0.24mの円形を呈する。断面は椀状であり、最深部で0.12mを測る。遺物の出土はない。ピット3は、調査区中央付近で検出された。平面は径0.36mの円形を呈する。断面は皿状であり、最深部で0.12mを測る。遺物は出土しなかった。ピット4は調査区南東端付近で検出された。平面は径1.2mの方形を呈する。断面は皿状であり、最深部で0.28mを測る。埋土から弥生土器甕、石器が出土した。

遺物 1～3は溝1、4はピット4から出土した。1は、壺あるいは甕の口縁部である。ゆるやかに外反しながらちあがり、端部を面取りする。摩耗がひどく、調整は不明瞭である。2は、壺あるいは甕の体部～底部である。やや急峻にちあがり、張りの強い器形となる。断面は、底縁付近以外は3～5mmと非常に薄い。摩耗がひどく、調整は不明瞭である。3は、壺の頸部である。外面に、平行線＋半円のモチーフによる櫛描文が認められる。摩耗がひどく、調整は不明瞭である。4は、サヌカイト製削器である。一辺を欠損する。両極打法により生産した楔形剥片の縁辺を二次加工している。各縁辺とも、ステップ状収束部をなす微細剥離の集合体を有する。また、背面の下半において、打撃の方向が対極的で緩衝しあうような稜線をもつ剥離面が観察されることから、この石器は石核調整時にも両極打法を用いていたものと解される。

3. おわりに

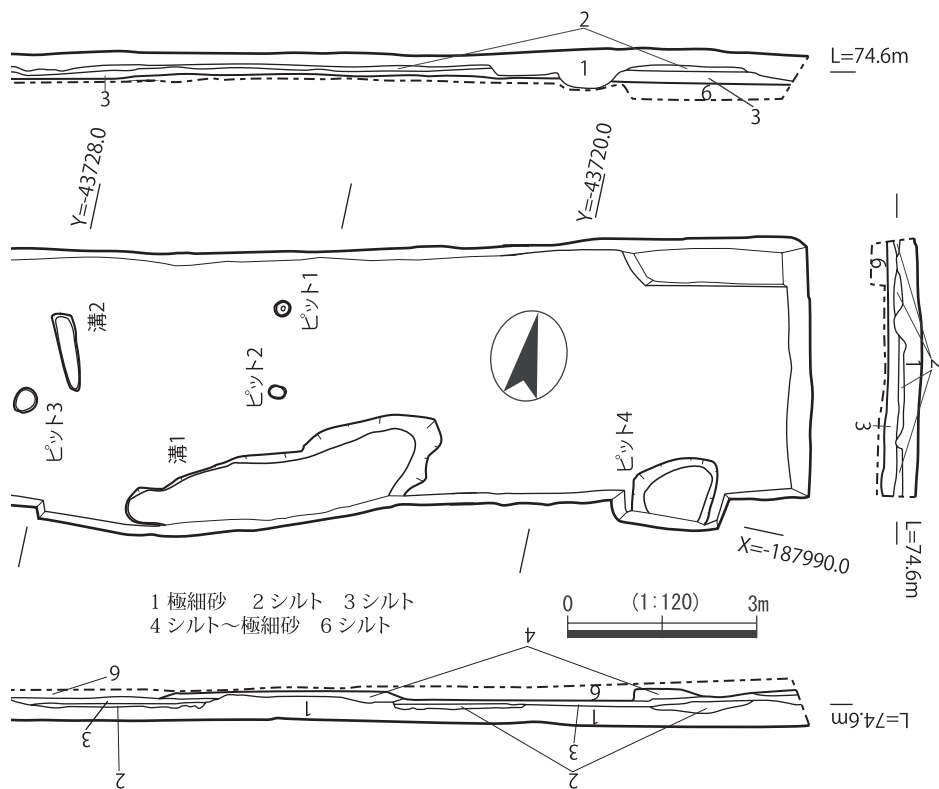
今回の調査では南海道関連の遺構等は確認されず、弥生時代の溝・ピットが検出されたが、各遺構間の有機的な関係を読み取ることは困難である。いっぽう、弥生土器2・3は、中期前葉の土器と判断され、当該期の様相が不明瞭な紀の川中流域の歴史を紐解くうえで重要な資料であるが、資料の増加を待ちつつ今後の検討課題としたい。



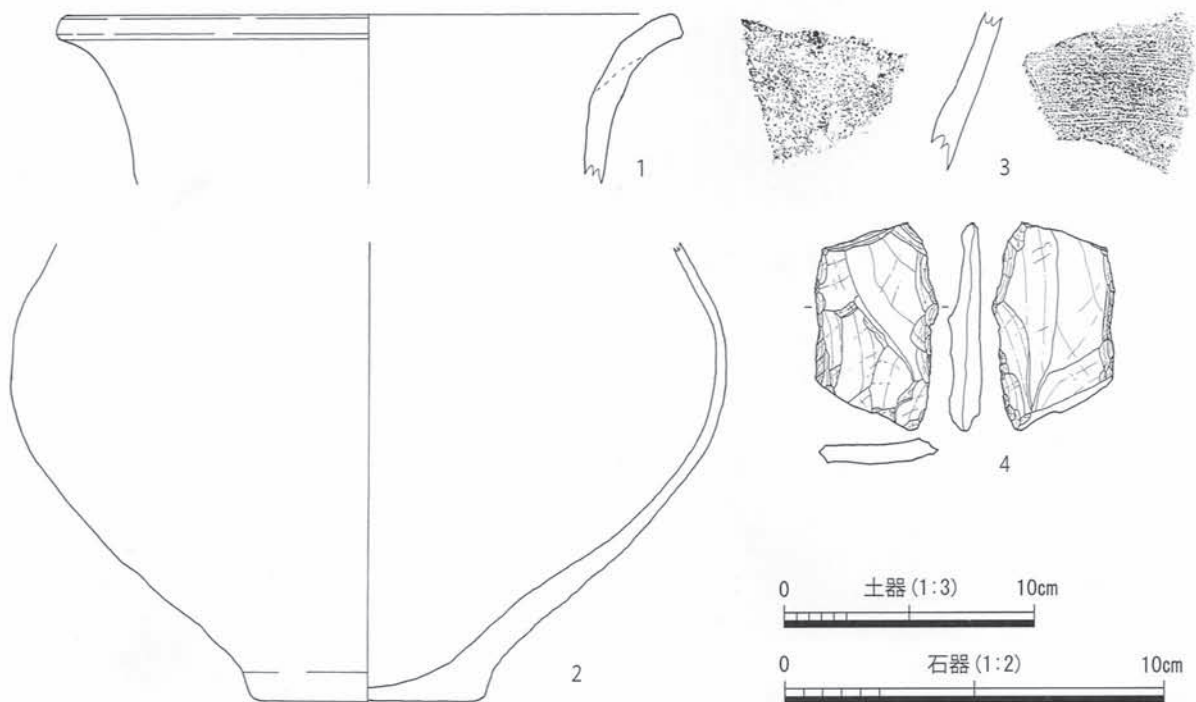
第1図 調査地位置図



第2図 調査区位置図
(S = 1/2500)



第3図 調査区平断面図 (遺構検出部分) (S = 1/120)



第4図 出土遺物実測図 (S=1/3、1/2)

出土遺物から見える景色 —美浜町 和田Ⅱ遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖

1. 調査の経緯と経過

今回の調査は、和歌山県が県道御坊由良線道路改良事業を計画し、その予定地の一部が和歌山県埋蔵文化財包蔵地の和田Ⅱ遺跡に該当したため、和歌山県教育委員会が確認調査を行った。その結果に基づき、本発掘調査が必要と判断された範囲 609 m²の調査を実施した。

2. 位置と環境

和田Ⅱ遺跡が所在する日高郡美浜町は、和歌山県のほぼ中央を流れる日高川の河口付近に位置する。町の東側は日高川により形成された日高平野の一画を占め、南は海岸線にそって砂丘が伸び、煙樹ヶ浜と呼ばれる松林が続く。砂丘の後背地は標高 1 m 前後の低湿地となっている。調査地は、煙樹ヶ浜のある海岸線から約 0.5 ～ 1 km 北方に位置する。地表面の標高は、南半部は 9.0 ～ 9.2 m 前後であるが、北半部は 6.4 ～ 7.8 m 前後と一段低くなり、遺跡は北東に広がる低湿地へと下降していく。

3. 調査の成果

調査では、標高の低い北調査区と標高の高い南調査区で検出された遺構、出土遺物で異なる傾向が確認された。遺物は遺構検出面より上位の包含層から多く出土しており、北調査区では中世の、南調査区では古代の遺物が多く目立つ状況である。

北調査区では土坑、ピットを検出したが、遺構密度は低い。ピットは円形或いは楕円形を呈し、直径 0.3 ～ 0.5 m 前後のものが多い。

南調査区では土坑、ピット、流路を検出した。遺構密度は高く、特に 6 区南でその傾向が顕著である。ピットの多くは柱穴と考えられるが建物として構成を明らかにするには至っていない。流路は南から北へ蛇行して流れ、途中淀み部を形成している。幅は 3.88 m、最も深い部分で 0.43 m を測る。遺物は古代～近世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器など多様であり、この流路が長期間存在していたことを示している。



図1 和田Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図



写真1 調査区遠景（北西から）

4. まとめ

和田Ⅱ遺跡は、これまで古墳時代の遺跡として周知されてきた。今回の調査でも、古墳時代の須恵器や土師器は出土している。しかし、出土した遺物の割合をみれば、古代末から中世にかけての遺物が量的に多くを占めており、これまでの知見とは異なっている。

検出した遺構は、北調査区と南調査区では密度の違いが大きい。北調査区は特に希薄で、建物の造成時及び取壊し時に削平・破壊されたとも考えられるが、遺跡の中心範囲が標高9m前後の南調査区周辺であった事に因る可能性が高いものと思われる。

出土した遺物では、6区から出土した初期須恵器に位置付けられるハソウや古代の遺物である緑釉陶器、8区から出土した古代銭貨の「貞観永寶」がある。ハソウは口径9.0cm、器高11.8cmを測り、体部は扁平で中位に断面三角形の突帯を巡らせる。体部と頸部には波状文が施文されている。日常的に使用されていたものであるが、墓からの出土例も多く確認されている。緑釉陶器は官衙や墓などから多く出土するものである。「貞観永寶」は初鑄870年(貞観12年)であり、畿内地域を中心に、限られた地域で流通しており、和歌山県内での出土は確認されていない。和歌山県における古代銭貨の出土分布は、官道である南海道に沿った地域と、散在的ながら古熊野街道に沿った各郡に一定の分布が確認されている。当該期の古代銭貨は火葬墓の副葬品及び地鎮具などに用いられていたことが明らかとなっている。

古くから海岸砂丘上は墓として利用されることが多い。今回の調査で墓は検出されていないものの、墓の存在を窺わせる遺物が出土している。和田Ⅱ遺跡の所在する場所は、古熊野街道沿いであり、当隣する御坊市には古代の郡衙跡とされる堅田遺跡がある。これらは、集成研究されてきた古代銭貨の出土状況に矛盾しないものであり、調査地周辺の土地利用を推定する上で重要な調査成果といえる。



写真2 ハソウ



写真3 貞観永寶

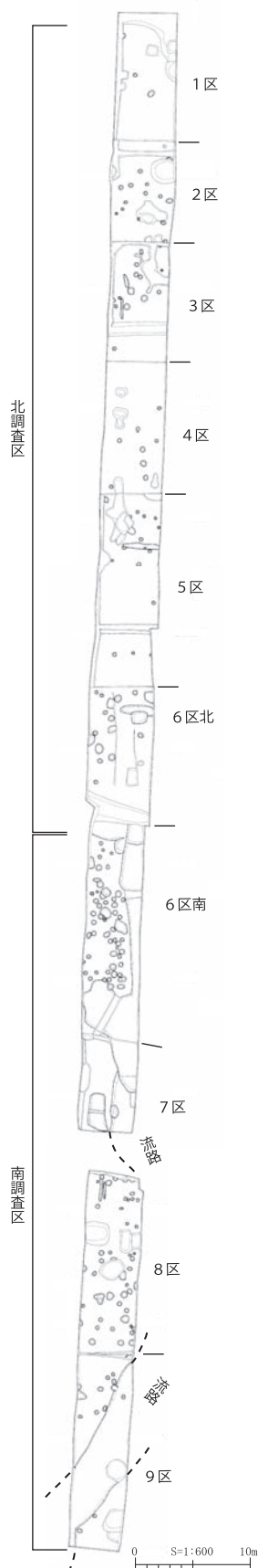


図2 遺構配置図

参考・引用文献 北野隆亮 2006年 「紀伊における古代銭貨」『紀伊考古学研究』第9号

弥生時代の集落は何処に —上富田町 岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 佐伯和也

1. はじめに

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡は西牟婁郡上富田町の西部に所在し、田辺市と白浜町に境界を接する。

町内には北東方向から南西方向に富田川が斜行し、本遺跡の南側を流れている。現在は富田川の河床が高く、大雨時には洪水となり低地部が水没するという状況下にある。

上富田町には縄文時代から近世にかけての遺跡が河岸段丘や丘陵上に数多く所在している。縄文時代の遺跡としては数遺跡が知られているが、その中でも本遺跡の北東約6kmの富田川河川敷に位置する市ノ瀬遺跡が著名である。弥生時代の遺跡は上富田町の全体の約1/3を占める20余りの遺跡があり、その多くは富田川流域や支流の岡川流域に所在する。また、本遺跡の1.5km西には、幕末に発見されたとされる朝来銅鐸出土地がある。古墳は本遺跡から北約2km以内の富田川右岸に朝来古墳や岩田古墳群、東に約1.5kmの左岸には山王古墳群が知られている。古代の遺跡は少ないが、中世末期になると富田川を挟んで対峙する丘陵上には山城、段丘上には屋敷跡が点在する。これらは豊臣秀吉による紀州制圧時にかかる時期のものが殆どであるが、この地域を支配していた山本氏の竜松山城跡や国陣山城跡、蛇喰城跡が右岸に、釣瓶山城跡が左岸に所在する。また、最近調査され、堀切を確認している秀吉方の塗屋城跡は、本遺跡から約0.5kmに所在する。なお、本遺跡からは底部に「福万」と墨書された瓦器皿が水田で井戸掘削中に発見されている。

2. 調査の概要

【岩崎大泓遺跡】

調査地の現況は水田で、中央を現有の水路が北から南に屈曲して流れている。この水路を挟んで北側をⅠ－Ⅰ区、南側をⅠ－Ⅱ区と呼称して調査区を設定した。調査面積はⅠ－Ⅰ区が1,013㎡、Ⅰ－Ⅱ区が302㎡の合計1,315㎡である。

層位は、現況の水田直下は近世の水田層となり、4枚以上の水田面が耕作土と床土の互層となる。更にこの下層は中世包含層となり、この層からの出土遺物も微量であるが、瓦器片、土師器



岩崎大泓遺跡（中央手前）西から

片などが出土した。なお、近世水田層および中世包含層からは弥生時代終末期の土器も出土した。

遺構は中世包含層除去後検出した。検出面の標高は約13.00m前後を測る。

Ⅰ－Ⅰ区で検出した遺構は、中世の土坑状遺構14基と鋤溝群を検出した。鋤溝跡からは火縄銃の鉄砲玉が1点出土した。Ⅰ－Ⅱ区で検出した遺構も中世の溝3条と水田状の方形落込み2基および畦畔状の高まりなどである。なお、こ

これらの遺構を検出した基盤面の周辺でトレンチを5箇所設定し、下層確認を行った。基盤層下の堆積層はいずれもグライ化された層で灰色～青灰色にグラデーションをなす。これらの層には弥生時代終末期の土器や木の枝等の有機物も含まれていた。

【岩崎大泓Ⅱ遺跡】

岩崎大泓遺跡の北側に隣接した遺跡である。現況は住宅跡および水田である。

調査区は2ヶ所に分かれる。丘陵（東）から谷状地形（西）に落ち込む箇所をⅡ－1区、谷状地形の箇所をⅡ－2区とした。調査面積は978㎡である。なお、Ⅱ－2区については2面の遺構面を確認した。

Ⅱ－1区の層位は、現地盤から下2層分の堆積層は近現代の民家の整地土で、そこから下層は丘陵から低地に向かって傾斜して堆積する。この傾斜堆積層の下層では、丘陵からの落ち際に土器を多量に含む層を確認した。ここから出土する土器は、遺物整理時には入念に検討せねばならないが、岩崎大泓遺跡の基盤層下のグライ化層から出土する土器と時期差のないものと思われる。また、目視ではあるが高杯の破片が多いように感じられ、祭祀などの意味合いも考えられる。

Ⅱ－2区の現況は宅地跡の一部と水田である。東側と西側には丘陵が迫り谷状地形となる。

層位は最上層の整地土および現耕作土を除去すると水平堆積を成す中世包含層（3層）となり、この層を除去すると上面遺構面となる。この面では中世の掘立柱建物を囲むと考えられる屈曲する溝状遺構を検出した。掘立柱建物の柱穴からは中国製青磁の破片が出土した。

下層面は上面遺構の基盤層となっている包含層（4層）除去後検出した。4層からも弥生時代終末期の土器が一定量出土した。中世遺物としては土師器皿、東播系こね鉢の破片が出土したのみである。上面で検出した遺構とは若干の時期差があるものと思われる。遺構は谷筋に直行する2列の柵列を検出した。また、東側の丘陵裾部ではこの谷筋を覆う堆積層の肩口を検出した。この堆積層を確認するために谷筋に直行して4本の下層確認のためのトレンチを設定した。ここでもⅡ－1区同様に、東側丘陵の落ち際に土器を多量に包含する層を確認した。出土遺物から同時期と考えられる。



岩崎大泓Ⅱ遺跡（中央手前）西から

3. まとめ

今回の調査で検出した遺構の時期はⅠ区、Ⅱ区ともに、出土遺物は僅かであったが、概ね中世の時期のものであった。しかしながら、Ⅰ－2区で検出した水田状遺構、畦状遺構、水路と考えられる溝状遺構などは、中世の時期において、この地で水田耕作がなされていたことを示すものと考えられる。Ⅱ－2区では湿地状の谷を整地して中世には人が住みついたことが、建物遺構や柵列などを検出したことにより立証できたと言える。

Ⅰ区およびⅡ区から出土した弥生時代終末期の土器の全ては、丘陵からの落ち際や湿地状のグライ化層からのもので、この時期の遺構は皆無であった。このことから周辺の小高い箇所には、この時期の集落の存在も十分考えられる。

熊野水軍の城 —白浜町 中山城跡・安宅本城跡—

白浜町教育委員会 佐藤 純 一

1. はじめに—経緯と経過—

平成 24 年度に白浜町が調査を実施した中山城跡と安宅本城跡は、それぞれ安宅荘中世城郭群を構成する城郭である。安宅荘中世城郭群は、安宅氏が日置川下流域（安宅荘）を中心として築いた 8 箇所の城跡を指す。安宅荘は、「関東成敗地」として北条氏の影響下にあったが、鎌倉時代末期には「熊野海賊」が熊野灘において猛威を振るっており、それらを抑える役割を担った安宅氏が、北条氏によって淡路から派遣されたと考えられている。

中山城跡は、安宅地域よりやや上流に位置する田野井地域の独立丘陵に築かれた館城で、方形プランを持った非常に居住性の高い城となっている。安宅本城跡は平地の居館であり現在では宅地化されているが、小字「城ノ内」という名称が残っており、伝承として東西約 50 m、南北約 30 m の方形プランを持ち、その南には湊や侍屋敷、町場があったと推定されている。安宅荘中世城郭群は、それぞれの城跡が非常にまとまった形で良好に遺存しており、それらが相互に関連している状況を把握することができる。それは、安宅氏という在地領主層が日置川下流域において排他的な領域支配をおこなっていたことの証左となる。

また、安宅家文書や小山家文書等の古文書より同時代の動向を探ることができるという点からも稀有な例といえる。たとえば、紀伊国守護であった畠山氏の内紛にかかわって安宅氏が戦に加わり、安宅荘内の「安宅南要害」（勝山城跡カ）が舞台となった戦いについても記録が残っている。

白浜町は、以前から安宅荘中世城郭群の国指定史跡を目指して調査を進めてきた。調査は指定のための基礎資料の蓄積を目的としたものとなっている。

調査期間については、中山城跡が平成 24 年 6 月 14 日から平成 24 年 9 月 30 日まで実施し、安宅本城跡が平成 25 年 2 月 14 日から平成 25 年 3 月 29 日まで実施した。

2. 調査成果について

【中山城跡の調査成果】

既往の調査としては、平成 17 年度・平成 18 年度

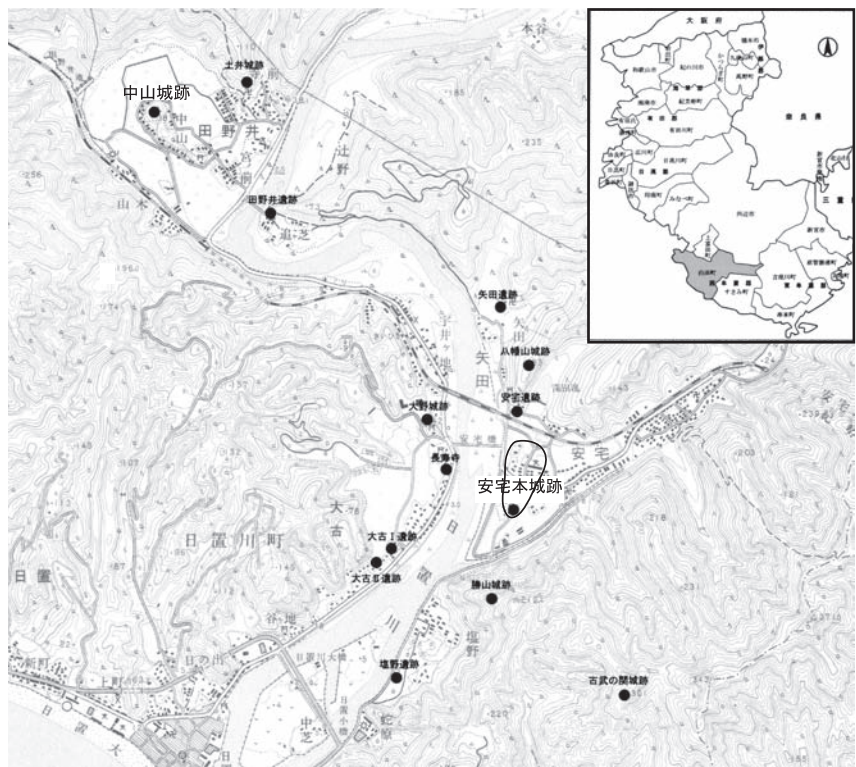


図1 位置図

に安宅荘中世城郭発掘調査委員会の委託を受けた滋賀県立大学考古学研究室により、詳細測量調査が実施されている。

主郭（曲輪Ⅰ）の平面形は、長形状を呈する。曲輪の南側と西側がわずかに高くなっており、土塁が巡っていたと考えられる。曲輪Ⅱの平面形はほぼ方形状を呈する。主郭と接する南側には幅 2.5 m ほどの平坦部が存在し、北側と西側には土塁が巡っている。主郭と曲輪Ⅱの東側には土塁を構築せず、曲輪の周囲に土塁を「コ」の字形に配している。

曲輪の周囲には二重の堀が存在する。それらは土塁と同様に、東側をのぞき「コ」の字形にめぐらせる。堀は後世に削平を受けており、残存するのは北西側の一部のみである。

また、城跡の南側丘陵の先端には田野井春日神社が鎮座している。この春日神社は、天文 15（1546）年、安宅氏とその被官である田井（たのい）氏の発願により社殿の造営がおこなわれたことが棟札により伝わっている。なお天正 10（1582）年には、田井氏が単独で造立主体となり社殿上葺きをおこなっている。

トレンチの設定については、曲輪Ⅰ（主郭）、曲輪Ⅱ及び周辺に 1～13 トレンチまで設定した。また土塁部分については断割を行い、構造把握につとめた。基本層序は、表土・腐食土層、褐色細粒砂層（10YR4/6）の遺物包含層が堆積し、この 2 層は全トレンチで共通し、その下層上面より遺構が検出された。総調査面積は、約 184 m²を測る。

各トレンチからは、柱穴や土坑が検出されている。一部では柵列と思しきものも確認されているが、掘立柱建物の復元は難しい。

特筆すべき遺構としては、石積区画が挙げられる。石積区画は、5 トレンチ拡張部と 12 トレンチで確認された。既往の測量調査成果から、曲輪Ⅰ（主郭）と曲輪Ⅱの境目の段状区画として認識されてきた地点である。今回の調査により、その段状区画を石積によって補強していることが発掘調査によって確認できた。

石積区画には、大きなもので約 50 cm 幅の隅丸形状の石が用いられ、ほぼ同

形同大のものが使われているが、一部の空隙には拳大の石が充填されている。原形を留めている箇所は少なく、石積が崩落していると考えられるが、残存しているものからおそらく 3 段積み以上であったことが想定できる。北方向と西方向に向けて、きちんと面をとり整然と積んでいる。石積の高さは最高所で約 42 cm を測る。また、石積区画は北側隅角に向けて地形に沿って低くなっている。この石積区画については、曲輪Ⅱから曲輪Ⅰ（主郭）へ上る通路状の利用が考えられるが、階段状施設は確認できていない。

曲輪Ⅰ（主郭）の土塁については、造成が甘く石積も確認できなかった。曲輪Ⅱの土塁に

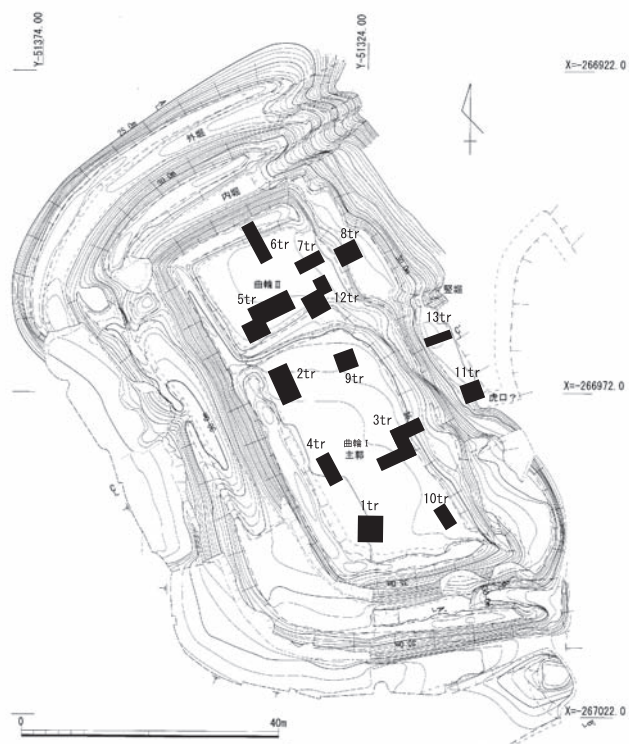


図2 トレンチ配置図

については、土塁内側に1段目の石積が施されていた。これは、安宅荘域の城跡に共通する技法であるが、他の城跡と大きく異なる点として、土塁内側の平坦面からやや上がった位置に石積が施されていることが挙げられる。曲輪Ⅱの土塁は、地山ベース層を削平し、その上部より土塁を構築している。また、土塁の天端部にも石積が確認されている。土塁の補強の役割とともに、天端部を攻撃や防御等の足場として活用するためのものであると考えられる。トレンチ調査を実施した場所以外でも、土塁天端部に石積が露出している。

出土遺物としては、染付、青磁、白磁、瀬戸美濃系陶器、備前焼、土師器、鉄釘、土錘、投弾用石等が出土している。ほとんどが中世期のものであるが、一部江戸時代の陶磁器が混じっている。



写真1 石積区画 (12tr)



写真2 土塁断割 (6tr)

【安宅本城跡の調査成果】

既往の調査としては、平成14年度に日置川町（当時）の委託を受けた和歌山県文化財センターが実施している。小字「城ノ内」と呼ばれる地点の北側の方形区画に、幅1m、総延長68mのトレンチを設定している。小規模なトレンチ調査であったが、備前焼・常滑焼・中国製磁器等の遺物が出土している。遺構は、柱穴や土坑、区画溝の可能性もある溝状遺構（深さ1.5m以上）が検出されている。安宅本城の北端を示すとも考えられている。

平成21年度には、白浜町教育委員会が調査を実施している。中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。隅丸長形状柱穴や方形掘方をもつ柱穴等が検出された。特徴的な遺物として、青磁菊花皿の口縁部片、瀬戸美濃系平碗、山茶碗、瓦器碗、鉄釘、土錘、近世瓦等が出土している。

平成23年度には、高速道路に関連した調査として、周知の埋蔵文化財包蔵地範囲の南端が和歌山県文化財センターにより調査されている。ただし、調査対象地が低地部分であったためか、近世遺構（耕作跡）の他は自然流路を検出した程度で、中世以前の生活痕跡は確認されていない。

今年度については、安宅本城跡の内容確認のための調査を実施した。調査区を3区に分け、それぞれにトレンチを設定した。総調査面積は、約161㎡を測る。

第1調査区（1tr）は、本城跡の範囲の東側に位置する。1trについては、溝、土坑、柱穴等の多くの遺構を地表下50cmの第1遺構面（土師器包含層）にて検出した。第1遺構面は、近世と中世、現代からの遺構の切り込みがあり、主に褐色の埋土を持つものが中世であると

判断できる。中世期の遺構は、柱穴、土坑となる。溝状遺構は、出土遺物から近世のものと考えられる。中世遺物としては、青磁、白磁、備前焼、土錘等が出土している。

第2調査区(2～4tr)は、現代の造成土が1m近く堆積しており、その下層から現代の耕作土・床土が検出されており、さらに下層よりベース層と考えられる層が検出されていることから、遺構が存在する可能性は低い。

第3調査区(5～7tr)は、以前より館跡想定地(方形区画)とされており、中世の遺構が存在する可能性が高いと考えられていたが、表土と同一の現代耕作土層(地表下20～30cm)を除去した段階で第1遺構面(土師器包含層)が確認され、検出された遺構も近世及び古墳時代のもののみであった。層位の状況から、大規模な削平を受けていることは確実であるが、削平を受ける前に中世期の遺構面が存在したかどうかは判断が難しい。



写真3 1tr(南東から)



写真4 3tr(北から)



写真5 5tr(南西から)



写真6 5trサブトレ断面

3. まとめ

中山城跡の調査では、石積区画の検出や土塁の構築状況の把握等の成果を得ることができた。とくに土塁の構築状況については、周辺の城跡での状況検討が必要となる。安宅本城跡の調査では、これまでの想定とはやや異なる成果を得ることとなったが、今後の詳細な検討を期したい。安宅荘中世城郭群は継続的な調査によって、史跡の基礎資料が蓄積されつつある状況であり、これまでの調査成果を総合調査報告書として総括し、今後とも国史跡指定への取組みに邁進したい。

土坑から土師器などが多量に出土 —白浜町 田ノ口遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 寺 西 朗 平

1. はじめに

田辺市・すさみ町間における近畿自動車道紀勢線の建設工事において、田ノ口遺跡の一部がその開発範囲にかかることになったため、平成 24 年 5 月から 11 月にかけて発掘調査を実施した。

田ノ口遺跡の所在する白浜町は和歌山県南部の西牟婁郡に属し、面積は 201.02 平方キロメートルである。紀伊水道に面した海岸線が南北に長く続き、富田川、日置川の 2 つの大きな河川が紀伊水道に注ぐ。面積の 80% 程度は森林であるが、これら 2 つの河川による沖積平野に耕作地が広がり、沿岸部及び河川沿いに交通路が延びる。

遺跡は富田川の河口付近に広がる平野の東端にあたり、現在の河口から東へ約 2 km の位置にあって、富田川へ流れ込む高瀬川東岸の沖積地の一部と標高 40m 程度の丘陵西側斜面がその範囲に含まれる。当該地域は第二次大戦後、丘陵斜面において畑地の開墾や植林が行われ、さらに昭和 40 年代に山裾の平野で圃場整備が実施されたことにより、もとは丘陵から山の裾部付近にかけてなだらかな傾斜地であったところに平坦な畑地、耕作地が造成されている。今回の発掘調査では、調査区を平野部、丘陵裾部、丘陵斜面の 3 箇所を設定した。

2. 調査の成果

1 区

おもな遺構として 1 溝及び 9 土坑を検出した。1 溝は南北に延びる幅 50 ～ 80 cm 程度の溝であり、底から権状石製品が出土している。また、9 土坑内とその周囲で検出された炭化物がこの溝にも流れ込んでいた様子が窺える。9 土坑は後世の圃場整備によって上半分を削平されているが、埋土中より 100 個体以上の土師器、灰釉陶器、黒色土器が出土した。これらの遺物は伏せて置かれたものや、数枚を重ね、且つ整然と並べられた状態で出土しているものがあり、祭祀等で使用された後、土坑に納められたと考えられる。

2 区

検出した遺構のほとんどが近世以降であったが、平安時代と考えられる土師器片を含む土坑が 1 基検出されたため、現況の地形では 1 区と 2 区の間に 2m 程度の段差があるが、もと



図 1 遺跡所在地



写真 1 3区航空写真(西から)

は緩やかな傾斜が続いていたことが推定される。

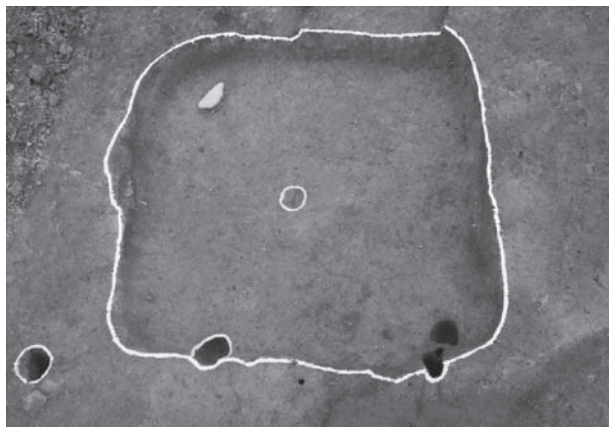


写真2 27 竪穴建物跡

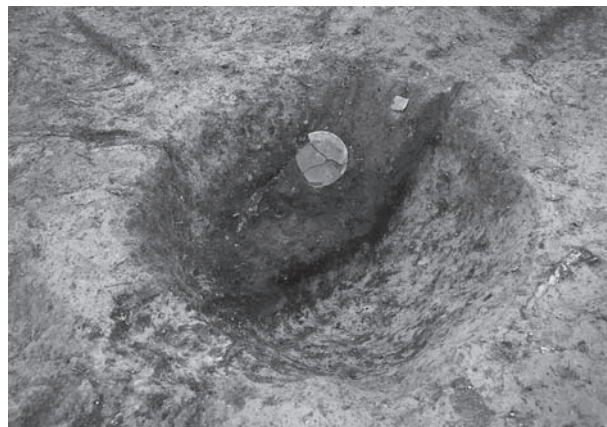


写真3 66 土坑

3 区

丘陵斜面上に設定した調査区で、畑地の開墾や植林による削平を大きく受けてはいたものの、弥生時代後期の竪穴建物跡や平安時代の土坑を検出した。

27 竪穴建物跡は埋土に弥生時代後期と考えられる土器片が含まれており、中央に柱穴1基を検出した。また床面直上から台石が使用痕跡のある面を下にして出土した。

66 土坑は埋土の下半分が炭化物であり、さらに遺構上端は被熱により赤く変色し硬化していることから、この土坑内で火を焚く行為が行われたことが推定できる。炭化物の上には斜面上方から流入した土が堆積しており、ここから土師器坏が出土している。

3. まとめ

3 区では弥生時代後期の竪穴建物を2棟分検出しており集落跡と考えられるが、調査区全体でも遺物の出土量はそれほど多くなく、また2区の表土上においてもわずかではあるが弥生土器片を採集していることから、今回検出した遺構は集落周辺にあたる一部分である可能性が高い。

また、3区では66土坑周辺で施釉陶器1点が出土したほか、灯明皿として使用されたと考えられる土師器（坏）が出土した。今後詳細な分析が必要であるが、時期的には1区で検出した9土坑の出土遺物と同じか、先行するものと考えられ、1区及び3区で検出した祭祀跡と考えられるこれらの遺構は相互に関連性があるものと考えられる。



写真4 溝1出土 椎状石製品



写真5 施釉陶器

日置川流域の歴史 —白浜町 大古Ⅱ遺跡の発掘調査—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 森 原 聖

1. 調査の経緯と経過

今回の発掘調査は、近畿自動車道紀勢線事業に伴う建設工事により、その予定地の一部が和歌山県埋蔵文化財包蔵地の大古Ⅱ遺跡に該当したため、和歌山県教育委員会が確認調査を行った。その結果に基づき、平成23年度に1,381㎡、平成24年度に未調査範囲である1,812㎡の調査を実施した。

2. 位置と環境

大古Ⅱ遺跡は、和歌山県の南部を流れる日置川の下流域、白浜町大古に所在する。日置川は急流であるため、河口まで上流型の谷を形成しており、沖積地はわずかに河口付近に存在するのみである。遺跡は河口から約2km遡った日置川右岸の自然堤防上に位置し、日置川流域の原始・古代以降の遺跡もこの周辺に集中する。最も遡る遺跡としては、大古Ⅱ遺跡の北に接する大古Ⅰ遺跡が知られ、縄文時代前期末をはじめとする遺物が出土している。また、調査地から約200m北に位置する長寿寺からは、暦応5年（1342）の最古の紀年名をもつ備前焼大甕が出土している。

3. 調査の成果

平成24年度は、4つの調査区の発掘調査を実施した。調査区は中央の7区が微高地に位置し、西側の3・6区がやや低い後背地にあたる。東端の8区は微高地から日置川方向に下がった地形となる。8区の調査では遺構が検出されず、堆積の状況から日置川の氾濫原であったと考えられる。その他の調査区では、2面又は3面で遺構検出を行った。

西側の3・6区では、2面で遺構検出を行ったが、検出状況や断面の確認により、遺構面が3面あることを確認した。第1遺構面では、3区で流路、柵列状遺構、多数の土坑・ピットを検出し、6区では調査区の西端で階段状の遺構を検出した。遺物は少量の須恵器が出土しており、古代に帰属すると考えられる。第2遺構面では、3区で検出した南北方向の流路

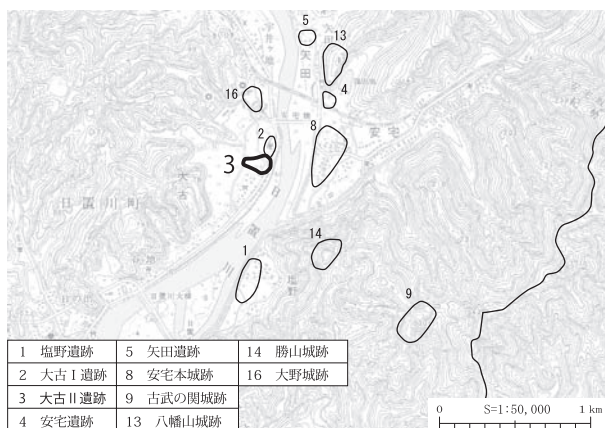


図1 大古Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図



写真1 調査地遠景（南西から）

3条がある。遺物は極僅かに出土したのみである。第3遺構面では、3区で掘立柱建物、多数の土坑・ピットを検出した。第2遺構面で検出されるべき遺構も含まれている可能性もあるが明確ではない。多数の遺構を検出したが、遺物はほとんど出土していない。出土遺物や既往の調査から、弥生時代に帰属すると考えられる。

自然堤防の稜線上に位置する7区では3面で遺構検出を行った。第1遺構面では調査区の中央から東側で溝や多数の土坑・ピットを検出した。溝は小規模であるため区画等に使用した可能性もある。遺物は土師器の皿が出土しており、古代に帰属すると考えられる。第2遺構面では竪穴遺構や多数の土坑・ピットを検出した。竪穴遺構は判然としないが、底面の中央付近に炭化物の堆積を確認し、主柱穴の可能性のあるピットを検出したことから、竪穴建物の可能性がある。竪穴遺構からやや離れた南側と東側で検出した2基の土坑



写真2 3区 古代の流路 第1遺構面



写真3 6区 階段状遺構 第1遺構面

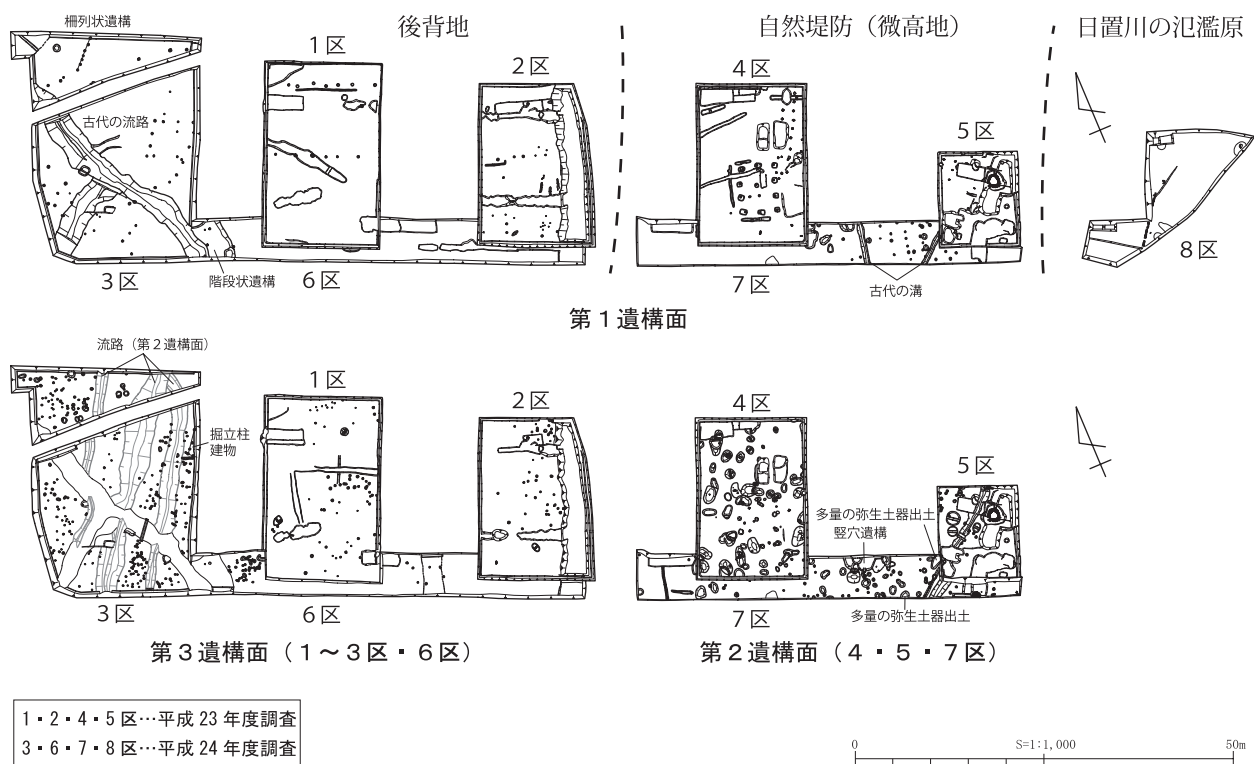


図2 遺構配置図

からは、多量の弥生土器と共に植物遺体が出土したため、廃棄土坑と考えられる。出土遺物から弥生時代中期に位置付けられる。第3遺構面でも多数の土坑・ピットを検出しているが、第2遺構面と時期差はあまりないと考えられる。

調査における出土遺物では、有溝土錘や鋸歯文を施した土器、太型蛤刃石斧などがある。有溝土錘は瀬戸内系の土錘である。鋸歯文を施した土器は和歌山県内では海南市の岡村遺跡で出土しており、山陽地域～播磨地域に多くみられる。大陸伝来の要素を持つ太型蛤刃石斧も出土している。

4. まとめ

今回の調査では、旧地形の形状によって検出された遺構の性格に違いがみられた。生活の中心である微高地上の7区では遺構、遺物は多く確認されている。建物跡や多くの出土遺物からも集落の中心であることが窺われる。それに対して後背地である西側の様相は異なっている。3区では流路やピットなど遺構は多く検出されたものの出土遺物は極めて少量であった。6区で検出された遺構は、調査地で最も少ない。これらの傾向は各調査区の全ての遺構面と言えることである。調査で検出した遺構面は、弥生時代中期と古代～中世に帰属すると考えられるため、土地の形状は長期間にわたり、同じような様相を呈していたと推測される。8区では遺構が検出されず、堆積は砂とシルト質土からなる。これは河川によって運ばれた堆積土と考えられ、調査区周辺まで日置川の影響が長く続いていたことを物語っている。また、7区東端で遺構面を形成する地山は下降を始めるが、約8m東に位置する8区の西端で地山は確認できない。現地表から2.7m前後下位では、北西端では河原石の堆積を、南西端では上位と変わらない堆積を確認しており、急激に下降する旧地形と過去における日置川の西方への影響の広がりを見ることが出来る。

以上、これまでの調査によって、大古Ⅱ遺跡の様相が明らかになってきた。遺跡周辺では、近世に至るまでの長期間、安定した集落の中心は日置川によって形成された自然堤防の稜線付近であったと推測される。この自然堤防は当遺跡の北に位置する大古Ⅰ遺跡から縄文時代前期の遺物が出土していることから、古くから存在していたことが窺える。

弥生時代から古墳時代の調査地の様相は、弥生時代中期に集落が形成されている。西端



写真4 鋸歯文を施した弥生土器



写真5 太型蛤刃石斧



写真6 7区 古代の溝 第1遺構面

で多くの流路を検出したことから、西側に位置する山麓の谷筋から流れる河川の存在が推測され、調査地周辺を潤していたと考えられる。集落の中心である7区では、太型蛤刃石斧が出土しており、水稻耕作の伝播が予想される。それらの生産活動は流水があり、低湿地となりやすい後背地に位置する調査区の西側が適しており、調査で確認した多数のピットや畦畔状の遺構もその裏付けとなる成果と言える。検出された弥生時代の遺構は中期に限られ、後期から古墳時代の遺構や遺物は確認されていないことから、この間に集落を移動したと考えられる。周辺の後続する遺跡としては、弥生時代末頃の高地性集落が八幡山城跡にあったことが発掘調査によって窺える。古墳時代では前期の安宅遺跡があり、後期では大古Ⅰ遺跡がある。以上のように、弥生時代から古墳時代にかけて日置川を挟んだ地域を集落が移動していたことが想定できる。和歌山県内への弥生文化の伝播は中・南部が最初であると考えられており、当遺跡も早い段階でその影響を受けたと推測される。また、出土遺物から、水上を主とした広い範囲での文化の移動・交流が想像できる。

古代になると日置川流域は、律令制下で牟婁郡に属し、郡内にあったとされる5郷のうち、岡田郡か栗栖郷に比定する説があるが、詳細は不明である。これまで、当該期の遺跡は確認されておらず、今回の調査でその空白域を埋める遺構が検出されたことは重要な成果と言える。遺構では、調査区中央で掘立柱建物が、調査区の西側では流路が検出されている。出土遺物は少量であるため帰属時期は明確ではないが、概ね奈良時代に帰属すると考えられる。

鎌倉時代では、日置川流域に安宅荘が成立しており、安宅氏が領主として活躍するようになる。本拠である安宅本城跡をはじめ、周辺には多くの城跡が確認されている。平成23年度調査においても、調査区中央で室町時代の石積み井戸が見つかったが、当該期の遺構は希薄である

近世以降は調査地の東側で井戸や石垣が確認されていることから、現在に近い集落の様相を想定することが出来る。石垣は氾濫原と推測される8区で確認されており、この時期に整地によって生活域を拡大していったと考えられる。

現在の大古の風景は自然堤防上に人家が立地し、田畑は西方の山麓に向かって広がっている。この光景は、この地域に人々が生活を始めてからほとんど変わらないと言える。古くから水上交通をうまく利用した生活が営まれていたことを窺い知ることが出来る。



写真7 7区 竪穴遺構 第2遺構面



写真8 竪穴遺構東側の土坑 第2遺構面

農耕社会成立期の木製品生産地 —すさみ町 立野遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 川崎 雅史

1. はじめに

立野遺跡が所在する西牟婁郡すさみ町周参見は、本州最南端近くにあり、周参見湾に注ぐ周参見川と太間川の下流域に位置する。湾の入口に浮かぶ稲積島は防波堤の役目を果たし、天然の良港をつくっている。

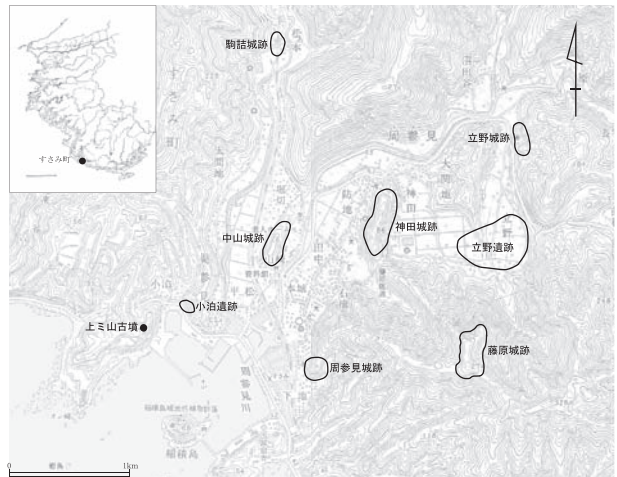
遺跡は、海岸から約 2.5 km 遡った位置にあり、古い時期の周参見川が穿入蛇行した後形成された谷底平野に立地する。

近畿自動車道紀勢線事業により遺跡周辺が大規模に開発されるのに伴い、平成 22 年 8 月から平成 23 年 3 月にかけて面積 8,526 m²を対象に発掘調査を実施した。

調査では弥生時代前・中期と古墳時代・古代の自然流路、弥生時代後期末頃と中世前半頃の水田区画などを検出した。また、遺物としては、弥生時代前期の自然流路（遺構 302）から出土した多くの弥生土器・突帯文土器・石器・木製品のほか、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・製塩土器・山茶碗・青磁などの土器類や金属製品として銅環や鉄斧がある。

平成 24 年度は、調査で出土した土器類コンテナ 60 箱、石器類コンテナ 44 箱（約 2500 点）、木器・木製品約 400 点、金属製品 3 点ほか木材サンプルを対象に報告書作成に伴う出土遺物整理業務をおこなった。また、重要度が高く、処理の緊急性を要する鉄斧 1 点と木製品 184 点の保存処理を高級アルコール含浸法で実施している。

報告書は平成 25 年 3 月に刊行したが、ここでは遺構 302 と出土遺物について紹介する。



周辺の遺跡

2. 遺構 302

遺構 302 は、平野部西側の山裾に沿って南流する弥生時代前期の自然流路で、調査区の南では、流れをやや西方に変えている。規模は幅が約 15 m、深さ 1.2 ～ 1.5 m で、調査区内で約 40 m を確認した。底は平坦で、流れが変わる付近で深くなっている。

堆積土は大きく 3 層に分かれ、2 層は地山と同一のシルトのブロックを含む層で、一気に埋まった層であると考えられる。3 層は木屑・葉・木の実・木材等を含む層位である。



遺跡遠景（矢印で遺構 302 を検出）

1層は弥生時代前期新段階と中段階の遺物を含み、2層は中段階の遺物がほとんどで、わずかに新段階の遺物が混入し、3層は中段階の遺物のみを含む層位となり、3層を中心に弥生土器・突帯文土器・石器・木製品が多量に出土する。また、3層からは、大量の自然木が横たわった状態で出土しており、これらは直線的に伸びた広葉樹の中径木が大勢を占め、ほとんどが樹皮を剥いだ状態となっていた。大きくは流れに沿うものと、流れに直交するものがあり、基本的に前者の方が下位に位置している。流れに直交するものでは、川岸から倒れた状態のものがあり、根が残るものが認められる。ただ、そのような材でも樹皮がなく、部材を割り欠いたものもある。現場付近に、木材が集積された状況で、流路に明確な流れが認められないこと、また、平成24年度に行われた流路下流部の調査では、木材がほとんど確認されていないことから、川を堰き止めて貯木施設を構築していた可能性もあるが、調査区内では堰などは確認できなかった。



遺構 302 (北から)

このほか、流路内でオニグルミの核果やイチイガシ・ツブラジイなどの堅果類の殻が大量に集中する箇所があり、食物残渣を投棄したものと考えられる。

3. 出土遺物

土器

弥生土器と突帯文土器のほか東日本の条痕文(系)土器が出土している。破片点数は約10000点あり、弥生土器1に対して突帯文土器9の比率である。

弥生土器は壺に限られ、前期土器の器種組成である甕・鉢・高杯はない。突帯文土器は和歌山県南部地域に多い瀬戸タイプが主で、深鉢、鉢、壺の器種があり、深鉢が圧倒的に多いが、壺の割合も他の遺跡より高い。土器には角閃石や結晶片岩を含み搬入品と判断できるもののほか、特徴などから搬入品と考えられるものが見いだせる。



弥生土器

石器

定形的な石器、剥片、原石などを含めた石器関連資は1676点で、このうち、使用を目的としたあるいは使用した石器類は564点となる。石材は、石棒を除くすべての器種で頁岩(スレート・粘板岩)が使用されている。打製・磨製石器の石材には頁岩とサヌカイトがあるが、肉眼観察では約95%が頁岩で残りがサヌカイトとなる。畿内およびその周辺部の弥生遺跡、ほぼ同時期である御坊市堅田遺跡などでは、打製石器にはサヌカイト、磨製石器には結晶片岩や凝灰岩などを多用しているのに比べ石材選定に大きな違いを見出すことができる。サ

ヌカイトに関しては表面がササクレだったように見える特徴から香川金山産の可能性が高く、明確に二上山産と言える資料はない。頁岩は地元で産するもので、原石は河原や海岸で調達でき、実際、出土した原石にも、磨滅が著しい円礫や、やや角がある礫がある。

組成は石鏃がわずかで、伐採斧がなく石器製作に用いたと考えられる加工斧や削器・楔形石器などが多量に出土し、それらの石器も製作していたことが窺える。

木製品

木製品には、工具 6 点（斧膝柄・斧直柄・楔状木製品）、農具 53 点（平鍬・広鍬・泥除け・刈払具・竪杵）、狩猟具 9 点（弓・矢）、食事具 7 点（匙・竪杓子）、容器 46 点（舟形・鉢・浅鉢状・皿状）、建築部材 22 点（梯子・柱材・垂木ほか）、その他 6 点（琴状木製品・俎状木製品ほか）、木材 23 点（丸太材・半裁材・割材・板材）がある。これらには、樹種・木取り・器種の上で他の遺跡にみられない特徴が確認され、平鍬（曲柄狭鍬）にイスノキ製の板目取り、各種容器にクスノキの横木取りの材を使用した製作工程の分かる資料があり、直柄広鍬にも板目取りの製品・未成品がみられる。



木製品加工用の石斧



平鍬の製作工程

4. まとめ

弥生時代以前の生活の痕跡がないことから、弥生文化の一部を受け入れた縄文人が恵まれた森林資源を求めて入植したことが窺える。弥生時代前期には、平野部の西端を流れる自然流路・遺構 302 の傍で居を構え、木製品の製作をおこなっていたことが明らかで、その証左としては、平成 24 年度に行われた下流部の調査で遺物が希薄で、土器に磨滅が見られずススの付着が顕著なこと、食物残渣である堅果類や核果類の殻が大量に廃棄されていること、また、石棒の使った祭り（破砕行為）が水際で行われていたことなどを挙げることができる。

調査の成果は、弥生時代前期に木製品製作を専業する集団がいたことを物語るもので、社会的分業が早くから進んでいたと捉えることができ、立野遺跡の母村的性格の集落が存在したことも想定できる。また、主な生業は木製品製作であるが、使用痕がある鍬などの農具や石包丁が出土していることや粃殻痕がある土器が出土していることから、水田耕作をおこなっていたことは明確である。

集落では、用途に即応した樹種選択を行い、適切な樹木を持続的に供給して幾種類もの木器を加工生産している。加工を容易にするため、自然流路に材木や素材を水漬し、加工具の

製作にはじまり、素材確保から製作まで一連の作業をおこなっていたことが窺える。

遺構 302 の 2 層は、岸辺（肩部分）の流路ベース土と類似することからも、流水による肩崩れないしは、岸辺の樹木の伐開などが原因しての崩壊土壌と考えられる。木材資源確保・水田開発による古環境の急激な変化を起因として、自然流路が埋没し木製品の製作活動の中断あるいは終焉があり、その時期は前期新段階前半であると土器から推定することができる。

立野遺跡が位置する周参見が近・現代まで海路の要衝であったように、弥生時代前期においても同様に、東日本と西日本を結ぶ海上ルートの津（港）を背景に遺跡が立地すると解釈することもできる。

土器・石器・木製品の内容は、縄文時代から弥生時代に移行する過渡期を示すものであるとともに、和歌山県南部地域と言う地域性を顕すものでもある。当地に於いて、どのように弥生文化を受け入れたかを示す好資料であるとともに、農具がどのように変化していったか、木製品の木取り、樹種選定は地域性なのか、あるいは時代を顕すものかなど、当該期の木工を考える上では重要な発見であると言える。



広鋤出土状況



泥除出土状況



容器・横匙出土状況



弓出土状況

古代の流路跡から木製品が出土 —すさみ町 立野遺跡—

公益財団法人 和歌山県文化財センター 寺 西 朗 平

1. はじめに

遺跡の所在するすさみ町は和歌山県南部の西牟婁郡に属し、その海岸線は周参見湾に代表されるような入り江と岩礁・断崖が入り組んだリアス式海岸が続く熊野枯木灘海岸県立自然公園の一部となっている。立野遺跡は現在の周参見湾から2 kmほど東に位置する平野に所在する、弥生時代前期・中期、古墳時代から古代にかけての遺跡である。

現在、周参見川は立野遺跡の北約700mの位置を西流しているが、もとは立野遺跡の範囲内を經由し、すぐ西側にある独立丘陵を迂回して流れ周参見湾へ流れ込んでいたものと推定されることから、今回の調査によって検出された流路は、旧周参見川の河道であると考えられる。

今回の発掘調査は平成24年11月から平成25年2月にかけて実施し、1区～6区まで6ヶ所の調査区を設定した。立野遺跡は平成22年度にも発掘調査が実施されており、今回の調査における調査区は前回の調査区に隣接している。(図2)

2. 調査の成果

1区からは弥生時代前期及び古墳時代の浅い溝を検出したほか、古代の水田に伴う畦畔を検出した。流路が検出されたのは3、4、5、6区であり、弥生時代前期・中期、古墳時代、古代の流路が重複して存在し、時期によって河道が少しずつ移動していた事を確認した。

弥生時代前期の流路跡からは土器、石器等が出土しているが、流路内における倒木、木片等の出土は少なく、木製品等が多量に出土した前回の調査における状況とは異なっている。弥生時代中期の流路跡は弥生時代前期の流路跡にほぼ重なるが、幅が大きく広がっており、上端が不明瞭であることから、滞留を繰り返していた可能性がある。流路内からは土器、木片等が出土した。

古墳時代の流路は重複する古代の流路に切られており、幅は不明であるが3区の南西隅

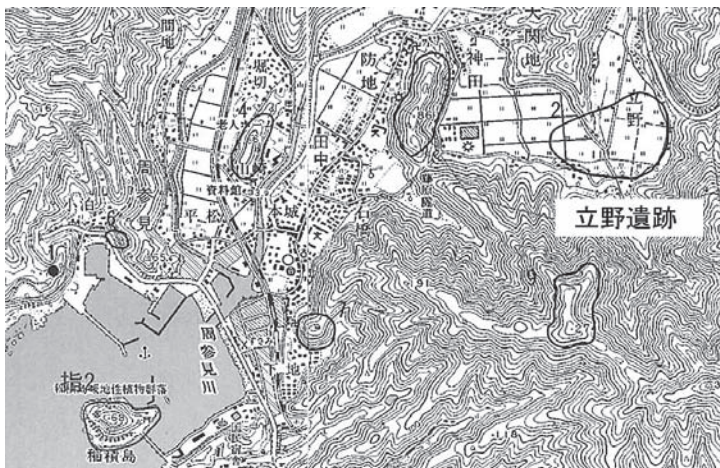


図1 遺跡の位置

で右岸の流路底と判断される傾斜を検出したことから、それまでの流路に比べ、より独立丘陵側に幅を広げているか、河道を移動させている可能性を指摘できる。また、遺物は少量であるが須恵器(坏)の小片が出土している。

古代の流路は3区においてその左岸の一部を検出しているが、護岸のためと考えられる整地の痕跡と2列の杭を確認することができた。1区

では同時期の水田遺構とそれに伴う畦畔を検出しており、それに関連した遺構である可能性がある。また流路跡内では多量の木片がまとまって出土する箇所が複数あり、箱状の木製品の一部分と考えられる遺物が出土した。



写真1 調査地の航空写真（南から）



図2 調査区位置図



写真2 古代の流路に伴う杭列



写真3 木製品出土状況（古代）

3. まとめ

今回の調査では、各時期における流路の位置や流況等を確認することができた。流路はいずれの時期においても木質遺骸を多量に含む土が埋土となっており、底には細砂及びシルトが堆積している。これは上流から流されてきた木片など多量の木質遺骸によって水流が妨げられた結果河道が位置を変え、その後しばらくは細砂やシルトが堆積するような流況が続いたものの再び木質遺骸の堆積が繰り返されたことによると推定される。今後の詳細な分析を待たなければならないが、理由として上流のそれほど離れていない位置に集落が存在したことによる等が考えられる。

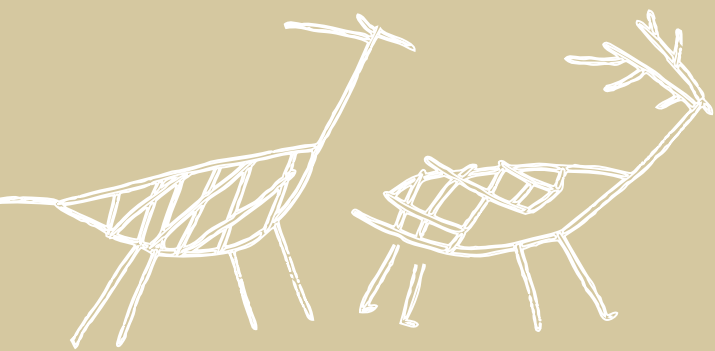
また、6区において検出した弥生時代前期・中期の流路の堆積状況は左岸（東側）にシルトが堆積し、西側へ向かうほど粗砂・礫が目立つ状況であり、今回の調査地から南へ延びる流路は、独立丘陵に沿ってここから大きく西側へカーブを描いていたことが推定される。

地宝のひびき
—和歌山県内文化財調査報告会—
資 料 集

発行日 平成 25 年 9 月 1 日発行

発 行 公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8404 和歌山市湊571-1
TEL:073-433-3843 FAX:073-425-4595
URL <http://www.wabunse.or.jp>

印 刷 株式会社ウイング



地宝のひびき ―和歌山県内文化財調査報告会― 資料集

- | | |
|---|-----------------------------|
| ・近年の和歌山県内の発掘調査 ―和歌山県内の発掘調査を楽しむ4つのポイント― | 田中元浩(和歌山県教育委員会) |
| ・有間皇子墓の有力地から発見された副葬品 ―御坊市 岩内1号墳・3号墳の出土遺物― | 前田和彦(御坊市教育委員会) |
| ・熊野信仰のかたち ―新宮市 熊野阿須賀神社境内の御正体― | 小林高太(新宮市教育委員会) |
| ・地震痕跡と水田状遺構 ―和歌山市 井辺遺跡の発掘調査― | 藤薮勝則(公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団) |
| ・初期須恵器が発見された遺跡 ―和歌山市 平井Ⅱ遺跡の発掘調査― | 井石好裕(公益財団法人 和歌山県文化財センター) |

公益財団法人 **和歌山県文化財センター**

〒640-8404 和歌山市湊571-1 TEL:073-433-3843 FAX:073-425-4595 URL:[//www.wabunse.or.jp/](http://www.wabunse.or.jp/)



平成25年度 文化庁文化芸術振興費補助金(地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業)